



2011年度 博士学位請求論文

社会的比較における第三者の影響

東洋大学大学院社会学研究科社会学専攻
博士後期課程 4519090002 号

大久保 楊俊



2011年度 博士学位請求論文

社会的比較における第三者の影響



東洋大学大学院社会学研究科社会学専攻

博士後期課程 4510090002 番

大久保 暢俊

目次

序章：社会的比較の実態と問題の意義.....	3
第1章：社会的比較過程理論とその後の展開	
第1節：社会的比較過程理論.....	6
第2節：自己評価の目標.....	9
第3節：自己高揚の目標.....	12
第4節：自己改善の目標.....	15
第5節：主体の能動性と認知プロセス.....	17
第6節：社会的比較における他者の存在意義.....	20
第2章：社会的比較の適応機能と比較状況における第三者	
第1節：社会的比較過程理論の背景.....	23
第2節：社会的比較による評価の意味.....	27
第3節：社会的比較の目標と適応機能.....	30
第4節：比較状況における第三者.....	33
第5節：仮説の導出.....	37
第3章：比較状況における第三者の影響と機能の分析	
第1節：概要.....	44
第2節：第三者の視点取得が 社会的比較による自己評価に与える影響（研究1）.....	45
第3節：第三者の集団成員性と 社会的比較による評価の関係（1）（研究2）.....	51
第4節：第三者の集団成員性と 社会的比較による評価の関係（2）（研究3）.....	62
第5節：第三者の注目する基準と 社会的比較による評価の関係（研究4）.....	71
第6節：第三者の評価内容と 社会的比較による評価の関係（研究5）.....	78
第7節：本章のまとめ.....	83
第4章：第三者の相対評価にかかわる個人特性と社会的比較傾向の関連	
第1節：概要.....	85

第2節：自己意識特性と社会的比較傾向の関係（研究6）	85
第3節：評価懸念と社会的比較傾向の関係（研究7）	90
第4節：対人ネットワークの独自性と 社会的比較傾向の関係（研究8）	93
第5節：本章のまとめ	97
第5章：総合考察	
第1節：実証知見のまとめ	98
第2節：自己評価の手がかりとしての社会的比較	100
第3節：社会的比較による自己評価の適応的意義	103
第4節：本研究の問題点と今後の展望	105
引用文献	106
謝辞	117
付録	118

序章：社会的比較の実態と問題の意義

自己を他者と比べることは、多くの人にとって自明な経験である。比較経験の有無や比較内容を尋ねた調査によると、青年期や成人期の多くの人々が他者との比較を経験しており、その内容も多岐にわたっている。たとえば、アメリカ人を対象にした Wheeler & Miyake (1992) の研究では、学業成績や人との付き合い方など、多様な側面で比較をしていることが明らかにされた。

また、さまざまな年代の人が比較を行っており、歳を重ねることで比較の内容も変わってくる。日本の大学生と成人を対象にした高田 (1994) の研究では、大学生、成人ともに“意見”や“能力”，または“性格”などで他人と比べていることが多く報告された。また、両年代の違いに注目すると、大学生では容姿と外見が比較の内容として多くあげられたのに対し、成人では意見と態度が多く選択された (表 0.1 参照)。

表 0.1 大学生と成人の比較内容

比較の内容として記述された頻数(大学生)		比較の内容として選択された割合(成人)	
内容	頻数 (%)	内容	割合 (%)
容姿・外見	23.6	意見・態度	77.2
能力	17.7	行動	42.9
態度・意見	16.0	才能・能力	41.4
性格	16.0	性格	38.4
行動	10.1	生き方	37.8
パフォーマンス・結果	6.3	生活状況	21.3
生き方・生活態度	4.2	容姿・外見	17.1
将来・目指す方向	2.1	その他	0.6
その他	3.8		

注) 高田 (1994) より作成。頻数は、自由記述の総数に対する各々の割合。

人間の社会的行動を理解する上で、他者との比較は重要な心的機能である。それゆえ、さまざまな思想家の著述において、比較の重要性が言及されてきた。たとえば、アリストテレス、ベンサム、ルソー、カント、マルクスなどによる古典的な著述の中には、比較をする事で世界を認識する人間観が見出される (Suls & Wheeler, 2000)。また、近年のグローバル化社会についての議論では、他者との比較により相対的貧困を認識しやすいがゆえに、人々が不満を抱くこ

とが指摘されている (e.g., Young, 1999)。

社会心理学やその周辺領域に限定しても、他者との比較は古くから注目されてきた現象である (Cooley, 1902; James, 1890; Mead, 1934)。実証を重視する心理学的社会心理学に限定するならば、1954年に *Human Relation* 誌に掲載された、Leon Festinger による社会的比較過程理論が研究の嚆矢となる。Festinger (1954) の社会的比較過程理論では、他者との比較、すなわち“社会的比較 (social comparison)”の生起する条件や機能が体系的に論じられた。その後、多くの実証研究がおこなわれ、50年以上経った現在でも関連する論文が提出され続けている。この特徴は、同じく Festinger の代表的な理論である認知的不協和 (Festinger, 1957) についての論文数と比べると明らかとなる。図 0.1 に示されるように、認知的不協和研究の数は理論が提出されてから一定の期間が過ぎたのちに減少しているのに対し、社会的比較研究の数は年々増え続けている。これは社会的比較研究が現在でも発展していることを示す一つの指標である。

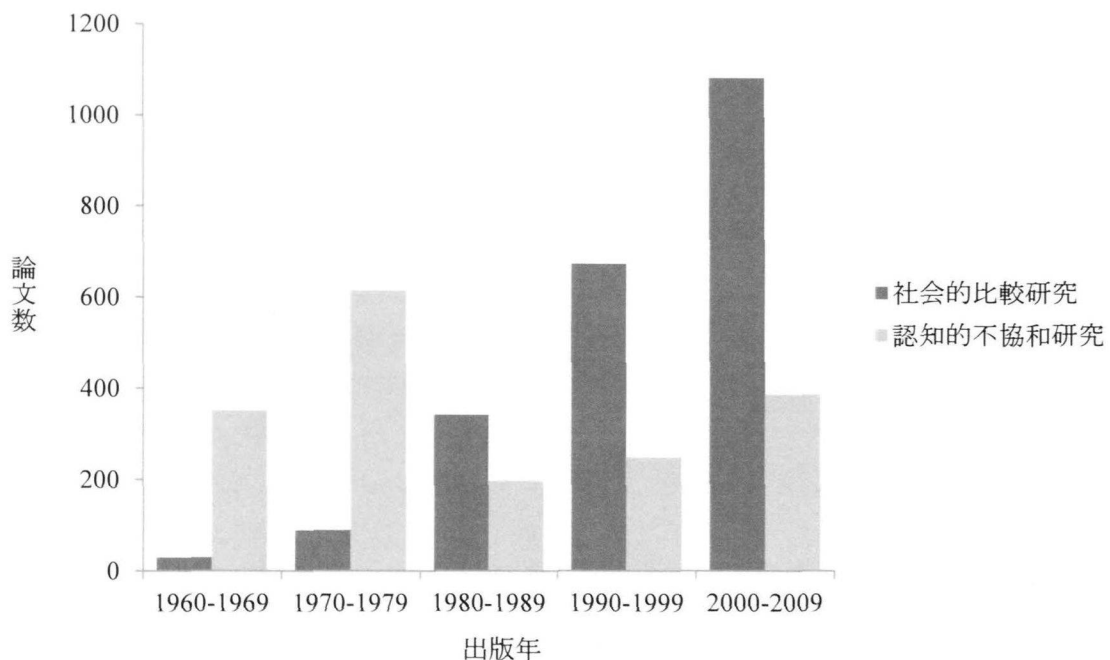


図 0.1 社会的比較と認知的不協和の研究数の推移

PsycINFO で “social comparison”, “cognitive dissonance” のいずれかにサブジェクト登録された論文をカウントした。

本稿では、個人の心的機能としての社会的比較に着目し、比較状況にかかわる第三者の影響を実証した。第 1 章では、Festinger (1954) の社会的比較過程理

論を出発点とし、その後の研究を選択的に概観した。第 2 章では、社会的比較による評価の意味を検討した。その後、社会的比較の適応機能に着目し、実証研究のための仮説を導出した。具体的には、比較状況における第三者の存在が、社会的比較による評価や比較傾向に影響を与えるとの仮説を導出した。第 3 章と第 4 章では、個々の仮説について実証した。第 3 章では、比較状況に第三者の要因を配置する実験的手法を用いて、社会的比較による評価が系統的に変化することを明らかにした。第 4 章では、社会的比較傾向と個人特性の関係を検討した。それにより、第三者の相対評価を推測する過程が、いくつかの心理特性と密接に関連している可能性を示した。最後の第 5 章では、実証研究のまとめと問題点、社会的比較研究や自己評価研究との関連を考察した。以上の理論的、実証的な検討を通じて、第三者が注目、評価する状況で、社会的比較の特質が明らかになるとの結論を導いた。

第1章：社会的比較過程理論とその後の展開

第1節：社会的比較過程理論

Festinger (1954) の社会的比較過程理論は、非公式の社会的コミュニケーションの理論 (Festinger, 1950) を拡張する目的で提出された。非公式の社会的コミュニケーション (Informal social communication: ISC) とは、集団内で自然に生起する対人コミュニケーションのことである。Festinger (1950) は、この対人コミュニケーションの源泉として、個人に作用する社会的圧力を中心とした一連の仮説を提出した。具体的には、意見や行動の斉一性を求める心理的な力が契機となり、特定の対人コミュニケーションが現出すること、およびその心理的影響を命題化したのである。

非公式の社会的コミュニケーションの理論では、他者の意見が自身の意見形成に大きな役割を果たしていることが述べられた。つまり、意見の形成過程における自他の比較の重要性がこの理論によって明示されたのである。そして、この理論に続く社会的比較過程理論では、意見形成と同様に、能力評価でも自他の比較が行われていることが述べられた。

社会的比較過程理論は、9つの仮説、8つの系、8つの展開、および補足で成り立っている。Festinger (1954) は、間違っただ意見や不正確な能力評価は致命的であるため、人は正確な評価をする必要があることを指摘した。ここから、自らの意見や能力を正確に評価しようとする動因の存在が仮説1として導かれた。仮説2では、客観的で非社会的な手がかりを用いて自己評価ができない場合に他者との比較が用いられることが導かれた。さらに、仮説3では、自己と他者を比較する傾向は、その他者との意見や能力の差異が増えるほど減少することが導かれた。これは、後に“類似性仮説”と呼ばれ、多くの研究者が注目した¹。さらに、能力における向上性の圧力 (仮説4)、能力変化の非社会的な制約の存在 (仮説5)、比較の停止に伴う敵意と侮蔑 (仮説6)、集団の重要性と斉一性 (仮説7)、属性の違いによる比較範囲の縮小 (仮説8)、集団内の立場による斉一性の相違 (仮説9) と続いている (表1.1参照)。

¹ 具体的に類似性仮説を述べているのは系3Aである。

表 1.1 社会的比較過程理論の仮説, 系, 展開

- 仮説 1 : 人間には自らの意見や能力を評価しようとする動因が存在する。
- 仮説 2 : 客観的で非社会的な手段を用いることができない場合, 人は自らの意見や能力を他者のそれと比較することによって評価する。
- 系 2A : 物質的, 社会的比較の双方が不在である時, 意見や能力の主観的評価は不安定になる。
- 系 2B : 自らの意見や能力についての客観的, 非社会的な基準が容易に用いられるとき, 人は他者との比較によって自らの意見や能力を評価しようとしなないであろう。
- 仮説 3 : ある特定の他者と比較をする傾向は, その他者の意見や能力と, 自分の意見や能力との間の差異が増えるほど減少する。
- 系 3A : 比較可能な人物の範囲の内, 自分の能力や意見と近い他者が比較のために選ばれるであろう。
- 系 3B : かけ離れた他者との比較しか出来ない場合, 人は自らの意見や能力の正確な主観的評価ができないであろう。
- 展開 A (仮説 1,2,3 より) : 意見や能力の主観的評価は, 自らの意見や能力と近いと判断された他者との比較が可能な時に安定する。
- 展開 B (仮説 1,2,3 より) : 意見や能力が自分のそれといくぶん違う他者との比較は, 当該の意見や能力の自己評価を変える傾向を生むであろう。
- 展開 C (仮説 1,系 3B より) : 能力と意見双方において, 人は他者が自己と近しい状況よりも, 他者がとても異なっている状況の方が惹きつけられないだろう。
- 展開 D (仮説 1,2,3 より) : 意見や能力の点において, グループ内での不一致の存在は, そのグループメンバーの一部による不一致を低減するような行動を導くであろう。
- 仮説 4 : 能力の場合には向上性の動因がある。意見の場合, この動因は大部分欠けている。
- 仮説 5 : 自らの能力を変えるのが難しい, または不可能でさえある非社会的な制約が存在する。これら非社会的な制約は意見においては一般に存在しない。

表 1.1 社会的比較過程理論の仮説，系，展開（続き）

展開 D1：意見や能力の点で不一致が存在する時，自らの立場をグループ内の他者に近くなるように変えようとするであろう。

展開 D2：意見や能力の点で不一致が存在する時，グループ内の他者を自分自身に近づけるように変えようとするであろう。

展開 D3：意見や能力の点で不一致が存在する時，グループ内において自分とかけ離れた他者との比較を止めようとするであろう。

仮説 6：他者との比較の停止は，それらの他者と継続された比較が不快な結果を意味する限り敵意や侮蔑を伴うであろう。

系 6A：意見の場合，他者との比較の停止は敵意や侮蔑を伴うであろう。能力の場合に，このことは一般的に真実でない。

展開 E（仮説 1,2,3 より）：ある特定の能力や意見を評価する動因の強さが増えるどんな要因でも，能力や意見に関する“斉一性への圧力”を増すであろう。

仮説 7：特定の意見や能力について比較をするためのグループの重要性が増すどんな要因でも，グループ内における能力や意見の斉一性の圧力は増すであろう。

系展開 E：能力または意見の重要性が増すこと，または当面の行動との関連性の増大は，意見や能力についての不一致を低減させる圧力を増大させるであろう。

系 7A：グループに対する魅力が増大するにつれて，グループ内における能力や意見についての斉一性への圧力は強くなるであろう。

系 7B：意見や能力とグループとの関連が強くなるにつれて，能力や意見についての斉一性への圧力は強くなるであろう。

仮説 8：自らの意見や能力からとてもかけ離れている人が，その違いと一致する属性で自らと違っていると知覚される場合，比較可能な範囲を狭める傾向は強まるであろう。

仮説 9：グループにおいて意見や能力の範囲がある場合，斉一性圧力における 3つの現れの相対的な強さは，グループの慣習や流儀から遠い人と近い人で違ふであろう。特に，グループの慣習に近い人はそうでない人よりも，他者の立場を変える強い傾向があり，相対的に比較の範囲を狭める傾向は弱く，自らの立場を変える傾向はさらに弱いだらう。

社会的比較過程理論で想定される比較の影響範囲は、個人の心的世界全般に及ぶ。“個人の心的世界全般”とは、彼の共同研究者である Kurt Lewin の提唱した、場の理論における生活空間 (life space) 全域のことである (Cartwright, 1951)。したがって、社会的比較過程理論は、自己の認知、行動、動機づけだけでなく、個人の認識する環境に対する評価、感情などの要因も同一の位相として取り扱われる²。

しかし、その後の研究は、Festinger 自身の企図した文脈を離れ、自己研究の一つのトピックとして多くの研究が進められた (中村, 1990)。そこで、次節以降では、自己研究で用いられる目標 (動機づけ) の区分から社会的比較研究を概観した。このような視点による研究分類は、多くの論者が採用しており (Biernat, 2005; Suls & Wheeler, 2011; 高田, 2011; Wood, 1989), 社会的比較研究を概観する上ではもっともオーソドックスなスタイルである。

社会的比較の目標とは、比較による心理的な作用方向である。これを社会的比較の動機づけ (Helgeson & Mickelson, 1995) や機能 (高田, 2004) とする研究者もいる。しかし、どの語を用いるにせよ、“なぜ比較がおこなわれるのか”という目的論的観点から比較の様相を分類している点では、同じ概念として互換可能である。

社会的比較の目標は複数存在し、その数と内容は論者により異なる。たとえば Helgeson & Mickelson (1995) は、自己評価、他者との絆、自己改善、自己高揚、愛他性、自己破壊の 6 つを挙げている。また、高田 (2004) は自己評価、自己高揚、自己融合の 3 つを挙げている。しかし、多くの論者で共通に指摘されるのは、自己評価、自己高揚、自己改善の 3 つである (Wood, 1989)。この分類は、自己にかかわる動機づけと同一である (伊藤, 2002)。そこで、本稿ではこの 3 つの分類に着目し、これらの目標ごとに研究知見を概観する。

第 2 節：自己評価の目標

Festinger (1954) は、自らが置かれた環境で何をすることができて、何をすることができないのかを知ることが、人にとって重要であると述べた。そこから、環境の中での正確な自己把握を人は求めると仮定したのである。これは、社会的比較における自己評価の目標として広く知られることになった。この目標の実証的な証左として、Wheeler (1966) の研究が挙げられる。彼は、自分と同程度の順位の他者が選好されやすいことを、順位パラダイムを用いて実証した。

² この事態は社会的比較過程理論と非公式の社会的コミュニケーションの理論、および要求水準との関連を検討することで明らかとなる。詳しくは第 2 章で議論する。

同様の結果はいくつかの研究で報告されている (Gruder, 1971; Gruder, Korth, Dichtel, & Glos, 1975; Wheeler, Koestner, & Driver, 1982)。

また、社会的比較過程理論の系 3A, いわゆる“類似性仮説”では、人は自分と似た他者との比較を追求すると Festinger (1954) は述べた。自己評価の目標下において、この仮説は特に重要である。なぜなら、自分とかけ離れた他者との比較では、自己評価は安定しないからである (系 3B)。したがって、自己評価の目標の達成は、自分と比較他者の類似性に大きく依存することになる。

しかし、その後の研究では、人は非類似他者への選好を示すことも報告されている。たとえば、Wheeler et al. (1969) は、自らが行ったテストの得点範囲が不明確な場合、非類似他者が選択されやすいことを実証した。これは、得点範囲の探索として解釈されており、類似他者との比較を選好する自己評価の目標とは区別される。また、自らにとってなじみの無い領域では、事例 (example) として非類似他者と比較をすることも報告されている (Arrowood & Friend, 1969; Thornton & Arrowood, 1966)。

このような状況の中で、Goethals & Darley (1977) は、他者との類似という概念が曖昧であることを指摘した。たとえば、ある国語のテストで自分が 80 点を取ったとする。この時、自分と類似した他者とは、遂行結果であるテスト得点で似た他者の場合もあれば、自分と同じような境遇や属性を持つ他者の場合もある。Wheeler (1966) の研究では、前者を類似他者と想定している。しかし、この国語のテストの例で考えると、同じ 80 点を取った他者でも、外国人である場合と自分と同じ国の人である場合とでは、比較の意味が異なることは容易に想像できる。

Goethals & Darley (1977) は、社会的比較によって真に知りたいのは特性や気質などの目に見えないものであると考えた。たとえば、特性である能力は遂行から推測するしかない (Darley & Goethals, 1980)。しかし、遂行は能力の一部分しか説明できない。なぜなら、遂行には、努力、運、課題の難易度、練習の度合いなど、能力以外の要因が交絡しているからである。また、表明された意見でも同様に、一時的な興味関心や単純な好き嫌いなど、さまざまな要因が交絡している。したがって、社会的比較によって特性や気質を推測するには、単純に遂行結果や表明された言明で似ていることではなく、それらに関連する属性で似ていることが重要となる。遂行や表明された意見に関連する属性で類似した他者と比較をすれば、交絡要因を排除した推測が可能となる。したがって、比較他者として相応しいのは、関連属性において類似した他者ということになる。このように、Goethals & Darley (1977) は、帰属理論 (Kelley, 1973) の観点から社会的比較の再定式化を図ったのである。

環境を客観的に知覚しようとする人間観は、当時の社会心理学における伝統

の本質についており (e.g., Heider, 1944), 関連属性の類似は理論的に納得できるものであった。いくつかの実証研究においても, 関連属性で類似した他者との比較が促進されることが報告されている (Miller, 1982; Suls, Gastorf, & Lawhon, 1978; Zanna, Goethals, & Hill, 1975)。

関連属性の類似仮説においては, 合理的で規範的な推論によって自らの特性や気質を客観的に知ろうとする人間観が前提となる。しかし, その後の研究で, そのような前提は限定された条件でしか適当でないことが明らかとなった。たとえば, Miller (1984) は, 遂行に関連しないことが明らかとなっている属性であっても, その属性が自己スキーマとして機能していれば, 関連属性の類似の程度にかかわらず自分と同じ属性の他者が選好されることを実証した。具体的には, 性に関連した自己スキーマを持っている実験参加者では, 課題が性別に関連しているかどうかという情報にかかわらず, 同性の平均点を知ろうとする傾向にあった。それに対し, 性に関連した自己スキーマを持っていない実験参加者では, 課題の出来具合が性別と関連すると教示された場合にのみ同性の平均点を知ろうとした。Miller (1984) の実験は, 自己スキーマの有無によって比較他者の選好が変わることを示すことで, 関連属性による類似仮説の限定条件を明らかにしたといえる。

さらに近年では, Martin, Suls, & Wheeler (2002) が関連属性と遂行について新たな視点を提供している。彼らは, Jones & Regan (1974) と Smith & Sachs (1997) の知見をベースにプロクシー比較モデルを提唱した。このモデルでは, 比較他者の遂行が“本人の最大限の努力を反映した結果”であるということが(知覚者にとって)不明な場合に, 関連属性の情報が自己評価に影響すると想定された。反対に, 比較他者の遂行が本人の最大限の努力を反映した結果であると分かっている場合には, 関連属性の情報は考慮されず, 比較他者の遂行結果のみが自己評価に影響すると想定された。Martin, Suls, & Wheeler (2002) の実験では, ハンドグリップを握る課題を用いてプロクシー比較モデルが検証された。その結果, 比較他者が彼(または彼女)自身の遂行について最大限努力したとの情報を与えられた実験参加者では, 関連属性の情報は自己評価に影響しなかった。それに対し, そのような努力についての情報が不明確な場合には, 手の大きさ(関連属性の情報)が自己評価に影響していた。

上記の Miller (1984) や Martin, Suls, & Wheeler (2002) の実験は, 関連属性で類似した他者が選好される条件を明らかにしたという点では Goethals & Darley (1977) の仮説を支持する研究といえる。しかし同時に, これらの研究は, 関連属性における類似性の効果が限定的であることも示した。すなわち, 性についての自己スキーマを持っている人では関連属性の情報が無視されることを Miller (1984) は明らかにし, 比較他者の“最大限の努力をした”という情報が関

連属性の情報よりも優先されることを Martin, Suls, & Wheeler (2002) は明らかにしたのである。

この他にも、集団成員性 (Brewer & Weber, 1994) や愛着 (Gabriel, Carvallo, Dean, Tippin, & Renaud, 2005), 社会的比較傾向の個人差 (Michinov, E. & Michinov, N. 2001) などの要因も自己と比較他者の類似性の知覚に影響することが報告されており、類似性にまつわる議論はさらに複雑な様相を呈している。類似性を巡る議論の難しさは、“比較の前提としての類似性”を規定できないところにある。社会的比較のために類似他者が選択されるとしても、類似他者であると知覚した時点で既にある程度の比較が行われていなければならない。これは“社会的比較のパラドクス”として知られている。このパラドクスは、社会的比較過程における理論的、分析的な最小単位について合意が無いことに起因する (Wood, 1996)。

このパラドクスを解消するには二つの方法がある。ひとつは、社会的比較を認知メカニズムの問題に帰することで、比較プロセスを実証レベルにおける変数と対応づける方法である。この対応づけにより、類似性検証と比較プロセスを別個に理解することが可能となり、パラドクスが解消される。もうひとつの方法は、社会的比較における類似性判断を前提としない方法である。生態学的環境における限定合理性の観点から考えると、これまで述べてきた類似性判断は規範的な推論である。規範的な推論における類似性判断は、全ての人間と比較可能であるということが含意される。しかし、人が実際に比較を行う生態学的環境は、そのような純粋な論理空間とは別次元である。そのような推論は可能ではあるが、実際の環境内では必要とされない判断である。つまり、規範的な推論に基づく類似性判断は“可能ではあるが必然的ではない”心的プロセスとなる。これは、類似性判断を相対的に高次の認知過程の結果に帰することでパラドクスを解消する方法である。この立場を採用すると、比較他者選択のための関連属性の類似は因果方向を取り違えた疑似問題となる。

本稿では、前者の立場を第 5 節で検討する。そこでの議論において、自他の類似性が比較それ自体とは区別される別の変数に置き換えられていることが理解される。また、後者の立場に相当する議論を第 2 章で検討する。そこでの議論において、関連属性の類似を判断するのとは別次元で社会的比較が生起している可能性が示される。

第 3 節：自己高揚の目標

社会的比較にかかわる目標で、自己評価以外の目標も存在していることは、

すでに 1960 年代から指摘されていた。たとえば、Latané (1966) は、自身の特性や立場をより望ましくするために社会的比較が行われていることを指摘した。また、Hakmiller (1966) は、上位他者との比較が自己にとって脅威となるため、そのような比較を避けて下位他者との比較がおこなわれることを、先に述べた順位パラダイムを用いて実証した。同様に、Brickman & Bulman (1977) も、比較をすることが脅威となるために比較それ自体を避けることがあることを指摘した。

もし、正確な自己評価を得るためだけに社会的比較が行われているのであれば、自分よりも優れている他者は有用な情報源となる。特に社会的比較過程理論の類似性仮説と向上性の仮説（仮説 4）からは、自らと同程度でありながらも上位に位置する他者との比較が予測される。しかし、すでに述べたように、自分よりも優れている他者との比較は、自らが劣位であることが明らかとなるため、自尊心にとって脅威となる。この場合、正確な自己評価を得ることを犠牲にしても、上位他者との比較を避けたり、下位他者との比較が選好されたりする。

自尊感情への脅威となる比較を避け、自分にとって都合のよい比較をする心的傾向は、Wills (1981) の提唱した下方比較理論と、Tesser (1988) が提唱した自己評価維持モデルにおいて中心的な位置を占めている。Wills (1981) の下方比較理論では、人は自尊心が脅かされた際に自分よりも不幸な他者との比較を行うことが述べられている。この理論は、以下に示す一つの基本原理と二つの補助原理で構成されている。

基本原理：自らよりも不幸な他者との比較を通じて、人は主観的幸福感を増すことができる。

補助原理：より低い地位の人に対して下方比較をする傾向にある（ターゲットの原理）。

補助原理：人は、下方比較に対してアンビバレントな態度をもつ（アンビバレンスの原理）。

ターゲットの原理で述べられている“より地位の低い人”とは、自分とは違う集団に属する他者を比較相手に選ぶことを意味する。これは、自己評価の目標で重視される関連属性の類似仮説からは導き出すことができない。この原理が成り立つ理由として、Wills (1981) は二つの理由を指摘している。ひとつは、明確に地位の低い他者は軽蔑するのが容易であり、相手を貶めて評価するのが主

観的に正当であると思いやすいからである。もうひとつは、下方比較の対象と自分が似ていると、自らもそのような状態に陥ってしまうことが想像しやすく、不安を喚起させられてしまうからである。いずれの理由にせよ、正確な自己評価の目標だけでは説明できない現象である。

一方、アンビバレンスの原理は、不幸な他者と比較をする人が、必ずしもそのような比較を好ましいと思っていないことを意味する。自分よりも不幸な人と比較をして満足するということは、他者に対して表明しづらい (Wood & Wilson, 2003)。この原理は、自己に与える下方比較の影響にさまざまな交絡要因が存在することを示唆する。

下方比較理論の視点は常識的な考え方と一致しており、理解は容易である。しかし、実証知見は必ずしも明確な結果を示しているわけではない。いくつかの研究では、自尊心に脅威のある状況で、かつ下方比較の機会を与えられた人でムードが改善したことが報告されている (Aspinwall & Taylor, 1993; Gibbons & Gerrard, 1989)。また、下方比較により、脅威を感じている人のストレスの対処に肯定的な影響があることも確認されている (Wills, 1997)。これらの研究は、自尊心への脅威の対処方法として、下方比較が有効であることを示している。しかし、ターゲットの原理については、理論を支持しない研究が存在する。たとえば、Buunk, Van Yperen, Taylor, & Collins (1991) は、ストレス下にあるカップルが、よりストレスの少ない (すなわち自らよりも幸福な) カップルと話をしようとする傾向にあることを報告している。この結果は、より不幸な他者との比較を予測する下方比較理論では説明できない。今後は、これら研究知見との整合性が重要な問題として残されている。

自己評価維持モデルは、Tesser (1988) により提唱された自己と他者の評価についてのモデルである。このモデルでは、“比較”と“反映”の2つの過程が、肯定的な自己評価の維持のためにかかわっていると仮定される。比較過程は社会的比較に相当し、反映過程は高い価値を持つ人 (たとえば優れた遂行をした他者) と自分との間に何らかの結びつきを感じることで、自己評価に肯定的な影響を生じさせる過程に相当する。

自分より優れた他者に対して、この両過程は心理的に対照的な影響を与える。比較過程が生じた場合には、他者の優れた遂行との比較により自己評価が低下する³。それに対し、反映過程が生じた場合には、他者の優れた遂行の恩恵を受けて自己評価が上昇する。

この両過程は、“他者の遂行 (成績, 出来具合)”と“心理的な近さ (年齢, 経歴, 出身地などの類似性)”の要素から成り立つ。もし、他者の遂行が自分とほとんど変わらないのであれば、自己評価に与える影響は小さい。同様に、心理

³ また、比較過程では、自らよりも劣った他者との比較で自己評価が上昇する。

的に近くない他者であれば、自己評価への影響は小さい。つまり、他者の遂行については自分より優れているか、または劣っているかが重要で、心理的な近さについては近いほど重要なのである。

どちらの過程が生起するかは、遂行が自己定義領域に関与しているかどうかによって依存する。自己定義領域とは、その遂行の個人的な重要度である。もし、遂行が自己定義領域であった場合は比較過程が生起し、自己定義領域でない場合は反映過程が生起する (Tesser, Campbell, & Smith, 1984)。

このモデルでは、自己評価を維持するために、“自分と他者の遂行”、“遂行の関連性”、“心理的な近さ”を実際に、または認知的に変化させる力が働くとしている。その中で、反映過程と対比する形で比較過程は位置づけられている。ただし、反映過程は他者の遂行を参照する行為として広義の社会的比較であるとも考えられることから (高田, 2004)、自己評価維持モデルは、両過程とも自己高揚の目標を志向する個人の社会的比較についての理論であると解釈することができる。

上記の下方比較理論や自己評価維持モデル以外にも、自己高揚の目標を仮定した社会的比較にかかわる研究は多数存在する。論者により異論はあるが、平均以上効果やフォールスコンセンサスなどの現象の背後にも社会的比較のプロセスが存在する (Goethals & Klein, 2000)。自己高揚の目標の特徴は、たとえ現実と食い違っていたとしても自らにとって望ましい状態を希求する点にある。これは、自己評価の目標で強調される“素朴な科学者モデル”とは異なる人間観である。素朴な科学者モデルは、さまざまな要因を科学者のように分析することで自身や環境を認識する人間観を想定している (唐沢, 2001)。この人間観の重要な点は、客観的な基準から考えて不正確な認識を“エラー”と考え、そのような認識を非合理と考えるところにある。一方、自己高揚の目標下では、個人の快楽 (hedonic) 原則を最大にする人間観が想定されている。快楽原則を追求する個人は、場合によっては客観的で正確な認識を放棄してでも自分に都合の良いように自身や世界を解釈する。この視点は自己評価の目標にはない特徴である。

第4節：自己改善の目標

自己改善の目標は、古くはモデリングを社会的比較と関連づけて論じた Berger (1977) の指摘から、上位他者への接触を説いた Taylor & Lobel (1989) の研究などを挙げるることができる。上位他者との比較を避けることが予想される自己高揚の目標に対し、自己改善の目標下においては、逆に上位他者との比較が促進されることが予想される。特に能力比較でこの傾向は顕著である。な

ぜなら、自分よりも遂行レベルの高い他者との比較は、自らの欠点や足りないところを認識する上で有用だからである。

自己改善の目標にかかわる研究は自己評価や自己高揚の目標にかかわる研究と比べて多くはないが、自己高揚の目標との違いから Lockwood と Kunda による一連の研究をあげることができる (Lockwood & Kunda, 1997, 1999; Lockwood, Jordan, & Kunda, 2002)。すでに述べたように、自己高揚の目標下においては、上位他者との比較によって自尊心が脅かされ、自己評価の低下につながるものが予測された。それに対し、これらの研究では、下方比較理論や自己評価維持モデルとは異なり、上位他者との比較によって達成の動機づけが高まることで自己評価が上昇すると予測された。Lockwood & Kunda (1997) では、教師または会計士志望の女子大学生に対し、優れた業績で賞を獲得した教師、または会計士の新聞記事を読ませ、自身のキャリア成功について評定させた。その結果、賞を取った記事の人物が自らの望むキャリアの学生であった場合に、キャリア成功についての自己評価が肯定的であった。実験参加者にとって記事の人物は上位他者である。この実験結果は、たとえ上位他者であったとしても、自尊感情を脅かすだけの存在ではなく、自己にとって有用なロールモデルとして上位他者との比較が機能することを示唆する。

上位他者との比較か、それとも下位他者との比較かといった比較の方向性と、比較の目標を区別して考える立場からすれば (Wood & Lockwood, 1999)、自己改善の目標下における社会的比較は必ずしも自己高揚の目標と相互排他的な関係にならないこともあり、目標間の区別が困難な場合もある。たとえば、Collins (1996) の上方比較論では、上位他者との比較を通じて自己高揚の目標が達成される。このようなことから、自己改善を独立した目標と捉えない論者もいる (高田, 2004)。

しかし、自己の構築という観点から、自己改善と自己高揚の目標を区別することは可能である。たとえば、Lockwood & Kunda (1999) は、過去における肯定的な自己や、理想的な自己を想起すると、上位他者による自己評価への肯定的な効果が消失することを明らかにした。つまり、他者と区別される輪郭の定まった自己に注目すると、ロールモデルの効果が確認できなかつたのである。

自己改善と自己高揚の目標を区別する上で重要なのは、比較によって定位される自己の認知的可変性である。言い換えると、状況に一貫した自己を認めるか、それとも変わりうる自己を認めるかで比較の目標が変わると考えられるのである。特に、自らの状態をより良い方向へと変えるような心的傾向が、自己改善の目標の特徴といえる (Lockwood, 2002)。

また、このような自己の可変性は、文化的な自己観とも関係する。マーカスと北山による文化的自己観の議論によると、相互協調的自己観を持つ人は、他

者との関係に規定された状況依存的な自己観を有している（北山，1998）。さらに，そのような自己観を持つ人は，望ましくない自己の属性を見出し，それを改善しようと努力する。つまり，反省による自己向上を基本的な行為パターンとしているのである。それゆえ，相互協調的自己観を持つ人にとっての社会的比較は，自己改善の目標で行われやすいと予測される。この予測を検証した White & Lehman（2005）の研究では，失敗のフィードバックを受けた際，独立的自己観を有するヨーロッパ人に比べ，相互協調的自己観を持つアジア人で他者と比較をしようとする傾向が顕著であることが示された。

第5節：主体の能動性と認知プロセス

自己高揚や自己改善の目標による社会的比較研究が蓄積されるにつれ，比較をする主体の能動性が注目されるようになった。つまり，他者に代表される社会環境情報を受動的に知覚して処理する主体概念から，より能動的に状況を解釈，構築する主体概念を強調することになったのである（Goethals & Klein, 2000）。このような人間観の変遷は，社会心理学における社会的認知研究の影響を受けて比較時の認知プロセス研究を生み出した（Suls, Martin, & Wheeler, 2002）。

認知プロセスの研究が隆盛となる以前にも，Goethals & Darley（1977）に代表される研究は認知志向であったといえる。しかし，この節で検討される認知プロセスのモデルは，社会的比較をより一般的な心理過程と結びつけることが志向されている。

社会的比較における一般的な心理過程は，社会的判断のモデルに抱合される（Shaw & Costanzo, 1982）。社会的判断のモデルは，精神物理学的なレベル（Brown, 1953; Helson, 1964）から，より意味論的なレベル（Martin, 1986; Petty & Wegener, 1993; Schwarz & Bless, 1992）まで，複数の論者により提出されている。特に90年代以降は，意味論的な同化と対比のモデルを検証した実証研究が多数報告されている。同化と対比のモデルの多くは，文脈情報とターゲット刺激の評価の関係を形式化した視覚モデルである（e.g., Markman & McMullen, 2003）。

同化と対比についてのモデルを社会的比較研究に適用することにより，結果としての自己評価も同化と対比の二つの影響方向が区別されるようになった。Blanton（2001）は，社会的比較による同化効果と対比効果の概念的な定義として，比較他者の評価と遠い方向に自らの評価を定位することを対比効果，近い方向に定位することを同化効果とした。伝統的に，社会的比較研究では対比をデフォルトの効果とするのに対し，社会的認知研究は同化をデフォルトの効果とする場合が多い（Stapel & Koomen, 2001）。ただし，同化と対比は相互排他的

な関係ではなく、あくまで相対的な効果であることから (Mussweiler, Rüter, & Epstude, 2004), それらを方向づける要因の観点から認知プロセスを形式化したモデルが多い。

同化と対比に関するモデルの中で、特に社会的比較との関連が深いのは Mussweiler (2003) の選択的接近可能性モデル (selective accessibility model: SAM) と Stapel & Koomen (2000) の解釈比較モデル (interpretation-comparison model: ICM) である。この二つのモデルは、先行プライムに比較他者、ターゲットに自己を用いた実証研究を基にモデルを組み立てている点で、社会的比較の認知プロセスとして適切なモデルである。

選択的接近可能性モデルは、Mussweiler (2003) によって提唱された社会的判断のモデルである (図 1.1 参照)。このモデルでは、“基準の選択”、“ターゲットと基準の比較”、“評価”の3つの段階が想定されている。基準の選択は、いくつかの要因の影響を受ける。Mussweiler (2003) はこの要因として以下の三つを挙げている。第一に、比較をする際の間われ方である。これは、コミュニケーション相手とのやり取りの中で顕在的、または潜在的に基準が示されることである。たとえば、“アインシュタインに比べてあなたは頭が良いですか?”との問いは、基準を明示されている具体的な例である。第二に、記憶内でアクセシビリティの高い基準が選択されるということである (e.g., Herr, 1986; Wilson, Houston, Etling, & Brekke, 1996)。第三に、診断性の高い基準が選択されるということである。これは、客観的に能力を把握する際に適切な基準を選択することである。

このように基準が選択されると、次にターゲットと基準の比較段階に移行する。この比較段階は、SAM のコアプロセスである。比較の最初の段階では、ターゲットと基準の全体的な類似性診断が行われる。この結果、ターゲットと基準が類似していれば類似性検証のルートに進み、類似していなければ非類似性検証のルートに進む。類似性検証ルートでは、ターゲットと基準で類似した知識が活性化する。それに対し、非類似性検証ルートでは、ターゲットと基準の非類似に関する知識が活性化する。

評価の段階では、比較の段階で活性化された知識がターゲットの評価に統合される。社会的比較に限定して表現すれば、特定の他者と比較をして活性化した知識が自己評価として統合されるということである。その際、類似性検証ルートであれば同化、非類似性検証ルートであれば対比が帰結される。この評価の段階は、先行している知識が後続の評価に影響するという社会的認知研究の基本的な知見を反映しており (e.g., Higgins, Rholes, & Jones, 1977), SAM が意味論レベルのモデルであることを表している。

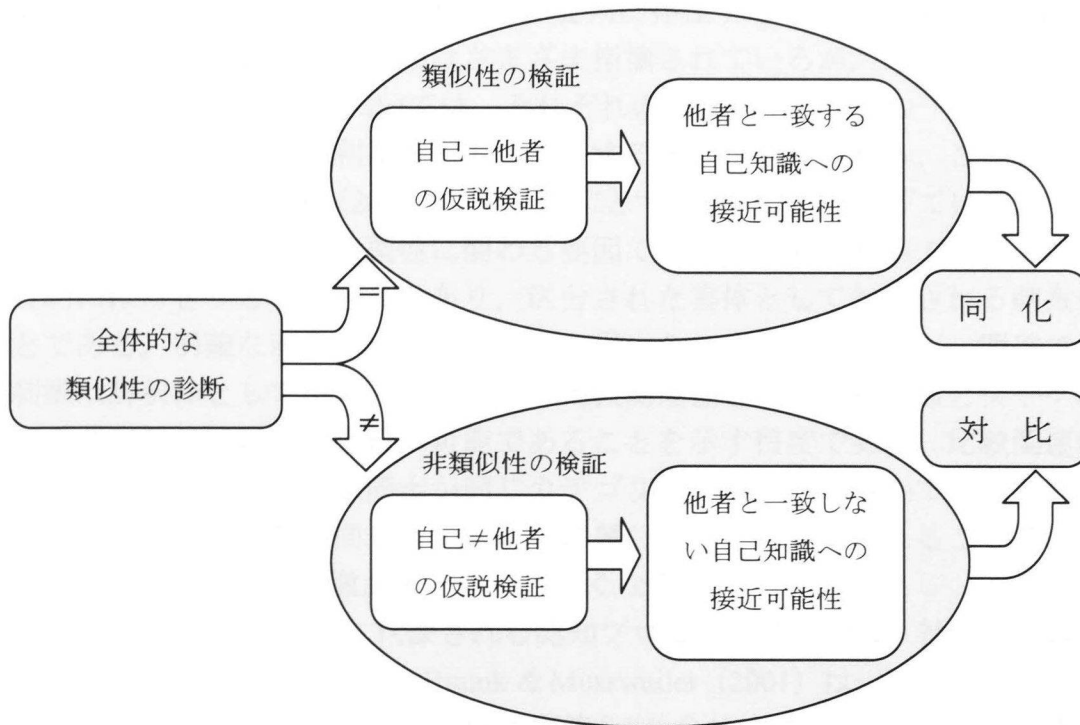


図 1.1 選択的接近可能性モデル
Mussweiler (2003) を基に作成

Stapel & Koomen (2000) による ICM は、同化と対比を決定する諸要因を抽象化したモデルである。このモデルでは、接近可能で適用可能な文脈刺激（社会的比較研究では比較他者に相当する）が解釈枠として利用されれば同化効果が帰結され、文脈刺激が比較基準として用いられれば対比効果が帰結されると想定される。

ICM は知識の利用可能性についての一般的モデルであり、同化を強調した社会的認知研究の伝統と、対比を強調した社会的判断研究の伝統を踏襲している。社会的認知研究では、同化をデフォルトの効果と考え、対比は文脈刺激の顕現性が高まりすぎた際の修正の効果である。それに対し、社会的判断研究では、対比をデフォルトとの効果と考え、同化は文脈刺激の極端さが中庸である場合の効果である。

社会的認知研究における対比の説明と社会的判断研究における同化の説明のいずれの説明も、全ての同化効果と対比効果を説明できないという点で不完全である (e.g., Herr, 1986; Martin, 1986)。そこで Stapel & Koomen (2001) は、それぞれの伝統を別個の知識利用モードとして概念化した。その結果、社会的認

知研究の伝統を継承した解釈枠の知識利用モードと、社会的判断研究の伝統を継承した比較基準の知識利用モードが並列に存在することになったのである。

同化と対比に影響する要因はさまざま指摘されているが、二つの知識利用モードを想定する ICM においては、それぞれの知識利用モードの一方だけに関連する要因に比べ、知識利用モードを決定する要因が重視される。この要因として、Stapel & Koomen (2001) は“明確さ”と“比較関連性”を挙げている。明確さとは、刺激の具体性や典型性に関わる要因である。刺激が明確であるとは、相対的にはっきりとした境界があり、区分された実体として知覚される刺激のことである。明確な刺激は比較基準として用いられやすいのに対し、明確でない刺激は解釈枠として用いられやすい。比較関連性とは、文脈刺激とターゲット刺激が類似しており、比較が可能であることを示す程度である。比較関連性における類似性とは、刺激同士が同じカテゴリーに属するか否かである。文脈刺激とターゲット刺激が同じカテゴリーに属していると知覚されることで、判断の係留点として文脈刺激が用いられやすくなる。

これら SAM や ICM に代表される認知プロセスのモデルは、社会的比較研究に新たな展開をもたらした。Buunk & Mussweiler (2001) は、この認知プロセス研究を含めたいくつかの新しい研究潮流を“社会的比較のルネサンス”と表現した。さらに近年では、比較時の脳画像の研究も報告されており (Fließbach et al. 2007)、今後はこれらのモデルと神経生理学的な基盤との関係も詳細に検討されるであろう。

第 6 節：社会的比較における他者の存在意義

前節で概観した認知プロセス研究の多くは、比較の生起する近接的な十分条件を検討することで、比較時の認知プロセスを明らかにした。その際、自己評価や自己高揚などの自己にかかわる目標を強調した社会的比較研究とは異なり、個人間の比較を可能にする情報処理を所与の条件とした。つまり、比較という現象の存在は保証されているのである。したがって、これら情報处理的観点からは、“どのように”比較が行われているのかを明らかにすることが主要な研究課題となる。

しかし、たとえ情報处理的観点を採用したとしても、社会的比較の存在意義を理解するには比較の目標を想定する必要がある。この点について、Mussweiler, Rüter & Epstude (2006) は、“認知的効率性”が社会的比較の目標であると主張した。もし、他者との比較に頼らずに能力や意見を査定しようとするならば、人は膨大な量の情報を処理しなければならなくなる。運動能力の査定を例にする

と、基礎身体能力やさまざまなスポーツの成績を総合的に判断することで、人は自らの運動能力を知ることができる。しかし、そのような総合的な判断を下すには多くの情報が必要であり、認知的倏約家 (Taylor, 1981) である人間が常時行っているとは考えられない。一方、他者情報に対応する自己情報のみにアクセスすれば、社会的比較による判断は可能である。たとえば、自身の運動能力を判断する際、野球しかしない友人と比べるのであれば、アクセスするのは野球についての自己情報のみでよいことになる。したがって、サッカーやそのほかのスポーツについての情報を使う必要がなく、認知的な負担が少ないのである。

このように、情報处理的観点を採用する研究者は、自己にかかわる目標とは異なるパラダイムで社会的比較を捉えている。しかし、どちらの観点を採用するにせよ、社会的比較に固有の他者存在の意義は明らかにされない。たとえば、自己にかかわる目標の観点で社会的比較を捉えたとする。しかし、自己評価や自己高揚の目標の達成は、社会的比較以外の方法でも可能であり、そのような方法は、社会的比較と同等か、それ以上に用いられていることが明らかにされている (Wood & Wilson, 2003)。つまり、自己にかかわる目標下での他者存在は、必ずしも優先度が高いとはいえない自己認識の手がかりでしかない。また、認知的効率性による観点で社会的比較を捉えたとしても、比較他者は自己にとって認知的負荷のかからない情報であるだけで、そのような情報源としてなぜ他者が必要とされているのかは説明できない。加えて、限られた情報で行われる“比較を通じての評価”の意義も不明である。つまり、自己にかかわる目標や認知的効率性による社会的比較の説明は、自己評価にとって他者が必要である理由や、他者存在の固有性や特異性という点において、どれも一部分しか説明出来ないのである。したがって、これらの説明を採用すると、診断性があり、かつ要約された客観的情報よりも比較情報を重視する実験結果 (Klein, 1997) や、第2節で議論した、当該の比較に関連のない属性の他者を比較相手として選好する実験結果 (Miller, 1984) の解釈が困難になってしまうのである。

比較他者の存在意義は、社会的比較の存在意義と同義である。社会的比較における他者の存在意義を理解するには、自己にかかわる目標や認知的効率性といった説明に帰するのではなく、社会的比較それ自体の特異性を明らかにしなければならない。それでは、社会的比較の特異性とはどのような点にあるのか。それは、社会的比較による“評価”が自己や他者、およびそれらの関係の様式を反映した認知を中心に成立していることである。この事態を理解するためには、社会的比較による評価の独自性を詳しく検討しなければならない。そこで、次章で Festinger の社会的比較過程論の起源となった二つの研究領域を検討し、社会的比較による評価の意味を明らかにする。そして、そこで明らかになった意

味から自己と他者の関係の様式として社会的比較を位置づける。この位置づけを通じて、比較他者に特有の存在意義が見出せると同時に、社会的比較に特有の目標が明らかとなるであろう。

第2章：社会的比較の適応機能と比較状況における第三者

第1節：社会的比較過程理論の背景

前章で議論した自己にかかわる目標や、比較時の認知プロセスに着目した研究は、社会的比較研究と自己研究の関連をより密接にした。その結果、社会的比較研究の嚆矢である Festinger の理論は、自己評価の目標の代表として理解されることになった。しかし、Festinger の使用する“評価 (evaluation)”という語は独自の意味を担っており、自己高揚や自己改善の目標と対比する意味で用いられたわけではない。また、認知プロセス研究で想定される“結果としての自己評価 (Alicke, LoSchiavo, Zerbst, & Zhang, 1997)”とも区別される概念である。

社会的比較過程理論における“評価”の概念は、意見の比較を能力の比較に適用する際に、妥当性 (validity) に置き換わる概念として使用された。非公式の社会的コミュニケーションの理論では、“自分の意見を評価するため”ではなく、“自分の意見の妥当性を判断するため”に他者との比較が行われると考えられていた。非公式の社会的コミュニケーションの理論における妥当性の判断とは、自身の意見の正誤を判定することである。そして、意見の正誤を判定するために他者との比較に頼らざるを得ない場合があると、Festinger は考えていた。しかし、能力の場合は事情が異なる。通常、能力に対して妥当性を判断することはない。なぜなら、意見とは異なり、能力の正誤を問うことはないからである。したがって、Festinger は、評価という概念を用いることで意見と能力の双方を包括しようと企てたのである。

この“評価”の意味を詳細に検討するには、社会的比較過程理論の形成に寄与した二つの研究領域をまずは考える必要がある。ひとつは、Festinger 自身による非公式の社会的コミュニケーションの理論 (Festinger, 1950) であり、もうひとつは要求水準の研究である。この二つの研究領域から継承された観点や概念を明らかにすることで、Festinger の想定した“評価”の内実は明らかとなる。

ISC の理論は、自然発生的な集団で作用する心理的な力、すなわち斉一性の圧力が特定の対人コミュニケーションを導くこと、および、その力を規定する条件を命題化している。心理的な力 (厳密には合力) とは、個人の生活空間における変化の方向や強さの概念である。個人の生活空間は、その個人が認識する

人と環境の関数で規定される⁴。すなわち、生活空間とは、その場で影響する諸要因が同一の位相で扱われる個人の心理学的空間なのである。したがって、観察者にとって外部環境として認識される対象であったとしても、個人の生活空間で意味のある心理的要因となる。言いかえると、評価対象が物理的、社会的な性質のどちらであったとしても、個人に影響を及ぼす限り、生活空間内に一定の場を占める存在として認識されるのである。

ISCの理論では、社会的リアリティの存在が斉一性の源泉であると規定されている。リアリティとは、妥当性の根拠となる概念であり、ISCの理論と社会的比較過程理論では妥当性判断や評価の手段と同義である。そして、社会的リアリティの反対の極に物理的リアリティが対置され、独自の生活空間の領域を形成する。Festinger (1950) は、正誤が物理的に確かめられる意見は、物理的リアリティに基づいた生活空間の領域に属すると考えた。たとえば、“あのガラスは割れやすい”という意見は、実際に叩いてみればわかる。つまり、このような意見は物理的手段に基づいて確かめることができるのである。しかし、必ずしもすべての意見が物理的手段で確かめられるとは限らない。たとえば、“外国人労働者の受け入れに賛成か反対か”といった意見の妥当性を判断するための絶対的な物理的手段があるわけではない。また、“宇宙では呼吸ができない”という意見を実際に確かめることはできるが、多くの人にとって実行するのは困難である。これらの意見の妥当性を判断するには、他者の意見、態度、信念といった社会的手段を用いるしかない。つまり、意見の妥当性判断の多くは、他者との意見の類似、非類似を確認するしか方法がないとしたのである。

この点は社会的比較過程理論でも継承されている。意見の多くはISCの理論と同様に社会的手段で妥当性が判断されると想定された。しかし、意見と能力を区別する段階で、この生活空間の領域を形成するリアリティと、判断対象である意見や能力の関係が複雑になる。社会的比較過程理論における意見と能力の区別は、物理的リアリティに依存するか、社会的リアリティに依存するかの違いと密接に関連してしまう。その根拠は、意見とは異なり、能力の場合は遂行結果という評価のための物理的手段が存在することが多いからである。そのため、社会的リアリティの領域で能力比較が生起するための条件が重要となる。

その条件として、Festinger (1954) は、遂行が困難であったり、遂行結果から推測される能力の抽象度が高かったりする場合を指摘して、比較が生起するこ

⁴ Lewinの有名な公式、 $B=F(P, E)$ は同時に $B=F(LSp)$ である。この時、 B は行動、 P は人、 E は環境、 LSp は生活空間である。この式における行動は、一定の時間単位における場の状態変化にかかわる変数である。一般的な意味での“行動”とは異なり、動作だけでなく認知や感情なども行動カテゴリーに含まれる。

とを述べている⁵。つまり、物理的手段による判断が不明確な場合にのみ比較が生起すると考えたのである。ここから、社会的比較過程理論の仮説 2 で言及されているように、物理的手段による評価が不可能である場合、他者の意見や能力といった社会的手段による評価がなされるとの仮説が導き出されたのである。

物理的手段による判断を優先しつつも、社会的手段による判断の対象を拡大する視点は、社会的比較過程理論で Festinger が企図したことの骨子となる。つまり、意見の比較を能力にまで拡張することで、社会的リアリティに属する生活空間の領域が多いことを強調できるのである。それゆえ、能力比較は社会的比較過程理論の中で重要な位置を占めることになり、必然的に能力比較における証左が多くあげられることになった。その際、Festinger は、自身の属する Lewin 派による要求水準の一連の研究を引用したのである。

要求水準 (level of aspiration) とは、個人が設定する目標の水準であり、個人の達成感を規定する (Suls & Wheeler, 2008)。それゆえ、要求水準は、追求する目標の困難さの主観的な程度を反映し、遂行結果に対する成功感や失敗感の感覚に大きく寄与する。意識的なレベルに限定すれば、主観的な目標は、高度な認知能力に基づくさまざまな心的現象を理解する際の有力な概念枠組みである。たとえば、数学のテストで 80 点を取った二人の人物がいたとする。一方の人物はその点数に満足しているのに対し、もう一方の人物は満足していない状態であったとする。このように、客観的な水準は同じであるにもかかわらず、遂行の持つ意味や、帰結する心的状態が人により違うことは経験的に理解される。これは、個人の主観的な心的世界が客観的な世界を意味づけるひとつの事例である。

要求水準の研究では、自らの遂行結果が客観的に存在する。したがって、そこから判断する能力に対し、“正しい”、“間違っている”といった判定をすることは適切でない。正誤の判定以外の目的で比較が行われていることを主張するためには、ISC の理論の枠組みだけでは不十分である。そこで、実験参加者の要求水準が自分にとって“良い”、または“悪い”と思われる遂行レベルを反映していること、および、そのような遂行レベルの満足感が他者の遂行の存在によって安定することを要求水準の研究結果から見出すことで (e.g., Gardner, 1939; Sears, 1940)、意見とは異なる能力比較の存在を Festinger (1954) は示したのである。

ここから、社会的比較過程理論は、要求水準の研究における先行課題の結果と他者の遂行を概念的に同一視した理論であることが理解される。つまり、先行課題と後続課題の双方の結果とも自己の遂行を用いるのが要求水準研究であるのに対し、先行課題の結果については他者の遂行を用いるのが社会的比較ということである。この自己の遂行から他者の遂行への概念翻訳は、場の理論で

⁵ ただし、この条件は ISC の理論でも言及されており、能力比較に特有というわけではない。

強調された緊張体系や同時性の原理の問題を背景化させると同時に、新たな問題を生じさせた。それは、個人内の遂行における“良い”、“悪い”の基準は個人の満足感で説明できるのに対し、他者との関係における“良い”、“悪い”は優劣を意味することである。これは、自己と他者が別個体である以上、必然的に導き出される。

以上をまとめると、社会的比較過程理論は次の三つの点が特に重要であることが明らかとなる。

- (a) 社会的比較における評価の影響範囲は、個人の生活空間全般に及ぶ。
- (b) 意見だけでなく能力においても社会的リアリティに依存した判断が行われる。
- (c) 能力比較においては、優劣の概念が含まれる。

(a) の特徴は、社会的比較過程が自己や環境との関係の中で理解されることを示している。社会的比較過程理論は ISC の理論の発展形であること、そして、ISC の理論それ自体は場の理論による観点で記述されていることが論拠となる。場の理論の観点を継承する限り、他者や社会環境がシステム外部の環境情報に設定されることはない。むしろ、自己と他者、さらにはそれを取り巻く社会環境との関連が同一の心理学的空間に存在することが要請されるのである。

(b) の特徴は、個人の生活空間内で社会的リアリティの領域が広大であることを示している。Festinger (1954) は物理的手段によって判断できることを客観的で“疑いえないもの”とした。本来、能力の評価は物理的リアリティの境界内で理解されるべきものであった。しかし、能力においても社会的手段を用いることがありえることを示すことで、客観性を備えた物理的リアリティ領域に社会的リアリティの入り込む余地を与えたのである。同時に、この事態がリアリティの領域と評価対象の関係を複雑にしたことはすでに指摘した。

それでは、この複雑さをどのように分析するのか。分析の手がかりとなるのは、意見と能力の比較で異なる判断内容が含まれていること示す (c) の特徴である。すでに述べたように、意見の比較は“正しい”、または“間違っている”という妥当性の判断である。一方、能力の比較は“優れている”、または“劣っている”という優劣の概念が含まれており、意見の比較と同様の意味での妥当性の概念では包摂しきれないのである。

第2節：社会的比較による評価の意味

前節において、能力比較は意見比較とは異なる判断が含まれている可能性を指摘した。すなわち、意見の場合は比較によって“正しい”または“間違っている”という意味での妥当性判断が行われるのに対し、能力の場合には“優れている”または“劣っている”という優劣の概念が含まれていることである。もし、社会的比較を通じて知りたいことが意見の正誤だけであれば、“評価”という用語は必要とされず、“妥当性”のみで十分であった。しかし、意見の比較を能力まで拡張した結果、妥当性という語を用いて議論することが困難になった。そこで、妥当性に替えて評価という語を用いることで、理論の拡張を企てたのである。

しかし、この企ては、物理的、社会的リアリティと評価対象の関係が複雑であることを明らかにした。この複雑さを示しているのが、社会的比較過程理論の仮説2である。社会的比較の生起という観点から解釈すると、仮説2は制約条件である。すなわち、物理的手段による評価が可能であれば、社会的手段による評価はしないことになる。しかし、この仮説2の言明には規定されていない曖昧な部分がある。それは、“客観的で非社会的な手段を用いることができない場合”と比較生起の関係である。評価手段としてのリアリティは指標の数や種類などの多値で表現されるのに対し、比較生起は二値で表現される。つまり、仮説2の言明では、比較は生起するかしないかのどちらかの状態しかとれないのに対し、それに対応するリアリティの範囲が厳密に設定されていないのである。この際、社会的比較による評価を前節で述べた正誤を判定する意味での妥当性と同義にしてしまうと、遂行結果という物理的指標が存在する能力は妥当性を問えなくなり、能力比較の生起する余地がなくなってしまう。つまり、仮説2の“客観的で非社会的な手段を用いることができない場合”の条件を満たさなくなるのである。しかし、序章で引用した比較対象についての調査からも、物理的手段による評価が可能な対象で社会的比較が生起していることは明らかである。したがって、要請されるのは、物理的手段による評価がある程度可能であっても社会的手段による評価が可能な“評価”を想定することである。

この要請にこたえるには、妥当性判断を上位概念とする複数の判断の集合として評価を定義しなければならない。この際、正誤を意味する妥当性の判断を意見比較による評価、優劣にかかわる判断を能力比較による評価と単純に分類することはできない。もし、能力比較を意見比較と完全に独立させてしまうと、妥当性を拡張した概念として“評価”を導入する意義がなくなってしまう。したがって、ISCの理論で言及された妥当性判断と関連し、かつ能力比較に適用できるような判断を導入することが条件となる。

個々の判断の集合として評価を定義することは、個々の判断内容と、その関

係を明らかにすることである。そこで、上記の条件にしたがって、まずは意見と能力のそれぞれに適用可能なレベルで妥当性の内容を限定する。まず、意見などの物理的リアリティへの依存度の低い対象では、妥当性判断を正誤の判定に限定する。これは ISC の理論から直接継承された判断であり、具体的には対象についての“正しい”または“間違っている”という判定である。次に、能力などの物理的リアリティの依存度が高い対象では適切さの判定を導入する。これは物理的リアリティの領域で存在する指標、すなわち遂行結果などの物理的指標による自他の相対的位置を比較の結果に反映するか否かにかかわる判断である。

正誤の判定と適切さの判定の違いは、物理的手段が用いられる程度に依存する。つまり、正誤の判定は物理的手段が存在しない、または用いられない対象で優勢となる判断モードであり、適切さの判定は物理的手段の明確な対象で優勢となる判断モードである。この視点を用いることにより、物理的指標が存在したとしても社会的手段による評価を理解することができる。たとえば、23歳の女性が100mを16秒58で走ったとする。この際、自身の走る能力それ自体の正誤を判定することは無意味である。しかし、適切さの判定に着目すれば、この女性は他者との記録の差から帰結される結論が適切であるかどうかを知ることができる。たとえば、この女性がオリンピック選手の記録と比較するならば、この女性の相対的位置は低いものになるであろう。一方、小学生の記録と比較するのであれば、この女性の相対的位置は高いものになるであろう。もし、能力比較に適切さの判定が含まれていなければ、どちらの比較も適切であることになる。したがって、比較から帰結されるどちらの自己評価も正しいといえる。しかし、この女性がオリンピック代表候補生であったならばどうであろうか。おそらくこの女性は小学生との比較は適切でない判断し、オリンピック選手との比較は適切であると判断するであろう。

この議論は Goethals & Darley (1977) の帰属論的解釈とよく似ている。しかし、重要な違いが二つある。ひとつは、関連属性における類似他者を選ぶプロセスを前提としないことである。適切さの判定は、比較選択ではなく、評価段階でのプロセスである。もうひとつは、適切さの判定をする場としてリアリティの領域が想定されている点である。Goethals & Darley (1977) の帰属論的解釈は、評価の場として規範的な論理空間が想定されており、任意の地点における領域の質的な違いはない。それに対し、上記の視点による適切さの判定は、評価対象を物理的リアリティから社会的リアリティの領域に移動させる力を持つ。そのため、Goethals & Darley (1977) の考える関連属性の類似では、適切さを判定するための属性を自己と切り離すことが困難であるのに対し、社会的リアリティの場における適切さの判定は、自己と独立した社会環境における妥当性を問うことが可能となる。

この特徴により、前章における関連属性と自己スキーマの問題も解消する。Miller (1984) の研究では、自己スキーマとして重要であれば、教示された遂行と属性の関連が無視されるという結果が示された。この結果を社会的リアリティにおける適切さの問題として解釈すると、遂行と関連属性のつながりは社会環境要因の問題となる。つまり、実験操作による一時的な関連属性の効果と、永続的な自己スキーマとしての効果の違いは、自己と社会環境の関係履歴に依存するのである。

妥当性判断を正誤と適切さの判定に分類することで、能力比較の生起は保証される。つまり、遂行結果が存在し、それ自体で評価可能な対象であっても適切さの判定のために他者との比較が行われるのである。しかし、この二つの判定をもって社会的比較による評価とすることはできない。なぜなら、この段階では、内容を限定したうえで二つの判定を並列させたにすぎないからである。この二つの様相で成り立つ判断を単一の“評価”とするには、個々の判定を配列することが必要となる。そのような配列を可能にするには、配列の場と初期値という二つの要素が必要である。前者は個人の生活空間におけるリアリティの程度と、正誤および適切さの判定の関係である。特に社会的比較過程理論に限定するならば、社会的リアリティを中心域、物理的リアリティを周辺域とした空間が設定される。後者の初期値とは、判断の前提となる認知要素である。これは意見や能力といった対象やリアリティ領域の違いに関係なく共通の要素でなければならない。つまり、社会的比較による評価を判断プロセスと定義する場合の出発点となるミニマムな構造認知である。

そこで、“自他の相対的位置の認知”を社会的比較におけるミニマムな構造認知として導入する。表明された意見や遂行結果の類似や相違は、自己と他者の相対的位置として認知される。この自他の相対的位置の認知は、判断の最初期に必要な認知であり、相対的に低次の認知レベルが想定される。自他の相対的位置の認知は、自己と他者の心理的空間の遠近として表現できる。この遠近の概念は、垂直と水平の方向性を持つ。自他が垂直方向に配置される場合、自他を優劣関係として認知することになる。それに対し、水平方向に配置される場合、自他を類似関係として認知することになる。この自他の関係様式は、人間社会やその他の動物種でも見られる基本的な次元である (e.g., Fiske, 1992; Grosenick, Clement & Fernald, 2007)。

以上の検討から、社会的比較による評価の意味が明らかとなる。すなわち、相対的位置の認知から自他の基本的な関係が推論され、それを正誤または適切さといった妥当性で判断する一連のプロセスが社会的比較における評価である。

第3節：社会的比較の目標と適応機能

自他の相対的位置の認知は、自己と比較他者の優劣、または類似の次元における対人関係の認知と同義である。ここから、社会的比較による評価は、この対人関係の様式を反映したものと推論される。たとえば、ある特定の他者と比べて自分の遂行が低いと知覚した場合、優劣関係において自己は劣位に位置することになる。反対に、自分の遂行が高いと知覚した場合、自己は優位に位置することになる。その結果、前者に比べ後方で高い自己評価が帰結される。ただし、この他者が比較他者として適切でないとは判定されれば、そのような自己評価は帰結されない。

この推論を裏づける実証研究として Gilbert, Giesler, & Morris (1995) が挙げられる。彼らは、比較他者が能力推論に用いられる際の認知的負荷を操作した実験を行った。実験は、比較他者の遂行が自己評価の基準として用いるのが不適切であることを実験参加者に明示した状況で行われた。そのような状況を認識する際に認知的負荷の操作を行い、自己評価へ及ぼす比較他者の影響を検討したのである。その結果、認知的負荷が無かった実験参加者では比較他者の効果が確認されなかったのに対して、認知的負荷をかけた実験参加者では比較他者の遂行が自己評価に影響していた。Gilbert et al. (1995) の結果は、比較それ自体が適切であるか否か、すなわち比較の妥当性判断の前に、まずは相対的位置による自他の関係の認知が行われている可能性を示唆する。つまり、妥当性判断のプロセスで修正可能であっても、相対的位置の認知は不可避なプロセスなのである。

以上のことから、自他の相対的位置を知ることが社会的比較の目標であることが理解される。具体的には、自他の相対的位置から認識される優劣や類似の関係である。前者は序列や順位などの概念と関連し、後者は結束や斉一性の概念と関連する。Locke (2003) は、個人間の関係を捉える視点として、地位と結束の二次元があり、それぞれが社会的比較と関連することを実証した。地位は個人間の垂直的な関係であり、結束は水平の関係である。Locke (2003) の研究における調査参加者は、これらの次元を自尊心にとって都合の良いように使い分けていた。具体的には、比較他者が望ましい特性を持っているときは結束の次元を強調することで自尊心を高揚し、望ましくない特性を持っているときは地位の次元を強調して自らの優位性を強調していた。

ここで注意しなければならないのは、自他の相対的位置から推論される関係の認知と社会環境の相互依存関係である。概念的には、自他の相対的位置から推論する関係は、妥当性判断の基礎となる社会環境に包含される。優劣であれ類似であれ、相対的位置による自他の関係は形式化された対人関係である。形

式化された対人関係は、社会環境への適応の結果として抽象化された概念である。それに対し、妥当性判断の基礎となる社会環境は、抽象化以前の複雑さを有する環境それ自体である。したがって、社会環境の複雑さの程度が高いほど、妥当性判断に高度な認知能力が必要とされる。社会環境の複雑さの程度は、個体間の長期的な関係の有無、集団の大きさ、さらに相互作用の複雑さに依存する。それゆえ、社会環境が複雑であるほど、当該の社会環境における自他の関係の妥当性判断に高次の認知能力が必要とされ、自他の関係の認知と妥当性判断の間に乖離が生じやすくなる。反対に、社会環境が単純であるほど自他の関係の認知と社会環境による妥当性判断を区別する境界は曖昧になる。したがって、複雑な社会環境では、自他の相対的位置に基づく関係と当該の社会環境がある程度独立して存在することになる。

この説明は、高度な認知能力が社会環境の産物であることを前提とする (Dunbar, 1996)。ヒトを含めた社会性動物では、特定の他個体との永続した相互作用が存在する。特定の個体間の社会的関係が長期にわたって続くには、個体間の順位や近接関係を理解するための認知能力が必要となる。社会環境は、“血縁関係”、“配偶関係”、“非血縁関係”のそれぞれ異なる対人環境に区別され、それぞれ別種の適応課題が存在する (平石, 2005)。しかし、自己と他者の相対的位置による関係の認知は、どのような個体間でも重要である。たとえば、きょうだい間 (血縁関係) における親の選択的投資における課題では、自他の相対的位置の認知が適切でなければ、適切な戦略を採用することはできないであろう。また、配偶者選択における種内競争において、自他の相対的位置を正確に認知することは、繁殖のみならず生存にも影響する。さらに、非血縁関係における分配行動においても、自他の利益の判断や、利益を得るのにふさわしいか否かを判断する際に相対的位置の情報が用いられる (大久保, 2009)。

ヒトを含む社会性動物では、生存や繁殖の資源を獲得するために他個体との相互作用は不可避であり、それを行う場として社会環境が存在する。そのような社会環境内で個人の資源獲得を効率化するためには、自他の相対的位置の情報を活用する必要がある。したがって、自他の相対的位置に基づく関係は、資源獲得における他個体との相互作用を調整するために機能すると想定されるのである。

このような視点で社会的比較を定式化したのが、P. Gilbert を中心としたグループである。彼らは、社会的比較を対人行動の準備段階であると位置づけ、比較の結果としての自己評価は、資源獲得のための対人戦略を動機づけるものであるとした。Gilbert, Price, & Allan (1995) によると、“社会的比較は挑戦や自信を制御する (系統発生的に) 古い能力である。(p.153, 括弧内は筆者による補足)”と定義される。これは、次のような論理で導かれる。ヒトを含む多くの種にお

ける社会環境は、繁殖や生存にかかわる資源をめぐる潜在的、または顕在的な競争の場である。個体の順位や既に所有している資源は、競争で成功するための指標となる。高い順位や資源を多く所有すること、すなわち社会的成功で重要なのは損失-利得 (cost-benefit) の分析能力である。たとえば、常に負けてしまう相手に挑戦したり、常に勝てる相手に挑戦しなかつたりするのはどちらも損失である。損失や利得を分析し、最適なレベルに保つ能力が備わっていることで、他個体との相互作用で最大限の利益が得られる。そして、この損失と利得の分析能力が社会的比較ということになる。

Gilbert et al. (1995) による社会的比較の定義は、動物行動学の影響を色濃く受けている。特に重要なのは、社会的比較を資源保持能力 (resource-holding potential) と関連づけたことである。資源保持能力は競争における闘争能力や強さに相当する概念である (Parker, 1974)。社会的比較を資源保持能力の概念と結びつけることで、多くの動物で社会的比較の基本形式は変わらないことが明らかとなる。つまり、闘争と相対的な資源保持能力についての動物行動学の研究は、ヒト以外の種における社会的比較研究である。

資源保持能力の比較は単純な序列構造の社会において重要である。しかし、より複雑な社会環境において、得られる資源量を可能な限り最大化するには、一対同士の資源保持能力の比較だけでは不十分である。たとえば、集団内で資源を交換する際、一対だけでなく複数個体間の関係を認識する必要があり、かつそれら複数個体間の行動や特性情報も長期間保持しなければならない。しかし、そのような中で資源を適切に獲得するために、その都度個体同士で資源保持能力の比較を行うのは効率が悪く、集団で生活することのコストが大きくなってしまう。このようなコストを回避するためには、個人の資源保持能力についての情報を特定の社会環境内で共有化する仕組みがあればよい。そのような共有化の仕組みは、他個体も同様の情報を保有しているという個体の信念に基づく。そして、そのような信念が社会環境内で一定のリアリティを獲得している場合、自己にとって相対的に有利な資源保持能力にかかわる情報を共有化させることが目指されるべき望ましい結果となる。

Gilbert et al. (1995) は、ヒトの場合は直接的な資源保持能力の比較だけで社会的に望ましい結果が得られるわけではないことを認めている。ヒトが獲得しようとする望ましい結果は、地位の獲得と密接な関連がある。地位やそれに伴う権威は、その都度の資源保持能力の比較や、集団内での個体間の総当たり戦を回避させ、資源獲得のコストを一定水準に抑える。ここから、集団内での地位は、個人の資源保持能力についての情報を特定の社会環境内で共有化する心的な仕組みとして機能していると想定できる。つまり、この場合の目指されるべき望ましい結果は、より上位の地位である。

地位は、自分だけでなく他者から認められて初めて成立する関係概念である (Gilbert, 1990)。そこで重要となるのは、体や武器のサイズなどの直接的な攻撃を想定した資源保持能力の比較だけでなく、他者から見た自らの魅力的な資質である。資源保持能力はその性質上、相手を威嚇する側面を持つ。しかし、あまりにも攻撃的な威嚇は、弱いことと同様に魅力がない (Baumeister, 1982)。それに対し、他者から選択的に受容される魅力的な資質は、特定の社会環境内で長期的な影響力を持つ。この影響力は、当該の社会環境の構成員が同一である限り地位を保証する。このような影響力を持つ資質を Gilbert et al. (1995) は、資源保持能力と区別して社会的注目保持能力 (social attention holding power) と呼んだ。そして、この社会的注目保持能力の相対的な優位性は、資源保持能力における優位性と同等か、それ以上に重要であると強調したのである。

以上の論理から、Gilbert et al. (1995) の議論は以下の三点に集約される。(a) 社会的比較を動物行動学における順位制の概念と結びつけた。(b) 資源保持能力や社会的注目保持能力の相対的な比較から自己と他者の関係が決定する。(c) そこから、さまざまな対人行動や心的状態が帰結される。Gilbert et al. (1995) によれば、社会的比較による自己と他者の関係は“優位者－劣位者”または“支配者－被支配者”であり、優位者の側から見た対人行動の基本戦略は“資源保持能力に基づく攻撃”か“社会的注目保持能力に基づく魅力”である。そして、自らが劣位の場合に想定される心的反応が恥や抑うつなどである。

第4節：比較状況における第三者⁶

ヒトにおいて特に重要なのは、社会的注目保持能力の比較であると Gilbert et al. (1995) は述べた。他者からの受容と関連する社会的注目保持能力で相対的に優位であることは、当該の社会環境において上位の地位であることを意味する。上位の地位は、自らが獲得する資源が相対的に多いことを集団内に正当化させる力を持つ。つまり、相対的に優位な社会的注目保持能力は、自らに配分される資源の多さを集団内の他者に受容させることを意味する。たとえば、ある特定他者との比較で自らが相対的に優位ならば、この特定他者よりも自らの資源獲得量は多くてよいことを“そのほかの他者”に受容させていることになる。つまり、社会的注目保持能力に基づく他者からの選択的な受容は、ある特定他者との相対的優位性に基づいた自己と特定他者との資源獲得量の不均衡を正当化する

⁶ 本節は、以下の論文を加筆修正したものである。
大久保暢俊 (2009). 社会的比較による自己評価と対人関係 東洋大学人間科学総合研究所, 10, 111-121.

ることを意味するのである。この社会的注目保持能力の特質は、支配と受容のトレードオフ (Leary, 2002) を回避しながら自らの適応価を上昇させることになる。したがって、社会性動物であるヒトにおいて、社会的注目保持能力を明らかにするような比較状況は、資源保持能力の比較以上に重要であると推論できる。

資源保持能力に比べ、地位に関連する社会的注目保持能力は多くの他者からの評価に依存する。したがって、自己や比較他者以外の他者からの評価が重要となる。つまり、自己と比較他者を取り巻く第三者の存在が比較状況に介在するのである。心理的には、“比較他者に対して自らが優位と第三者から見做されているか、それとも劣位と見做されているか”という評価予期のことである。したがって、検討されるべき比較状況は自己と比較他者の二者だけで構成されるとは限らない。Gilbert et al. (1995) は、二者間だけの比較を“pair-wise comparisons”と表現しているのに対し、聴衆や観衆などの第三者を含めた比較を“audience comparisons”と表現している。これは、自他の相対的位置を第三者が知覚、評価する可能性を内包した状況である。

Gilbert et al. (1995) も例に挙げている嫉妬状況は、第三者が関与している典型的な比較状況である。恋愛関係の嫉妬を例にすると、自分のパートナーが第三者、ライバルが比較他者に相当する。そして、第三者による（ライバルと自己との）相対評価が好ましくないとき自己が推論した際に生起する感情が嫉妬である (Desteno & Salovy, 1995)。同様に、恋愛関係でない異性関係 (Henderson-King, D., Henderson-King, E., & Hoffmann, 2001) やきょうだい関係 (Feinberg, Neiderhiser, Simmens, Reiss, & Hetherington, 2000) でも第三者の影響が確認されている。このように、第三者からの相対評価は自己にとって重要な意味を持つと考えられる。

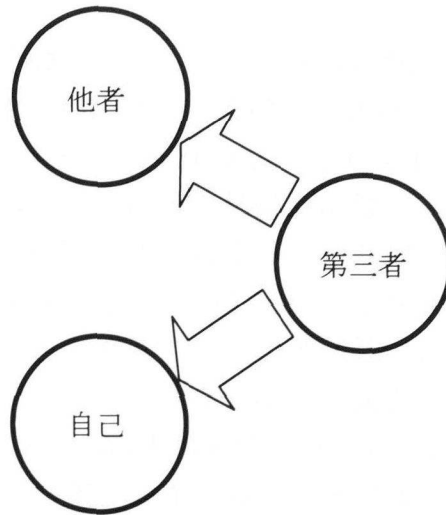
社会的比較研究においても、自己と比較他者以外の他者の存在が社会的比較に影響することを傍証した研究がある。たとえば、高田 (1994) は、公的自己意識の高い人ほど社会的比較をする傾向にあることを報告した。また、評価懸念特性を有する人ほど社会的比較による自他の地位差に敏感であることが Allan & Gilbert (2002) によって報告されている。公的自己意識で想定される他者や、否定的な評価を下す主体は必ずしも比較他者だけとは限らない。集団生活において、比較状況を観察する他個体は複数存在する。したがって、公的自己意識や評価懸念と社会的比較の関係にも、比較状況に注目する第三者の影響が存在すると考えられるのである。

自己と他者の比較状況を知覚する第三者の存在を考慮することにより、社会的比較は二つの水準の社会性に支えられた心的機能であることが明らかとなる。ひとつは、比較他者との相対的位置に依存するという意味での社会性である。もうひとつは、そのような比較状況を知覚する第三者に依存するという意味で

の社会性である。この第三者は特定の一人である場合もあれば、それらが集まった観衆としての第三者まで含まれる。比較他者の存在だけでなく、第三者の評価を知覚するといった二重の社会性に依存している状況が社会的注目保持能力による比較である。この二つの社会性は、前節の議論における自他の相対的位置に基づく関係と、その妥当性判断の基盤となる社会環境の区分に対応する。したがって、第三者を含めた比較状況における社会的比較の検討は、社会的比較による評価の様相を明らかにする上で基本的な比較状況である。

第三者の評価を推測するのは比較主体としての自己である。観察可能な注目や評価的言明などの手段は、評価される自己にとって重要な情報である。直接的な評価的言明をフィードバックされる機会はそれほど多くないことを考慮すると、第三者が注目している対象を自己が積極的に認識し、推論することが重要となる。第三者が注目する対象は複数の水準で考えられるが（遂行、能力、人物全体など）、注目の基本方向は自己と比較他者に大別できる。そこで、第三者を含めた比較状況は、第三者の注目を知覚する自己の観点から形式的に三つに分類される（図 2.1 参照）。ひとつは、第三者が自己と比較他者を結びつける形で注目している状況である（図 2.1a）。これは第三者が自己と比較他者を相対的に評価する事が自己にとって容易に推測できる状況である。次に、自己にのみ第三者が注目している状況である（図 2.1b）。これは、特定の比較他者に第三者が“注目していない”状況であるので、特定の他者との相対評価は推論されない。しかし、私的な自己概念の活性化だけでも社会的比較の十分条件であるとの知見（Stapel & Tesser, 2001）や、比較他者が明示されていなくとも、身近な他者との比較で用いられる基準を顕現化させやすいとの知見から（Rüter & Mussweiler, 2005）、第三者が自己に注目しているだけで比較の準備状態になると予測される。最後に、比較他者にのみ第三者が注目している状況である（図 2.1c）。一時的ではあれ、第三者が自己に“注目していない”状況である。もし、この状況で比較他者の遂行や特性が自己評価に影響しているのならば、“比較他者と自己が相対的に評価される可能性がある”と自己が積極的に推論していることになる。それゆえ、第三者の相対評価を実験参加者が予期したであろうということを実証レベルで推論できる比較状況は、第三者が比較他者にのみ注目している状況であると考えられる⁷。

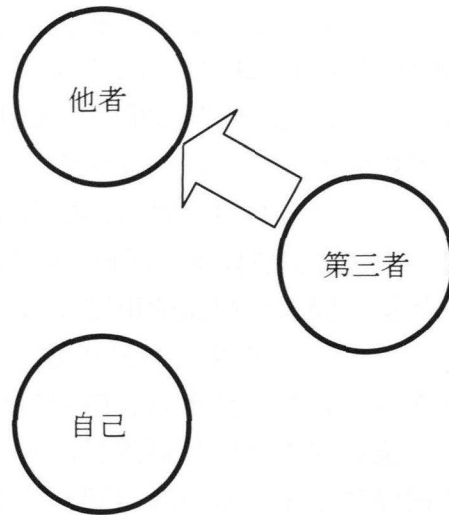
⁷ ただし、この議論には限界がある。それは、第三者の人数の影響について具体的な予測を導き出すことが出来ないことである。たとえば、第三者が一人である比較状況と、第三者が三人いる比較状況で社会的比較の仕方や影響にどのような違いが生じるのかについての予測である。この予測を可能にするには、第三者の心的状態や意図の個別認識に関する議論が必要となる。そして、その議論は本稿の範囲を超えている。そこで、第三者が単数の場合、複数の場合を一括して“第三者がかかわる比較状況”とした。



(a)両者に注目している状況



(b)自己に注目している状況



(c)比較他者に注目している状況

図 2.1 第三者の注目方向の分類

第5節：仮説の導出

これまでの社会的比較研究では、自己と特定他者の二者を想定し、比較がどのような作用を及ぼすのかについての検討が多かった (e.g., Brown, Novick, Lord, & Richards, 1992; Cash, T. F., Cash, D. W., & Butters, 1983)。しかし、社会的比較には自己高揚や自己改善などの複数の目標の影響や、さらには比較他者との同化といった、さまざまな作用が含まれることを前章で議論した。つまり、自己と比較他者のみに注目することで、かえってさまざまな要因が交絡してしまい、一貫した比較の作用方向を予測することが困難なのである。この困難さの原因は、比較状況の極度の単純化だけではなく、前提となる現象の定義が明確でないことにもある。これは、Wood (1996) が述べたように、そもそも“社会的比較とは何か”についての統一的な見解がないことによる必然的な帰結である。

本稿では、これまでの議論を根拠に、自他の相対的位置を反映した比較の結果を社会的比較の現れと定義する。しかし、この理論レベルの定義では、個々の実証研究で作業仮説を直接引き出すことが困難である。そこで本稿では、変数の関係を明示している Wood (1996) により提唱された定義を同時に導入する。Wood (1996) によれば、社会的比較とは“自己との関連で一人、または複数人の情報について考えるプロセス (pp.520-521)”である。つまり、他者の特性や遂行といった情報を自己と関連づけることを社会的比較の現れとしたのである。この Wood (1996) による定義と本稿における理論的な定義を総合して、自他の相対的位置を反映した変数間の影響関係、および相関関係を比較の結果とし、そのような関係が観察されることを社会的比較の現れとする。

相対的位置による自己定位が比較の結果に反映されるためには、その比較の妥当性判断が重要になると議論した。この妥当性判断は、相対的位置によって自己が定位される社会環境に規定されることは既に述べた。そこで問題となるのは、自他の相対的位置に基づく関係が社会的比較による評価として適切であると判断されるための社会環境要因である。

この要因として、本稿では比較他者に注目する第三者を取り上げる。比較他者に注目する第三者の存在は、自己と比較他者が相対評価される可能性のある状況である。相対的位置が第三者によって評価される状況は、自己と比較他者の相対的位置を特定の社会環境内において多くの他者に共有化させることを意味する。これは、資源獲得のために地位を追求する社会的注目保持能力の比較が重要であるとの議論が根拠となる。このような比較状況は、特定の社会環境内で地位を得ようとする個人にとって“より重要な”評価であると。それゆえ、第三者が存在する比較状況において、自他の相対的位置を反映した評価は、第三者が存在しない比較状況よりも重要である。ここから、社会的比較の評価の顕

在化について以下の仮説を導出する。

仮説 1: 比較状況における第三者の存在によって社会的比較による評価が顕在化する。

ここで社会的比較による評価について明確にする。多くの場合、比較の結果としての評価は自己評価にかかわる。これは、社会的比較の評価主体が自己であり、社会環境における自己定位という目的からしても自然である。しかし、第 2 節において、自己だけでなく、社会環境も含む生活空間全般が評価対象に含まれることを指摘した。つまり、社会的比較による評価とは、自己と比較他者の関係を反映した、それぞれの評価が密接に関係した一連のシステムである。したがって、社会的比較による評価の影響範囲には他個体で構成される社会環境も含まれる。つまり、必ずしも自己評価への影響だけに限定されるわけではないのである。この社会環境を構成する他者は、特定他者との比較の観点から“比較他者”と“他者一般”に区別できる。自己による比較他者の評価は、当該の他者への対人行動を方向づける上で重要である。一方、自己による他者一般の評価は、個人の対人行動の基本的構えを構成する⁸。それゆえ、社会的比較による評価の一般化にかかわる。このように、比較他者や他者一般の評価は、対人戦略において重要な判断材料となる。以上のことから、比較他者に対する評価や他者一般に対する評価、すなわち社会環境に対する評価は、自己と同様に重要な評価対象であると推論される。

以上をふまえた上で、社会的比較による評価を以下に定義する。

社会的比較による評価の定義: 社会的比較による評価とは、比較他者の存在を知覚することにより、自己および他者の評価が系統的に変化することである。

具体的には以下の二つの評価パターンを想定する。(a) 比較他者の遂行や特性によって自己評価が変化する。(b) 自己の遂行や特性、およびそれらに対する評価（自己評価）と、他者評価が関連する。

(a) の評価パターンは、古典的な比較他者提示の研究で採用される方法である。具体的には、比較他者の遂行や特性を操作することで自己評価への影響を検討する実験手法を用いる (e.g., Morse & Gergen, 1970)。比較他者の要因が自己

⁸ 対人行動の基本的構えとは、他者一般についての予期に基づいた行動傾向のデフォルト値である。たとえば、多くの人に比べて自分は上位であると考えている人は、そうでない人と比べて初対面の他者に対しても上位者として振る舞おうとするであろう。

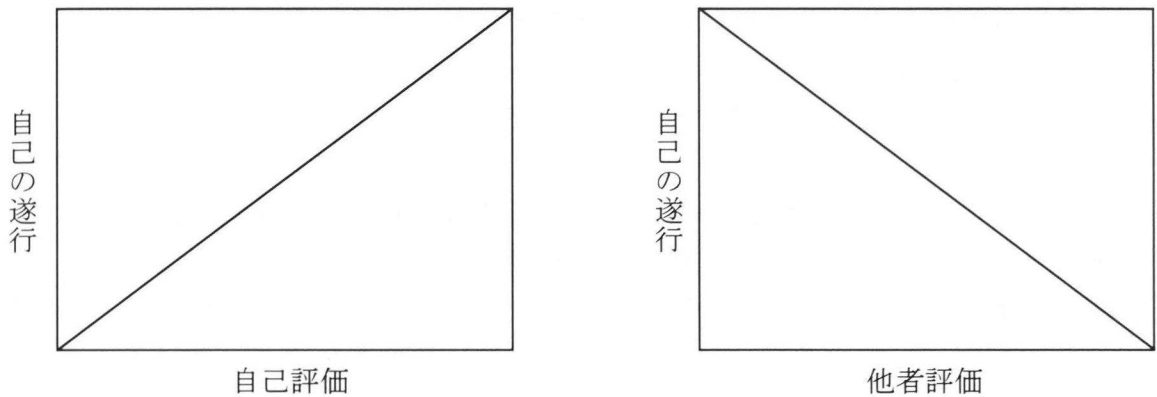
評価に影響したことが確認された場合を社会的比較による評価の生起と判定するのが一般的である。

(b) の評価パターンでは、他者評価と自己の遂行、特性、および自己評価との関連を検討することで社会的比較による評価の生起を判定する。これにより、社会環境の評価の独自性と、そのような評価が自己評価生成時のアーティファクトでないことを示すことが出来る。具体的には、自己の遂行と自己評価、および自己の遂行と他者評価の関連を総合して社会的比較による評価の生起を判定する。この際、自己の遂行はテスト得点や評価の定まった業績など、ある程度数値で表現することが可能な指標である。図 2.2 に示すように、自己の遂行と自己評価に正の関連が確認され、かつ、他者評価と負の関連が確認された場合を“典型的”な社会的比較による評価の生起と考える。特に重要な点は、他者評価との関連である。なぜなら、自己の遂行と自己評価の関連は、比較他者が存在せずとも確認される場合があるからである。それに対し、自己の遂行と他者評価との関連は、自己と他者を関連づけることを本質とした Wood (1996) の定義から、社会的比較による評価の生起であると判定することができる。また、他者評価の対象人物が他者一般である場合には、比較他者との自他の関係が般化した関連であると考え、社会的比較による評価が生起したことの間接的な証拠とする⁹。

さらに、(b) の評価パターンの発展として、客観的な遂行が存在しない特性や、特性を代表する行動が多義的である際の判定方法を明らかにする。たとえば、全般的な生活満足度や、関連する行動の多い性格特性などで自己と他者を比較する場合である。この場合、自己の遂行に相当する変数として、前述のような客観的な数値を指標とすることができない。このような特性については、図 2.2 で示される関連で社会的比較による評価の生起を判定することは困難である。そこで、このような変数を用いる際には、反省的に評価されている自己評価を一方の指標とし、もう一方の指標である他者評価との負の関連が観察された場合を社会的比較による評価の生起とする。このパターンは、自己の遂行に対する主体の解釈への依存度が高くなるため、さまざまな要因が交絡することになる。なぜなら、自己、比較他者、他者一般のそれぞれの対象が評価された上での関係だからである。しかし、この評価パターンは、第三者の相対評価の内容による影響も検討できるという利点がある。つまり、自他の相対的位置をそのまま反映した評価ではなく、第三者の評価を主体がどのように解釈して

⁹ ただし、自己の遂行と他者一般の評価との関連から、特定の他者（比較他者）との社会的比較による評価の生起を推論するには、次の二つの条件を満たす必要がある。それは、(a) 比較他者が存在する状況と、そうでない状況とで比較検討ができていないこと。(b) 比較他者が存在する状況で自己の遂行と他者一般の評価に関連があるのに対して、比較他者が存在しない状況では関連が無いこと。

いるのかについて検討できるのである。



(a)自己の遂行指標と自己評価の関係

(b)自己の遂行指標と他者評価の関係

図 2.2 社会的比較による評価の生起を判定する変数の関連

(a)と(b)の両方が観察された場合を典型的な社会的比較による評価とする。

以上の議論から“社会的比較による評価の顕在化”を社会的比較による評価の生起パターンごとに定義することが可能になる。評価パターン (a) の比較他者の遂行や特性による自己評価の変化では、比較他者の遂行や特性による自己評価の変化量が多いほど顕著であると定義する。仮説 1 に則して述べれば、第三者が存在しない比較状況よりも、第三者が存在する比較状況で自己評価の変化が顕著に観察されることである。評価パターン (b) の自己の遂行や特性、およびそれらに対する評価（自己評価）と他者評価の関連では、これらの関連がすべて存在し、かつその関連が強いほど顕著であると定義する。仮説 1 に則して述べれば、第三者が存在しない比較状況よりも、第三者が存在する比較状況で、自己の遂行と自己評価、自己の遂行と比較他者評価、自己の遂行と他者一般の評価の関連がすべて確認され、かつ関連の度合いが強いことである。

次に、社会的比較による評価の方向について定義する。社会的比較の結果には同化と対比という二つの評価方向があることが前章第 5 節で明らかになった。本稿は相対的位置を反映した評価を社会的比較の基本形式であるとする立場から、対比効果を社会的比較による評価方向の典型と考える。しかし、同化と対比は相対的な現象であり (Mussweiler, Rüter, & Epstude, 2004)、必ずしもそれぞれが個別の現象でないことには留意する必要がある。以上をふまえた上で、社会的比較による評価方向を以下に定義する。

評価方向の定義：社会的比較による評価方向には相対的な二つの形式がある。

一つは対比効果であり、比較他者や他者一般の評価方向とは逆に自己を定位することである。もう一つは、同化効果であり、比較他者や他者一般の評価と同じ方向に自己を定位することである。

これも社会的比較による評価に対応した二つの対比効果のパターンを想定する。(a) 下位他者を提示した場合に比べ、上位他者を提示した場合に自己評価が低い。(b) 自己の遂行や自己評価と、比較他者や他者一般の評価が負の関係にある。そして、これとは逆のパターンが同化効果となる。

本研究では、比較他者呈示による自己評価への影響だけでなく、自己の遂行と比較他者評価、および自己の遂行と平均他者評価との関連を検討する。本稿における平均他者評価は、他者一般の評価であると想定した。それゆえ、仮説1の“社会的比較による評価の顕在化”とは、第三者が存在しない状況に比べ、存在する状況において、社会的比較による自己評価、比較他者評価、平均他者評価への影響や関連が顕著に観察されることを意味する。

次に、仮説1を基底として、以下に述べる二つの仮説を導出する。

仮説2：比較状況にかかわる第三者が自己にとって心理的に近い他者であるほど、社会的比較による評価は顕在化する。

仮説2は第三者の相対評価の意義を明確にする。もし、第三者による相対評価が社会環境において重要であるならば、自己にとって評価的に重要であると想定される人物が第三者である場合に社会的比較による評価は顕著に観察されるであろう。これは、社会的比較が集団内での資源獲得に関連することを議論した第3節が根拠となる。そこで、本研究では、第三者との親密度や、第三者の集団成員性を操作した検討をおこなった。

本稿は8つの実証研究で構成されており、仮説1と仮説2の検証、および第三者の機能にかかわる探索的検討を、研究1から研究5で検証した。まず、研究1では、第三者が友人である状況を設定して、社会的比較による自己評価への影響を検討した。この実験は、仮説1の実証を目的とした。続く研究2では、第三者の集団成員性を操作して、自己の遂行と自己評価、自己の遂行と他者評価の関連を検討した。この実験は、仮説1に加えて仮説2の検証を目的とした。研究3は、研究2とほぼ同様の手続きを用いることにより、比較他者の遂行レベルによって社会的比較における第三者の効果が調整されることを検討した。この実験は、研究2の解釈の検討と、仮説2の検証を兼ねていた。研究4と研

究 5 は、研究 1 から研究 3 の結果をふまえた上で、第三者の機能を探索的に検討した。研究 4 は、第三者が注目する基準により、第三者の効果が調整されることを検討した。研究 5 では、比較他者に対する第三者の注目だけでなく、その評価内容を操作することで、社会的比較における評価方向に第三者が影響していることを検討した。これらの研究によって、仮説 1、仮説 2 の検証、および第三者の機能を明らかにした。

以下に述べる仮説 3 は、比較状況における相対評価の可能性を自己が知覚する程度の個人差と、社会的比較傾向の関連を述べたものである。

仮説 3: 第三者の存在を顕現化させやすい特性を有する人ほど社会的比較を行おうとする。

この仮説は、第三者の相対評価を推測する心理プロセスの存在、および、その心理プロセスが近接因のレベルでどのように実現されているのかについて明らかにする。本稿では、公的自己意識（研究 6）、評価懸念（研究 7）、対人ネットワークの独自性（研究 8）のそれぞれの個人差と社会的比較傾向との関連を検討することで仮説 3 を検証した。これらの特性は、それぞれ他者を意識した個人特性の代表である。もし、第三者からの相対評価をベースとした社会的比較が系統発生的に古くから存在しているのであれば、そのようなプロセスを惹起する心理特性が存在していてもおかしくはない。そこで、本稿では、第三者による相対評価に敏感であると想定されるいくつかの心理特性、状況の個人差と、他者との比較をしようとする傾向との関連を検討することにより、本稿の理論的考察の傍証とした。

以上から、次の図 2.3 に示される実証研究の分類が得られる。

仮説 1 の検証

第三者の視点取得が
社会的比較による自己評価に与える影響 (研究 1)

第三者の集団成員性と
社会的比較による評価の関係 (1) (研究 2)

仮説 2 の検証

第三者の集団成員性と
社会的比較による評価の関係 (1) (研究 2)

第三者の集団成員性と
社会的比較による評価の関係 (2) (研究 3)

第三者の機能の探索的検討

第三者の注目する基準と
社会的比較による評価の関係 (研究 4)

第三者の評価内容と
社会的比較による評価の関係 (研究 5)

仮説 3 の検証

自己意識特性と社会的比較傾向の関係 (研究 6)

評価懸念と社会的比較傾向の関係 (研究 7)

対人ネットワークの独自性と
社会的比較傾向の関係 (研究 8)

図 2.3 実証研究の分類

研究 2 は仮説 1 と仮説 2 の検証を兼ねている

第3章：比較状況における第三者の影響と機能の分析

第1節：概要

本章における実証研究の目的は、仮説1（比較状況における第三者の存在によって社会的比較による評価が顕在化する）、仮説2（比較状況にかかわる第三者が自己にとって心理的に近い他者であるほど、社会的比較による評価は顕在化する）を検証することである。さらに、比較状況における第三者の機能を探索的に検討した。具体的には、自己と比較他者が存在する状況に第三者の要因を配置する実験的手法を用いて検証した。第三者がかかわる比較状況を形式化した前章において、三つの状況が明らかにされた。この内、本章では一貫して第三者が比較他者にのみ注目、言及している状況を検討した。

前章で議論した二つの評価パターンを、社会的比較による評価の生起を判定する基準として採用した。具体的には、比較他者の要因によって自己評価に変化が起きることを社会的比較による評価と捉える評価パターン（a）は、研究1で採用した。自己の遂行と自己評価、自己の遂行と他者評価との関連を社会的比較による評価と捉える評価パターン（b）は、研究2から研究5で採用した。研究2から研究4では、比較状況の要因に自己の遂行を共変量とする分析をはじめに行った。そして、比較状況と共変量の交互作用が有意であった場合、共変量と社会的比較による評価の関連を比較状況ごとに検討した。さらに、自己評価と他者評価の関連を社会的比較による評価と捉える評価パターン（b）の発展形は研究5で採用した。

以上の実証方法により、研究2から研究5までの研究では個人差要因が交絡することになった。それゆえ、比較他者や第三者の要因を従属変数の変化に対する特定の原因であると結論することはできない。なぜなら、これらの結果は本質的に個人間変動の要因を排除できないからである。ただし、可能な限り統制された状況で観察することで、比較状況における第三者の役割について間接的な推論を可能にした。

第2節：第三者の視点取得が

社会的比較による自己評価に与える影響（研究1）¹⁰

研究1の目的は仮説1（比較状況における第三者の存在によって社会的比較による評価が顕在化する）を検証することである。

本研究では、異なる遂行結果を示す他者を実験参加者に提示する方法を用いた。具体的には、ある課題の成績が実験参加者よりも良い、または悪い他者を提示した。実験参加者から見て、前者は上位の比較他者であり、後者が下位の比較他者である。上位の比較他者を提示した群に比べて、下位の比較他者を提示した群の自己評価が有意に高い場合を対比効果と見做すのが一般的である（Mussweiler, Rüter, & Epstude, 2004）。これは、前章で議論した、社会的比較による評価パターン（a）に該当する。

比較他者の遂行結果の提示に加えて、比較他者に注目する第三者を実験的に操作した。第三者の注目方向は、比較他者にのみ向けたものであった。第三者の注目方向を比較他者に限定するのは、この状況で比較他者との対比効果が観察されることにより、第三者による相対評価を自己が予期していたことが明確に主張できるからである。

第三者の注目の操作は、視点取得の教示で行った。Davis, Conklin, Smith, & Luce（1996）は、観察者として単に他者が存在するよりも、他者の視点を取得する方が自己概念に影響することを明らかにした。したがって、比較状況における第三者の注目の影響は、他者の視点を想像した場合に顕著であると予想する。そこで、本研究では、同性友人が比較他者に注目している状況を想像させることで、第三者の注目を操作した。

実験計画は、比較他者（上位・下位）×第三者の視点取得（あり・なし）の実験参加者間要因である。本稿の仮説1より、第三者の視点を想像した群では、第三者の視点を想像しない群に比べて上位他者群と下位他者群の自己評価の差が大きいとの作業仮説を設定した。また、第三者である同性の友人関係に性差があることも予想されるため（Cross & Madson, 1997）、分析では性別の要因も併せて検討した。

¹⁰ 本研究は以下の論文を加筆修正したものである。

大久保暢俊（2010）. 第三者の視点取得が社会的比較過程に与える影響 心理学研究, 81, 333-338.

方 法

実験参加者

四年制大学の学生 114 名（男性 42 名，女性 72 名）が実験に参加した。

手続き

実験は個別に行った。今回の実験は“言語テストと対人印象の実験”，および“言語テストの感想”の二つのセクションで成り立っていると教示した。その後，最初のセクションである“言語テストと対人印象の実験”を行った。“他者の言語テストの成績を見てその人の印象を作り上げるため，まずはどのようなテストを受けていたのかを知る必要がある”と教示し，実験参加者自身に言語テストを受けてもらった。

言語テストは，10×9 の平仮名の文字列の中から三文字の単語をパソコンで作成するテストであった。テストの説明用紙には，この言語テストのルールは以下の四つであることが記載されていた。(a) 単語は人名以外ならどんな単語でも良い。(b) 文字列の文字は何度でも使用できる。(c) 一度作成した単語は使用できない。(d) テストは練習が 1 分，本番が 2 分である。ルール説明の後に，今回の言語能力テストは“思いついた単語の数”と“思いついた単語のユニークさ（独自さ）”の総合得点で自身の言語能力が判定されると教示した。上記のルールや判定基準について口頭でも教示した。さらにパソコンのデモンストレーションでも同様の内容を教示した。

その後，6×6 の文字列で練習を行った。練習が終わると，テストのやり方で不明な点がなかったかどうかを確認した。次に，10×9 の文字列で本番を行った。本番テストが終了すると，テスト結果を処理している画面がパソコンのモニターに現れ，約 10 秒後に結果がフィードバックされた。実験参加者の点数はすべての条件で 14 点であった¹¹。

その後，実験参加者自身に結果の表示ウィンドウを閉じてもらい，匿名の他者である A さん（比較他者）の言語テストの成績と A さんの印象に関する質問紙を配付した。A さんの点数は上位他者群で 21 点，下位他者群で 7 点であり，実験参加者と同じ学科，学年，性別であった。さらに，実験参加者が A さんの成績を見る際，第三者の視点取得あり群では，“この学生さん（A さん）の結果を，もしあなたの親しい友人（あなたと同性の友人）が見たとして，友人がこの人物をどのような人だと思うか想像してみてください”と質問紙上で教示し，

¹¹ 実験参加者は自身の得点が自動的に計算されるのをパソコン上のプログレスバーで知るだけであった。得点計算の具体的な方法や得点範囲などの情報は教示しなかった。これは，得点の解釈に影響する要因の効果を可能な限り小さくし，比較他者の効果を検討しやすくするためである。

第三者の視点取得なし群では、“この学生さん(Aさん)の結果をあなたが見て、この人物がどのような人だと思うか想像してみてください”と教示した。さらに、第三者の視点取得あり群では想像した友人のイニシャルを記入してもらった。成績を見た後、Aさんの印象を図形と色で回答してもらった¹²。

次に、“今回の言語テストの基礎的資料を得るため”と教示し、承諾の署名と従属変数を含んだ質問紙に回答してもらった。すべての回答に記入が終わると、実験者がその場でディブリーフィングを行い、実験は終了した。

質問項目

“言語テストの感想”のセクションで配付した質問紙には、言語テストに関する自己評価、および比較他者評価についての項目が含まれていた。さらに、視点取得あり群には第三者に対する親密度と重要度を尋ねる項目が含まれていた。全ての項目の回答は7件法であった。自己評価項目と比較他者評価項目は、数値が高いほど自己や比較他者を肯定的に評価していることを示していた。また、第三者との親密さ、および重要さについても、数値が高いほど親密度や重要度が高いことを示していた。

自己評価項目 言語テストの結果と、言語テストに関連する能力の自己評価について質問紙に回答してもらった。項目は“どのくらいこのテストができたと思うか”、“この結果にどのくらい満足しているか”、“同じテストをやったらどの程度できると思うか”、“このテストと似たようなテストをやったらどの程度できそうか”、“言語能力はどのくらいだと思うか”の5項目であった。

比較他者評価 自己評価に類似した項目を用いて、比較他者に対する評価を尋ねた。項目は“どのくらいAさんはこのテストができたと思うか”、“Aさんは、同じテストをもう一度やったらどの程度できると思うか”、“Aさんは、このテストと似たようなテストをやったらどの程度できそうか”、“Aさんの言語能力はどのくらいだと思うか”の4項目であった。

第三者に対する親密度・重要度 視点取得あり群では、“第三者が自分にとってどれほど親密であるのか”、また、“第三者が自分にとってどれほど重要な人物であるのか”の2項目について回答してもらった。

¹² 具体的には、Aさんのイメージに当てはまる図形を“三角形、円形、四角形、星形”の中から選択する課題であった。色については、“赤、青、黄、白”の中からもっともAさんのイメージに近いものを選択する課題であった。

結 果

教示に不備のあった3名を除いた111名分のデータを分析に用いた。自己評価5項目を一つの指標とし、自己評価得点として合計値を算出した($\alpha=.71$)。比較他者評価4項目についても、比較他者評価得点として合計値を算出した($\alpha=.86$)。

比較他者評価

比較他者評価得点について、比較他者(上位・下位)×第三者の視点取得(あり・なし)×性別(女性・男性)の分散分析を行ったところ、比較他者の主効果が有意であった($F(1, 103) = 56.43, p < .01$)。下位他者群($M=15.09, SD=3.00$)に比べ、上位他者群($M=19.44, SD=2.86$)で比較他者評価得点が高かった。そのほかの主効果、交互作用効果はすべて有意でなかった($ps > .10$)。

自己評価

自己評価得点について、比較他者(上位・下位)×第三者の視点取得(あり・なし)×性別(女性・男性)の分散分析を行ったところ、比較他者の主効果が有意であった($F(1, 103) = 10.68, p < .01$)。下位他者群($M=19.07, SD=3.55$)よりも上位他者群($M=16.78, SD=3.96$)で自己評価得点が低かった。

さらに、比較他者×第三者の視点取得×性別の交互作用効果が有意であった($F(1, 103) = 6.49, p < .01$)。単純交互作用の分析を行ったところ、女性では比較他者×第三者の視点取得の交互作用効果が有意であり($F(1, 103) = 4.25, p < .05$)、男性でも同様に、比較他者×第三者の視点取得の交互作用効果が有意であった($F(1, 103) = 4.27, p < .05$)。そこで、単純・単純主効果の分析を行ったところ、第三者の視点取得あり群の女性実験参加者では比較他者の効果が有意であり($F(1, 103) = 5.75, p < .05$)、下位他者群($M=18.48, SD=3.63$)よりも上位他者群($M=15.00, SD=3.06$)の自己評価得点が有意に低かった。第三者の視点取得なし群の女性実験参加者では比較他者の効果は有意でなかった($F(1, 103) = 0.05, ns$)。第三者の視点取得なし群の男性実験参加者では比較他者の効果が有意であり($F(1, 103) = 9.80, p < .01$)、下位他者群($M=20.73, SD=3.85$)よりも上位他者群($M=15.77, SD=5.31$)の自己評価得点が有意に低かった。第三者の視点取得あり群の男性参加者では比較他者の効果は有意でなかった($F(1, 103) = 0.25, ns$)。以上の結果から、第三者の視点取得をした女性実験参加者、および第三者の視点取得をし

なかった男性実験参加者で社会的比較による対比効果が確認された¹³。

表 3.1 自己評価得点の平均値 (標準偏差)

比較他者	女性		男性	
	視点取得あり	視点取得なし	視点取得あり	視点取得なし
上位他者	15.00 (3.06)	18.18 (2.70)	18.78 (3.87)	15.77 (5.31)
<i>n</i>	16	17	9	13
下位他者	18.48 (3.63)	18.50 (3.10)	19.50 (3.66)	20.73 (3.85)
<i>n</i>	21	16	8	11

注) 数値が高いほど自己評価が高いことを示す。

第三者に対する親密度・重要度

第三者の視点取得が社会的比較による自己評価に与える影響に性差が存在したため、第三者に対する親密度、重要度について検討した。本研究で測定した項目の相関が高かったため ($r=.81$ $p<.01$)、2 項目の合計値を第三者と自己の関係の重要さの指標とした。

この合計値について、比較他者 (上位・下位) ×性別 (女性・男性) の分散分析を行ったところ、性別の主効果が有意傾向であった ($F(1, 50) = 2.77$ $p=.10$)。男性 ($M=11.00$, $SD=2.65$) に比べ、女性 ($M=12.14$, $SD=2.25$) の方が第三者を親密で重要な人物と評価していた。比較他者の主効果、および交互作用効果は有意でなかった ($ps>.10$)。

考 察

第三者の視点から比較他者に注目することで、社会的比較による対比効果が女性実験参加者で確認された。第三者の視点を想像して比較他者に注目することは、第三者による相対評価の可能性を想起させる状況である。したがって、

¹³ 第三者の視点取得に着目した単純・単純主効果の分析を行ったところ、上位他者群における女性参加者では第三者の視点取得の効果が有意であり ($F(1, 103) = 4.80$, $p<.05$)、第三者の視点取得あり群の方がなし群よりも自己評価得点は有意に低かった。上位他者群における男性参加者でも第三者の視点取得の効果が有意であり ($F(1, 103) = 4.30$, $p<.05$)、第三者の視点取得なし群の方があり群よりも自己評価得点は有意に低かった。それに対し、下位他者群では性別に関わらず第三者の視点取得の効果が有意でなかった。この結果は、第三者の視点取得による効果は上位他者を提示した場合に顕著であることを示唆する。しかし、本研究では、上位他者群と下位他者群の自己評価得点の差を対比効果としたため、各条件における比較他者の効果に着目した。

そのような状況において比較他者と自己の優劣が重要となり、自他の相対的位置を反映した対比的な自己評価が帰結したと考えられる。それに対して、男性実験参加者では、第三者の視点を想像しない群で社会的比較による対比効果が確認された。

実験結果に性差が確認されたことについて、二つの可能性が考えられる。ひとつは、男性実験参加者に比べ、女性実験参加者の方が視点取得による想像が鮮明であった可能性である。これは、mind-reading のような他者の思考や感情などを読み解く能力で、女性の方が優れている可能性を指摘した Thomas & Fletcher (2003) の知見から示唆される。また、もうひとつの可能性として、性別による友人関係の捉え方の違いを挙げることで、たとえば、同性の友人関係では、女性の方が関係自体を重視するとの知見がある (Fehr, 2004)。視点取得は関係を重視する方向に力が働きやすいため (Arriaga & Rusbult, 1998)、女性において顕著に影響が現れたのかもしれない。有意傾向にはとどまるが、本研究においても、男性に比べ女性では第三者を親密で重要であると評定していた。この結果は、自己と第三者の関係の要因が自己評価への影響を調整することを示唆する。つまり、性差を対人関係の捉え方の違いと見なすことで、第三者と自己との関係の在り方が社会的比較にとって重要な要因であることが推論されるのである¹⁴。

最後に研究 1 の問題点を考察する。本研究では、第三者の注目に視点取得の手法を用いた。想像した友人のイニシャルは、分析対象の全ての実験参加者に記入されていたが、適切に想像されていたかどうかのチェックは行われていなかった。したがって、視点取得の操作の有効性に疑問が残る。さらに、第三者が比較他者に注目することで、第三者による相対評価が本当に予期されていたかどうかは実験状況による間接的な推論でしかないことは留意する必要がある。

¹⁴ 第三者の視点取得によって、自他の比較が阻害、または軽視されたために、当該群の男性実験参加者で比較他者の効果が確認されなかったのかもしれない。本研究で指摘した mind-reading の能力差の説明を採用すると、男性では視点取得を通じて比較他者を認識するのが困難であったため、比較が出来なかったと解釈できる。また、第三者との関係性の説明を採用すると、第三者からの相対評価は男性にとって重要でなかったために自己評価に影響しなかったと解釈できる。しかし、第三者の視点取得あり群の男性実験参加者で比較他者の効果が確認されなかったことについて、本研究の結果だけでは十分な考察は出来ない。このことは、第三者の視点取得なし群の女性実験参加者で比較他者の効果が確認されなかったことについても同様にあてはまる。

第3節：第三者の集団成員性と社会的比較による評価の関係 (1) (研究2)¹⁵

研究2の目的は仮説2(比較状況にかかわる第三者が自己にとって心理的に近い他者であるほど、社会的比較による評価は顕在化する)を検証することである。また、研究1で考察した自己と第三者の関係による解釈は仮説2と密接に関連する。したがって、本研究は研究1の解釈の検討も兼ねている。

研究1において、社会的比較における第三者の仮説(仮説1)は女性実験参加者のみで支持される傾向にあった。この性差の説明の一つとして、自己と第三者の関係の親密度、重要度の違いを挙げた。具体的には、比較状況における第三者が自己にとって親密であるほど、その第三者からの相対評価は重要となり、社会的比較による評価が顕在化すると解釈であった。この解釈の実証的証左として、女性実験参加者の方が第三者を親密で重要であると評定していたことをあげた。

研究1では、第三者である友人との関係が自己にとって重要であることを前提とした。重要な他者は自己にとって心理的に近い人物である。社会的比較が集団内での社会的注目保持能力と関連するという本稿の立場から解釈すると、相対評価に基づく地位と、そこから帰結する資源保持の獲得可能性にかかわるがゆえに、心理的に近い人物が第三者であるほど影響が大きかったのかもしれない。したがって、第三者が重要な人物であることの十分条件は、自らと同じ集団に所属していることであると推論できる。

そこで、本研究では、第三者が内集団成員である群と外集団成員である群を設定した。もし、社会的比較によって他者との優劣関係が理解され、それが地位の概念と密接につながっているのであれば、自らと同じ集団に属する第三者による評価は、外集団他者による評価と比べて重要度が高いであろう(e.g., Zell & Alicke, 2009)。したがって、内集団成員が第三者である比較状況において、社会的比較による評価は顕著であると予測する。

本研究では、実験参加者に“言語能力テスト”を受けてもらい、その後、比較他者の遂行結果と第三者によるコメントを提示した。言語テストの内容は研究1と同様であったが、PC上ではなく質問紙上で行うものであった。また、研究1とは異なり、作成した単語の数は課題終了時点で実験参加者自身に明らかにわかるようになっていた。研究1と同様に、言語能力テストは単語の数とユニークさの二つの指標で判定されるため、結果の解釈には不明確な部分が残るが、実験参加者にとって作成された単語の数は後の評価に大きく影響すると予想さ

¹⁵ 本研究の一部のデータは日本心理学会で発表された。

大久保暢俊(2007). 第三者の集団成員性が社会的比較による自己評価に与える影響 日本心理学会第71回発表論文集, 232

れた。つまり、本研究では、課題の遂行量は実験参加者によって異なっているにもかかわらず、遂行結果のフィードバックを用いた統制がなされていなかったのである。したがって、本研究では、比較他者や第三者の存在する比較状況と作成した単語の数（自己の遂行量）の個人差の関連を検討することで、社会的比較における第三者の効果を検討した。具体的には、比較状況と自己の遂行量（個人差要因）の交互作用が存在することを前提とし、自己の遂行量と自己評価、および自己の遂行量と他者評価の関連を検討した。これは、前章で議論した、社会的比較による評価パターン（b）に該当する。本研究では、比較他者評価のほかに平均他者評価を測定した。平均他者評価は、前章で議論した比較他者とは区別される他者一般の評価であると想定した。

さらに、研究 1 とは異なり、比較他者と第三者を直交する要因で配置せず、それらの人物を含めた比較状況の要因として一元化した。この設定により、第三者の集団成員性の操作と、比較他者や第三者の存在しない統制群を並列して検討することを可能にした。したがって、本研究の実験計画は、比較状況（内集団第三者＋比較他者、外集団第三者＋比較他者、比較他者のみ、統制）の実験参加者間計画であった。本稿の仮説 1、仮説 2 より、そのほかの状況に比べて、第三者が内集団成員である比較状況では、自己の遂行量と自己評価に正の関連、および自己の遂行量と比較他者評価、平均他者評価に負の関連が観察されるであろうとの作業仮説を設定した。また、研究 2 では、三人の第三者が比較他者に言及している状況を設定した。

方 法

実験参加者

都内専門学校 of 学生 106 名が実験に参加した（男性 72 名、女性 34 名）。参加者の平均年齢は 24.44 歳（ $SD=4.73$ ）であった（範囲は 18 歳から 38 歳まで）。

手続き

実験は講義時間内に実施した。実験は三つのクラスで行われ、それぞれの参加者数は、33 名、31 名、42 名であった。それぞれのクラスで各群がランダムになるようにした。前半で“言語能力テスト”を行い、後半で言語テストについての調査を行うと教示した。言語テストは、単語の作成数と、作成された単語のユニークさを総合して言語能力が判定されると説明した。そのため、真の得点を知るには専門の機関で分析される必要があると教示した。しかし、今回は言語テストを受けたときの感想を聞くのが主な目的であり、個々人の得点に興味はないこと、それゆえ詳細なフィードバックは行わないと教示した。言語能力テストの用紙と調査は一つにまとめて質問紙の形式で配付した。

はじめに、実験者の指示に従って言語能力テストを行った。テストは10×9の平仮名の文字列の中から三文字の単語を自由に作成するものであった。この言語テストのルールとして、(a) 単語は人名以外ならどんな単語でも良い、(b) 文字列の単語は一度使うと使えない、(c) 使った文字には“×”をつける、以上の三点が記載されていた。

上記のルールやテストの受け方などで疑問が無いかどうかを確認した後、6×6の文字列で実験参加者に練習試行を行ってもらった。作成した単語は文字列の下にある回答欄に記入してもらった。回答欄には20個の単語が記入できるスペースが設けられていた。練習の制限時間は1分であった。その後、10×9の文字列の本番試行を行ってもらった。本番の制限時間は2分であった。

比較他者、および第三者の操作 言語テスト終了後、比較他者を提示する群の質問紙には、“言語テストのイメージをより鮮明にしようため”との名目で、同じテストを受けた去年の学生の回答を提示した。その学生の回答は、実験者参加者と同じ専門学校の匿名学生（Aさん：比較他者）であった。Aさんの回答欄には17個の単語が記入されていた。この単語数は、2分間の本番で作成するのは困難であることが事前に確認されていた。

さらに、内集団第三者＋比較他者群、および外集団第三者＋比較他者群の用紙には、回答欄の下にAさんの回答を見たほかの3名の学生の感想コメントが記載されていた。さらに、内集団第三者＋比較他者群の用紙には、その3名の学生が自分と同じ専門学校の学生であると記載されていた。外集団第三者＋比較他者群の用紙には、自分とは違う専門学校の学生たちの感想であると記載されていた。感想は、比較他者の回答欄にある単語の作成数やユニークさを肯定的に評価するものであった。比較他者のみ群の用紙には、第三者の感想コメントは無かった。また、統制群の実験参加者は、言語テスト終了後、即座に従属変数を含んだ質問紙に回答してもらった。

質問項目

後半の調査と称し、従属変数を含んだ質問紙に回答してもらった。質問紙には、言語テストに関する自己評価、比較他者評価、平均他者評価の項目が含まれていた。ただし、比較他者を提示しなかった統制群の用紙には、比較他者の項目は含まれていなかった。それぞれの項目は、数値が高いほど、自己、比較他者、平均他者のそれぞれの対象を肯定的に評価していることを示していた。さらに、言語能力の重要度、テストの信頼性、所属する学校の重要度について回答してもらった。これらの項目は、数値が高いほどより重要で信頼性があることを示していた。全ての項目は7件法であった。

自己評価項目 言語テストの結果と、言語テストに関連する能力の自己評価について質問紙に回答してもらった。項目は“どのくらいこのテストができたと

思うか”，“この結果にどのくらい満足しているか”，“同じテストをやったらどの程度できると思うか”，“このテストと似たようなテストをやったらどの程度できそうか”，“言語能力はどのくらいだと思うか”の5項目であった。

比較他者評価項目 Aさんの言語テストの結果と，言語テストに関連する能力について，自己評価と同様の項目を用いて質問紙に回答してもらった。項目は“Aさんは，どのくらいこのテストができたと思うか”，“Aさんは，この結果にどのくらい満足していると思うか”，“Aさんは，同じテストをやったらどの程度できると思うか”，“Aさんは，このテストと似たようなテストをやったらどの程度できそうか”，“Aさんの言語能力はどのくらいだと思うか”の5項目であった。

平均他者評価項目 平均的な専門学校生がこのテストを受けたと想定してもらい，言語能力テストの出来具合や言語能力について評定してもらった。項目は“平均的な学生は，どのくらいこのテストができると思うか”，“平均的な学生は，このテストと似たようなテストをやったらどの程度できそうか”，“平均的な学生の言語能力はどのくらいだと思うか”の3項目であった。

全ての回答が終わると，実験参加者にディブリーフィングを行い，実験は終了した。

結果

自己評価 5 項目を 1 つの指標とし、自己評価得点として合計値を算出した ($\alpha=.84$, 可能範囲は 5 から 35 まで)。比較他者評価 5 項目について、比較他者評価得点として合計値を算出した ($\alpha=.88$, 可能範囲は 5 から 35 まで)。平均他者評価 3 項目について、平均他者評価得点として合計値を算出した ($\alpha=.82$, 可能範囲は 3 から 21 まで)。

言語能力の重要度, テストの信頼性, 所属する学校の重要度については, それぞれ 1 項目を分析に用いた (可能範囲は 1 から 7 まで)。

各指標の記述統計

表 3.2 に各指標の平均値と標準偏差を示す。

表 3.2 各指標の平均値 (標準偏差)

指標	内集団第三者		外集団第三者		比較他者		統制	
	+比較他者		+比較他者					
作成した単語数	7.38	(2.37)	6.92	(2.71)	6.41	(1.97)	7.15	(2.07)
言語能力の重要度	6.19	(1.02)	6.32	(0.95)	6.24	(1.09)	6.27	(0.78)
テストの信頼性	3.77	(1.34)	4.20	(1.12)	4.48	(1.18)	4.31	(1.23)
学校の重要度	6.31	(1.05)	6.24	(1.09)	6.24	(1.12)	6.50	(0.76)
自己評価	18.00	(5.98)	16.40	(3.76)	15.79	(3.45)	16.08	(5.18)
比較他者評価	30.27	(2.78)	27.79	(4.47)	28.39	(5.42)	-	-
平均他者評価	13.15	(2.82)	11.88	(2.68)	12.07	(2.17)	11.92	(2.68)

注) 数値が高いほど重要で, 信頼でき, 評価が高いことを示す。

実験参加者の作成単語数

実験参加者が本番の 2 分間で作成した単語の平均個数は 6.95 個であった ($SD=2.28$)。最小個数は 1 個であり, 最大個数は 15 個であった。したがって, 比較他者である A さんの作成した 17 個より多くの単語を作成した実験参加者は存在しなかった。

次に, 比較状況による作成した単語数の違いを検討するために, 一元配置分散分析を行った。その結果, 比較状況の効果は有意でなかった ($F(3,102)=0.92$, ns)。

言語能力の重要度, テストの信頼性

言語能力の重要度や, テストの信頼性に対する群間での違いを検討するため, それぞれの項目について一元配置分散分析を行った。その結果, 比較状況の効

果は言語能力の重要度 ($F(3,102) = 0.08, ns$), テストの信頼性 ($F(3, 102) = 1.67, ns$) 共に有意でなかった。

所属する学校の重要度

自集団に対する態度の群間での違いを検討するため, 所属する学校の重要度について一元配置分散分析を行った。その結果, 比較状況の効果は有意でなかった ($F(3, 102) = 0.38, ns$)。

性差の検討

自己評価, 比較他者評価, 平均他者評価にそれぞれの変数について, 実験参加者の単語の作成数を共変量とする, 比較状況×共変量×性差の共分散分析を行った。その結果, 性差の主効果, および性差と他の変数との交互作用効果はすべての分析で確認されなかった ($ps > .10$)。そこで, 以下では性別の要因を除いた分析結果を報告する。

自己評価

自己評価得点について, 実験参加者の単語の作成数を共変量とする共分散分析を行った。その結果, 比較状況×共変量の交互作用効果が有意であった ($F(3, 98) = 5.27, p < .01$)。そこで, 作成した単語数を説明変数, 自己評価得点を目的変数とする回帰分析を群ごとに行った。その結果, 統制群において, 作成した単語数から自己評価得点に正の影響が確認された ($R^2_{adj} = .64, F(1, 24) = 45.94, p < .01, \beta = .81, t = 6.78, p < .01$)。その他の群では有意でなかった ($R^2_{adj} = -.04 \sim .02, Fs < 1.56, ns$)。

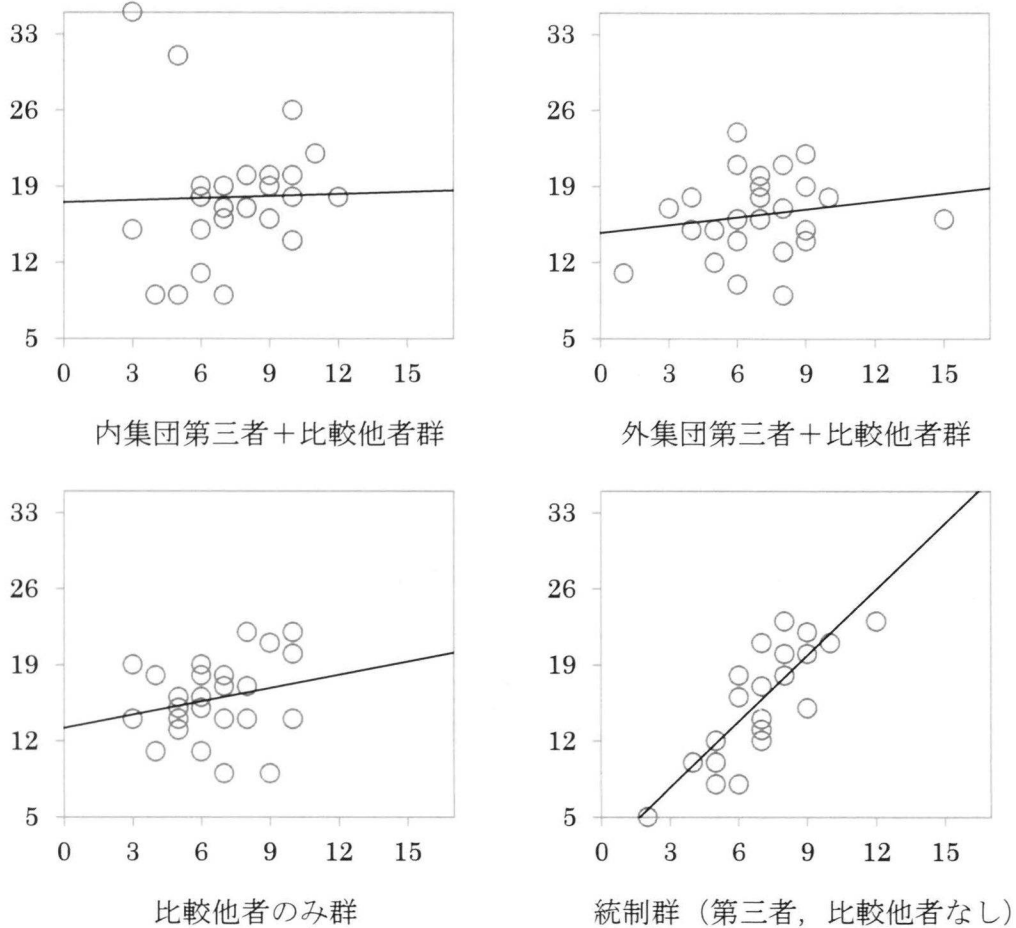


図 3.1 自己の遂行量と自己評価得点の関係
 横軸は自己の遂行量（個数），縦軸は自己評価得点（5～35）

比較他者評価

比較他者評価得点について，実験参加者の単語の作成数を共変量とする共分散分析を行った。その結果，比較状況×共変量の交互作用効果は有意でなかった ($F(2, 72) = 0.68, ns$)。そこで，共変量との交互作用項を投入せずに共分散分析を行ったところ，比較状況の主効果が有意傾向であった ($F(2, 74) = 2.52, p = .09$)。しかし，Bonferroni 法による多重比較を行った結果，比較状況間の有意な差は確認されなかった ($ps. > .10$)。

共分散分析によって回帰の等質性の仮定は棄却されなかったが，自己評価と同様に，作成した単語数を説明変数，比較他者評価得点を目的変数とする回帰分析を群ごとに行った。その結果，内集団第三者+比較他者群において，作成

した単語数から比較他者評価に負の影響が有意傾向ではあるが確認された ($R^2_{adj}=.09, F(1, 24) = 3.50, p=.07, \beta=-.36, t=-1.87, p=.07$)。その他の群では有意でなかった ($R^2_{adj}=-.05\sim-.00, Fs < 0.94, ns$)。

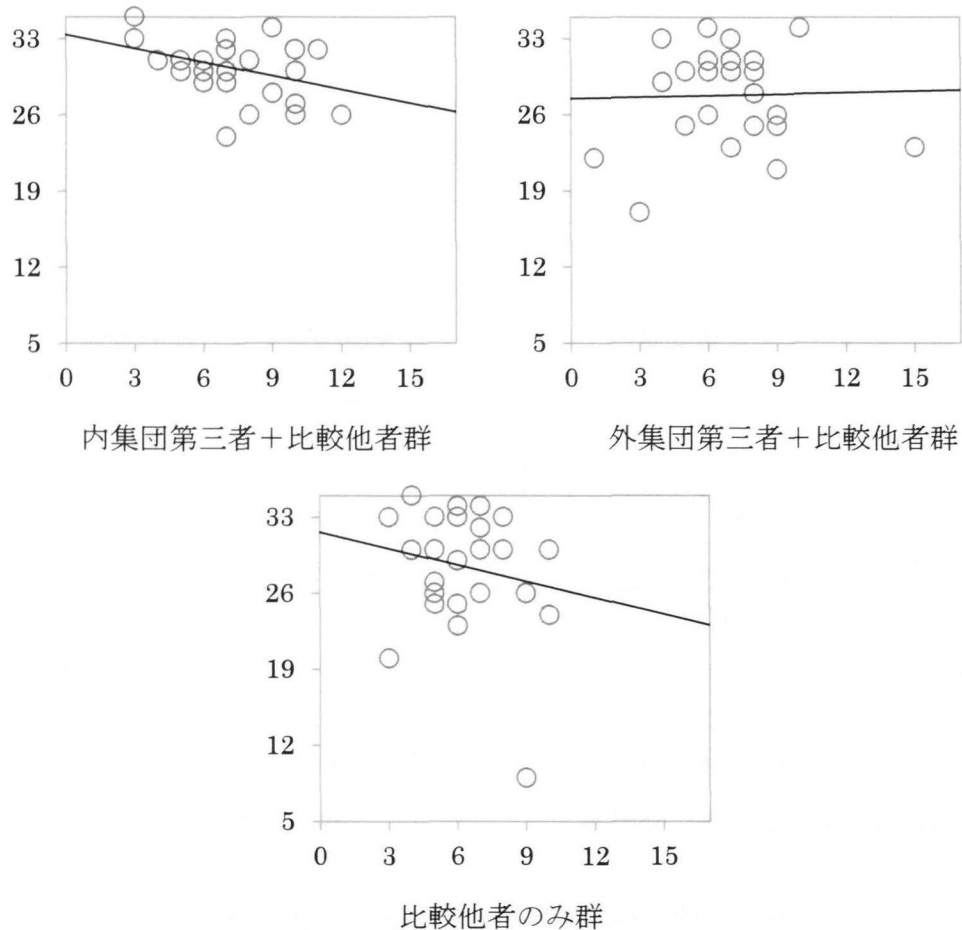


図 3.2 自己の遂行量と他者評価得点の関係
横軸は自己の遂行量（個数），縦軸は他者評価得点（5～35）

平均他者評価

平均他者評価得点について、実験参加者の単語の作成数を共変量とする共分散分析を行った。その結果、比較状況×共変量の交互作用効果が有意であった ($F(3, 98) = 2.71, p < .05$)。そこで、作成した単語数を説明変数、平均他者評価得点を目的変数とする回帰分析を群ごとに行った。その結果、内集団第三者+比較他者群において、作成した単語数から平均他者評価得点に負の影響が確認された ($R^2_{adj}=.21, F(1, 24) = 7.74, p < .01, \beta=-.49, t=-2.78, p < .01$)。その他の群では有意

でなかった ($R^2_{adj}=-.04\sim.02$, $F_s<1.46$, ns)。

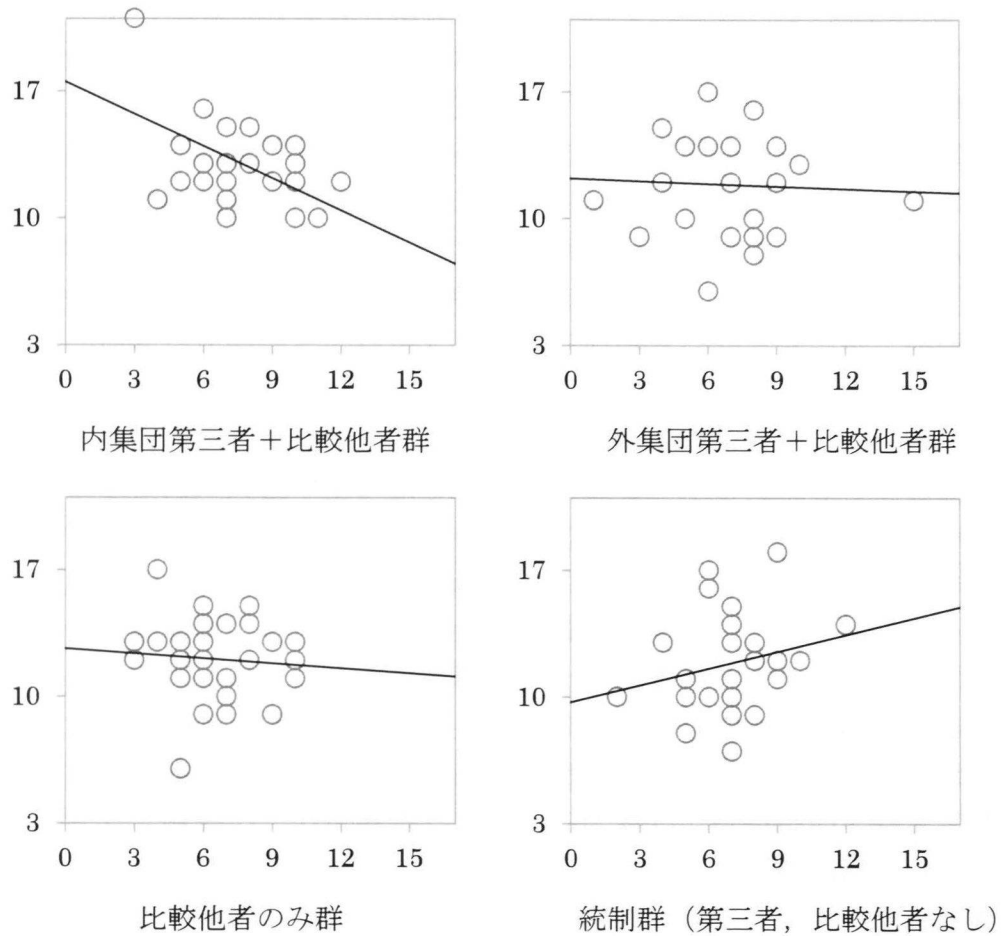


図 3.3 自己の遂行量と平均他者評価得点の関係
横軸は自己の遂行量 (個数), 縦軸は平均他者評価得点 (3~21)

考 察

内集団成員である第三者が比較他者を評価する状況において、自身の単語作成数が多い人ほど平均他者評価が低いという関係が確認された。比較他者との関係では回帰の等質性の仮定が棄却されなかった。ただし、比較状況ごとの単回帰分析では、第三者が内集団成員の群でのみ、自身の単語作成数が多い人ほど比較他者評価は低い傾向であった。また、自身の単語の作成数が多い人ほど自己評価が高いという関係は、第三者も比較他者も存在しない群で確認され、その他の群では確認されなかった。さらに、性別による違いも確認されなかつ

た。

実験参加者自身のテスト結果と自己評価との正の関係が確認されると同時に、比較他者や平均他者の評価との負の関係が確認されるという“典型的な”社会的比較の評価は、どの状況でも観察されなかった。しかし、重要な指標である比較他者、平均他者との負の関係は、第三者が内集団成員の状況でのみ確認された。自己の遂行と他者評価の関連を社会的比較の重要な指標であるとする本稿の立場から、比較他者を評価する第三者が自己と同じ集団の成員である場合に社会的比較による評価が顕在化しやすいことが示唆される。この結果は、本稿の仮説2の実証的証左であると考えられる。

しかし、なぜ、比較他者の存在しない群でのみ自己の遂行と自己評価の関係が確認され、その他の群では確認されなかったのであろうか。比較状況間の直接の比較は分析の都合上できないが、本研究ではこの結果を二つの観点から解釈する。ひとつは、評価の手がかりの多さである。本研究における言語能力テストは、単語の作成数とユニークさの二つの指標で判定されるものであった。単語の作成数とユニークさをそれぞれ一つの手がかりとしてカウントすると、統制群の実験参加者にとっての手がかりの数は、自らのテスト結果から示される二つであるのに対して、その他の群では比較他者のテスト結果も含めて四つであった。すなわち、言語能力テストの出来具合から能力の推測をする際、比較他者が存在する群の実験参加者にとっては、自らが作成した単語数は評価の手がかりとして四分の一の情報価しかないのに対し、統制群の実験参加者にとっては二分の一の情報価であったのである。したがって、統制群では、自らが作成した単語数が評価の手がかりとして重視され、自己評価との関係が確認されたと解釈できる¹⁶。

もう一つは、自己高揚の目標が活性化した結果、自己評価との関係が確認されなかったとする解釈である。この解釈は、比較他者が存在する群でも、自身の単語の作成数と自己評価の関係が本来は存在していたことを前提とする。本研究での比較他者は、単語の作成数の観点からは上位他者であり、すべての実験参加者は劣位に位置する¹⁷。Wills (1981) の下方比較理論や、Tesser (1988) の自己評価維持理論では、自らが劣位であることで自尊心が脅かされ、そのような状態は回避するように動機づけられる。本研究の実験参加者も、自尊心を維持、高揚させる方略として、単語の作成数と自己評価とを心理的に結び付けるのを回避したのである (Goethals & Darley, 1977)。それに対し、比較他者が存

¹⁶ さらに、単語のユニークさは実験参加者にとって曖昧な指標であり、単語の作成数による手がかりが当面の状況では重視されたと仮定すると、この傾向はさらに顕著であろう。

¹⁷ 比較による自己高揚の目標は、“凌ぐべき相手としての上位他者”と“自らより劣位である下位他者”の異なった二つの様相があることが指摘されているが、本研究では後者の立場を取ったことになる。

在しない統制群の実験参加者にとっては、そのような脅威が無く、作成した単語数と自己評価を結び付けたのである。

自己高揚による上記の解釈を敷衍すると、社会的比較による正確な自己評価の目標は、必ずしも優勢ではない目標のように思える。しかし、内集団第三者＋比較他者群における参加者自身の単語の作成数と他者評価の関連を考慮すると、比較他者や平均他者の評価を明確にすることで、正確な自己評価の目標を間接的に達成していると解釈できる。つまり、自らの遂行の評価は不確定にして自己高揚の目標を達成する余地を残しておく一方で、他者評価を確定することで正確な自己評価の目標を間接的に達成するのである。この際、他者への適切な対応を“結果的に”高めるような他者評価が、“結果的に”正確な自己評価へ寄与していることになる。

最後に研究 2 の問題点を考察する。本研究は、特定の比較状況における自己の遂行と自己評価、および自己の遂行と他者評価の関連を検討した。あくまで個人間の関係についての分析であり、個人の内的過程を推測する場合には注意が必要である。特に、第三者を含む比較他者がどのような認知プロセスを経て自己評価や他者評価に影響したのかについては明らかではない。しかし、本研究の結果から、比較状況における第三者が社会的比較に関与していたこと、および自己と第三者の関係によってその傾向は変わりうることは示唆できる。

外集団第三者＋比較他者群と比較他者のみ群では、自己評価のみならず、他者評価でも有意な関連は確認されなかった。これらの状況で、比較が生起していたのかどうかは不明である。また、言語能力テストの評価基準である単語の作成数とユニークさの関係を実験参加者がどのように解釈していたのかも不明である。単語のユニークさに対して、作成数は明確な指標であるとの想定であったが、この性質の違いゆえに評価の手がかりとしての重要度が変わっていた可能性がある。検討課題として、第三者が評価する指標を操作すると共に、それぞれの指標の重要度を測定する必要がある。それにより、本研究で観察された関係が変わるのであれば、比較状況における第三者の機能がより明確になるであろう。

さらに、本研究の比較他者は、単語の作成数の観点からは上位他者に限定されていた。もし、すでに述べた自己高揚の解釈が妥当であるならば、実験参加者よりも少ない単語しか作成していない下位他者では自己評価との関係も確認されるはずである。したがって、下位他者群も設定して検討することで、本研究の推論を実証的に検討することが可能である。

第4節：第三者の集団成員性と社会的比較による評価の関係（2）（研究3）¹⁸

研究3の目的は研究2の知見を再検討することにある。

研究2において、自己の遂行量と自己評価の関連は、比較他者が存在する群では確認されなかった。その理由として、指標の数の違いによる説明と、自己高揚による説明がなされた。本研究では、実験で用いる課題の評価指標を限定し、かつ下位他者群を設定することで自己高揚による説明の妥当性を検証した。

研究2で用いた課題は、“作成した単語の数”と“作成した単語のユニークさ”の二つの指標で言語能力が判定されるものであった。前者の指標は遂行の量的指標（遂行量）であり、後者は質的指標（遂行の質）であった。この二つの指標が存在することで、自己の遂行量のみを用いた絶対的な評価の影響を排除する狙いであった。しかし、この設定は、実験参加者がどちらの指標を重視して自己評価や他者評価を行っているのかを不明確にした。そこで、研究3では、課題の評価指標を“作成した単語の数”，すなわち遂行量に限定した。この設定により、自己の遂行量と自己評価の関連はより強まる。したがって、すべての比較状況において、自己の遂行量と自己評価の関連が確認されると予想する。

さらに、本研究では、実験参加者より遂行量の劣る下位他者を提示する群を設定した。研究2で提示した比較他者は、遂行量の点で優れた上位他者であった。研究2の自己高揚による説明では、遂行量で勝っている他者は自己にとって脅威であるため、自己の遂行と自己評価の関連を避けたと解釈した。しかし、変数間の関連性が無かったという事実から、そのような推論を直接導き出すことはできない。そこで、本研究では下位他者群を設定し、この群における自己の遂行量と社会的比較による評価の関連に注目した。

もし、上位他者との比較が自己にとって脅威であり、そのような比較を回避するように動機づけられているのであれば、自己の遂行と他者評価、または自己の遂行と自己評価の関連のどちらかを無視することが考えられる。前者は比較それ自体を回避することにつながるが、適切な対人戦略を採用するという観点からは望ましくない。それに対し、後者は比較による脅威を最小限に抑えつつ適切な対人戦略を可能にする方法である。研究2の内集団第三者+比較他者群では、後者の方法により、間接的に自己評価の目標を達成する社会的比較の形式であると解釈した。自己高揚の余地を残す程度に自己評価に曖昧さを保持したまま、他者評価を明確な指標で確定させることで結果的に直接の社会的比較と同程度、または正確さという点で許容できる範囲内で目標が達成されるの

¹⁸ 本研究の結果は日本社会心理学会で発表された。

大久保暢俊 (2005). 対人文脈による他者評価と社会的比較による自己評価の関係 日本社会心理学会 46 回発表論文集, 288-289.

であれば、対人戦略の適切さという観点から、そのような比較は“間接的な社会的比較”といえるであろう。

このような間接的な社会的比較を可能にしたのは、評価指標が複数あり、その一方の評価指標が優劣の点で曖昧であったことに起因している。つまり、明確な指標を用いて比較他者を評価し、かつ曖昧な指標を用いて自己を評価していたのである。しかし、本研究では、自己の遂行量と自己評価の関連はより強固になるように設定した。つまり、間接的な社会的比較を行うことが困難な状況であった。この場合、自己の遂行と他者評価の関連を無視することで脅威を回避する方法のみが残されている。したがって、本研究では、上位他者群では自己の遂行と自己評価の関連のみが観察されるであろう。それに対し、下位他者群では自己の遂行と自己評価の正の関連だけでなく、自己の遂行と他者評価の負の関連も観察されるであろう。これは、“典型的”な社会的比較による評価の顕在化である。

しかし、上記の結果のみから、上位他者群で自己に対する脅威ゆえに比較を回避したと推論するのは困難である。なぜなら、比較が脅威であるゆえに回避したのか、または比較それ自体が始めから行われていないのかを弁別できないからである。特に後者の可能性は、課題の指標が明確な本研究では重要である。なぜなら、もし、自己の遂行だけで自己評価が完結していれば、上位他者の脅威を感じていない可能性も出てくるからである。この場合、自己高揚による説明の妥当性が疑われることになる。そのため、本研究では、自己評価や比較他者評価に加えて、比較他者との比較を直接尋ねる相対自己評価項目、および自己の集団内での位置を推測する項目も用いることで、社会的比較による評価の生起を異なる観点から検討した。相対自己評価項目は、比較他者を基点として、“Aさん（比較他者）と比べてあなたは～”といった文章で始まる項目であった。一つの項目で自己と比較他者を強制的に比較させることから、アーティファクトな現象として社会的比較による評価を生じさせる項目ではある。しかし、直接に比較を尋ねる項目と自己の遂行との関連は、比較それ自体が行われたことの証左となるのも事実である。また、位置の推測は、集団内での相対的位置を直接尋ねる項目であり、比較の効果の一般性を示す測度である。したがって、自己の遂行量と他者評価との関連が観察されない場合でも、これらの項目との関連が観察された場合は、実験で提示した他者が比較他者として認識されていると推論した。

実験計画は、第三者の集団成員性（内集団・外集団）×比較他者（上位・下位）の実験参加者間要因であった。上記の議論に加え、本稿の仮説1、仮説2より本研究の作業仮説を表3.3の関連群として設定した。

表 3.3 予想される自己の遂行量と諸指標との関係（作業仮説）

第三者の 集団成員性	提示する 比較他者	自己評価	比較 他者評価	相対 自己評価	位置推測
内集団	上位	正	なし	正	正
	下位	正	負	正	正
外集団	上位	正	なし	なし	なし
	下位	正	なし	なし	なし

注) “正”= 正の関係, “負”= 負の関係, “なし”= 関係なし。

方 法

実験参加者

都内専門学校 of 学生 120 名が実験に参加した（男性 92 名, 女性 26 名, 不明 2 名）。

手続き

実験は講義時間内に実施した。実験は三つのクラスで行われ, それぞれの参加者数は, 42 名, 37 名, 41 名であった。それぞれのクラスで各群がランダムになるようにした。手続きは研究 2 とほぼ同じであった。前半で言語能力テストを行い, 後半で言語テストについての調査を行うと教示した。

研究 2 とは異なり, 単語のユニークさについての記述は一切なかった。単語の作成数を基に言語能力が判定されると実験参加者に教示した。その他のルールや手続きは研究 2 と同じであった。

比較他者, および第三者の操作 言語テスト終了後, “言語テストのイメージをより鮮明にしてもらうため”との名目で, 同じテストを受けた去年の学生の回答を提示した。その学生の回答は, 実験者参加者と同じ専門学校の匿名学生 (A さん: 比較他者) であった。上位他者群の用紙には, A さんの回答欄に 15 個の単語が記入されていた。下位他者群の用紙には, 4 個の単語が記入されていた。

その後, 回答欄の下に“A さんの回答を見たほかの 3 名の学生”の感想コメントが記載されていた。内集団成員群の用紙には, 3 名の学生が自分と同じ専門学校の学生であると記載されていた。外集団成員群の用紙には, 自分とは違う専門学校の学生の感想であると記載されていた。感想コメントは, 比較他者の回答欄にある単語の作成数を肯定的に評価するものであった。

質問項目

後半の調査と称し、従属変数を含んだ質問紙に回答してもらった。質問紙には、言語テストにかかわる自己評価、比較他者評価、相対自己評価、位置推測の項目が含まれていた。自己評価、および比較他者評価の項目は研究 2 と同じであった。ただし、他者評価項目にあった、“A さんは、この結果にどのくらい満足していると思うか”については、研究 2 の参加者数名から回答するのが困難である事をディブリーフィング時に指摘されたため、本研究では削除した。したがって、本研究の比較他者評価項目は 4 項目であった。

相対自己評価の項目として“A さんに比べてどのくらいテストができたと思うか”を、スケールの端が“A さんよりまったくできなかった”と“A さんより非常にできた”とラベルづけされ、中央に“A さんと同じ”とラベルづけされた 7 件法で回答してもらった。この項目は、数値が高いほど A さん（比較他者）に比べて自己を肯定的に評価していることを示していた。さらに、テストの出来具合について、平均的な専門学校生を 50、最低を 0、最高 100 として、自分の位置を 0 から 100 の数字で回答してもらった。また、研究 2 と同様に言語能力の重要度、テストの信頼性に回答してもらった。この 2 つの項目は 7 件法であった。

全ての回答が終わると、実験参加者にディブリーフィングを行い、実験は終了した。

結 果

実験参加者が本番の 2 分間で作成した単語の平均個数は 7.97 個であった ($SD=2.38$)。最小個数は 2 個であり、最大個数は 14 個であった。したがって、上位他者群の比較他者である A さんの作成した 15 個より多くの単語を作成した実験参加者は存在しなかったが、下位他者群の比較他者である A さんの作成した 4 個よりも少ない単語しか作成しなかった実験参加者は存在した。そこで、作成した単語の数が 4 個以下の実験参加者 5 名のデータを分析から除外した。

自己評価 5 項目を一つの指標とし、自己評価得点として合計値を算出した ($\alpha=.82$, 可能範囲は 5 から 35 まで)。比較他者評価 4 項目について、比較他者評価得点として合計値を算出した ($\alpha=.89$, 可能範囲は 4 から 28 まで)。

相対自己評価は 1 項目を相対自己評価得点とした (可能範囲は 1 から 7 まで)。位置推測については、実験参加者が記入した数値を用いた (可能範囲は 0 から 100 まで)。言語能力の重要度、およびテストの信頼性は、それぞれ 1 項目を分析に用いた (可能範囲は 1 から 7 まで)。

各指標の記述統計

表 3.4 に各指標の平均値と標準偏差を示す。

表 3.4 各指標の平均値 (標準偏差)

指標	内集団第三者				外集団第三者			
	上位他者		下位他者		上位他者		下位他者	
作成した単語数	8.34	(2.32)	8.00	(2.17)	8.62	(2.56)	7.80	(1.77)
言語能力の重要度	6.17	(1.31)	6.03	(1.16)	6.31	(1.19)	6.70	(0.54)
テストの信頼性	4.03	(1.50)	4.00	(1.41)	3.92	(0.94)	4.07	(1.26)
自己評価	18.62	(6.90)	18.63	(5.40)	18.00	(3.64)	19.43	(6.16)
比較他者評価	22.45	(5.04)	16.97	(4.79)	21.96	(3.28)	15.30	(4.26)
相対自己評価	2.21	(1.01)	4.63	(1.63)	2.38	(0.98)	4.77	(1.01)
位置推測	41.66	(21.69)	52.07	(14.14)	45.46	(13.46)	45.70	(20.85)

注) 数値が高いほど重要で、信頼でき、評価が高いことを示す。

位置推測は、数値が高いほど自己を上位に位置づけている。

実験参加者の作成単語数

比較状況による作成した単語数の違いを検討するために、第三者の集団成員性×比較他者の分散分析を行った。その結果、主効果、交互作用効果いずれも有意でなかった ($F_s < 1.98, ns$)。

言語能力の重要度、テストの信頼性

言語能力の重要度、およびテストの信頼性に対する群間の違いを検討するため、それぞれの項目について第三者の集団成員性×比較他者の分散分析を行った。その結果、言語能力の重要度 ($F_s < 3.91, ns$)、テストの信頼 ($F_s < 0.14, ns$) 共にすべての主効果、および交互作用効果は有意でなかった。

自己評価

自己評価得点について、実験参加者の単語の作成数を共変量とする第三者の集団成員性×比較他者の共分散分析を行った。その結果、単語の作成数の主効果のみが有意であり ($F(1, 107) = 16.10, p < .01$)、その他の主効果、および交互作用効果は有意でなかった ($F_s < 1.70, ns$)。そこで、作成した単語数を説明変数、自己評価得点を目的変数とする回帰分析を行った。その結果、作成した単語数から自己評価得点に正の影響が確認された ($R^2_{adj} = .12, F(1, 113) = 16.55, p < .01, \beta = .36, t = 4.07, p < .01$)。

比較他者評価

比較他者評価得点について、実験参加者の単語の作成数を共変量とする第三

者の集団成員性×比較他者の共分散分析を行った。その結果、第三者の集団成員性×比較他者×共変量の交互作用効果が有意であった ($F(1, 107) = 5.46, p < .05$)。そこで、作成した単語数を説明変数、比較他者評価得点を目的変数とする回帰分析を、第三者の集団成員性、および比較他者の各群で行った。その結果、第三者が内集団成員で、かつ下位他者を提示した群で、作成した単語数から比較他者評価得点に負の影響が確認された ($R^2_{adj} = .11, F(1, 28) = 4.42, p < .05, \beta = -.37, t = -2.10, p < .05$)。その他の群では有意でなかった ($R^2_{adj} = -.02 \sim .01, F_s < 1.16, ns$)。

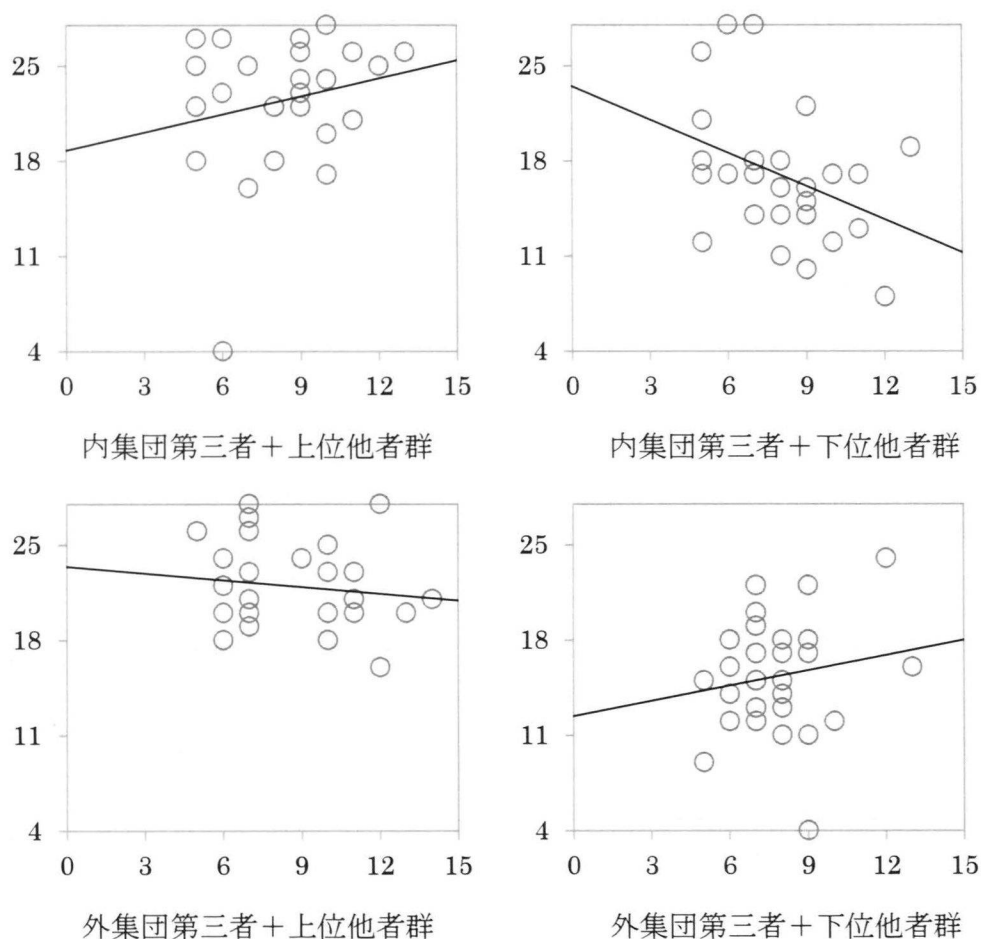


図 3.4 自己の遂行量と比較他者評価の関係
横軸は自己の遂行量 (個数), 縦軸は他者評価得点 (4~28)

相対自己評価

相対自己評価得点について、実験参加者の単語の作成数を共変量とする第三者の集団成員性×比較他者の共分散分析を行った。その結果、第三者の集団成員

性×比較他者×共変量の交互作用効果が有意であった ($F(1,107) = 6.57, p = .05$)。そこで、作成した単語数を説明変数、相対自己評価得点を目的変数とする回帰分析を、第三者の集団成員性、および比較他者の各群で行った。その結果、有意傾向ではあるが、第三者が内集団成員の群で、かつ上位他者を提示した群で作成した単語数から相対自己評価得点に正の影響が確認された ($R^2_{adj} = .08, F(1, 27) = 3.37, p = .08, \beta = .33, t = 1.84, p = .08$)。同様に、第三者が内集団成員の群で、かつ下位他者を提示した群で正の影響が確認された ($R^2_{adj} = .28, F(1, 28) = 12.00, p < .01, \beta = .55, t = 3.46, p < .01$)。さらに、第三者が外集団成員の群で、かつ上位他者を提示した群で正の影響が確認された ($R^2_{adj} = .30, F(1, 24) = 11.51, p < .01, \beta = .57, t = 3.39, p < .01$)。第三者が外集団成員の群で、かつ下位他者を提示した群では有意でなかった ($R^2_{adj} = -.04, F = 0.00, ns$)。

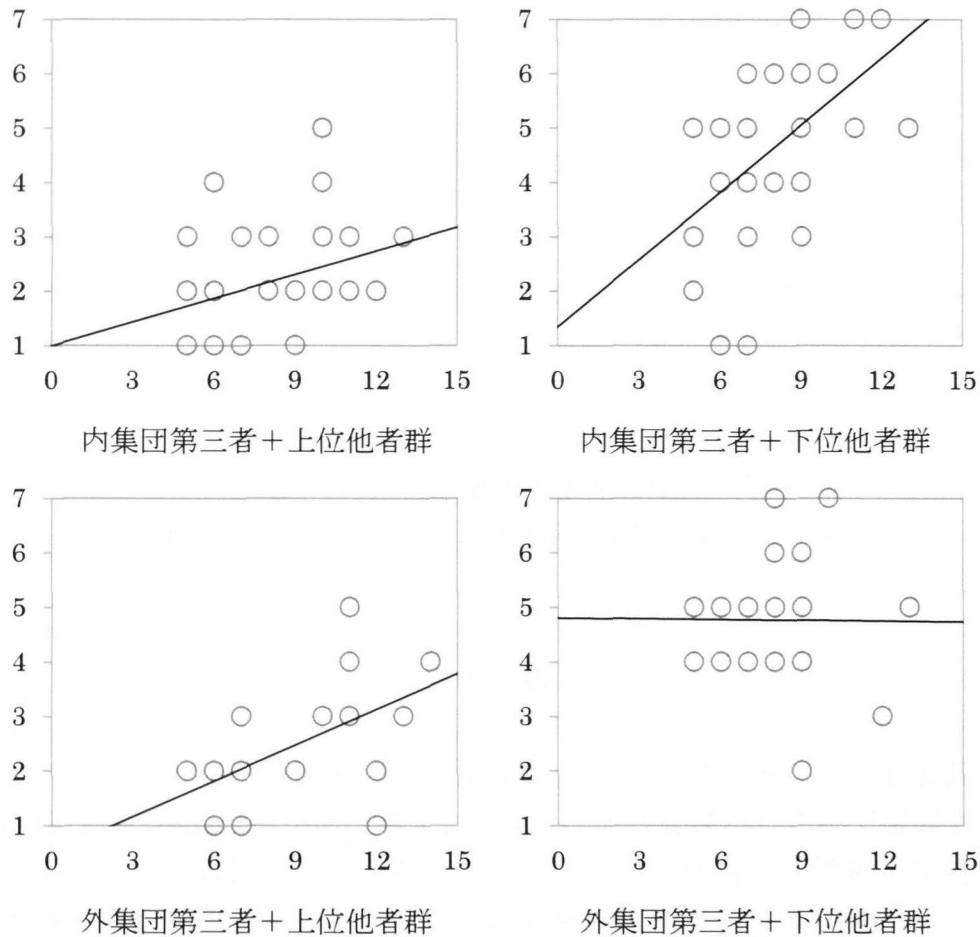


図 3.5 自己の遂行量と相対自己評価得点の関係
横軸は自己の遂行量 (個数), 縦軸は相対自己評価得点 (1~7)

位置推測

位置推測得点について、実験参加者の単語の作成数を共変量とする第三者の集団成員性×比較他者の共分散分析を行った。その結果、第三者の集団成員性×共変量の交互作用効果が有意であった ($F(1, 107) = 5.30, p < .05$)。そこで、作成した単語数を説明変数、位置推測得点を目的変数とする回帰分析を、第三者の集団成員性の各群で行った。その結果、第三者が内集団成員の群で作成した単語数から位置推測得点に正の影響が確認された ($R^2_{adj} = .27, F(1, 57) = 22.80, p < .01, \beta = .54, t = 4.78, p < .01$)。それに対し、第三者が外集団成員の群では有意でなかった ($R^2_{adj} = .01, F = 1.59, ns$)。

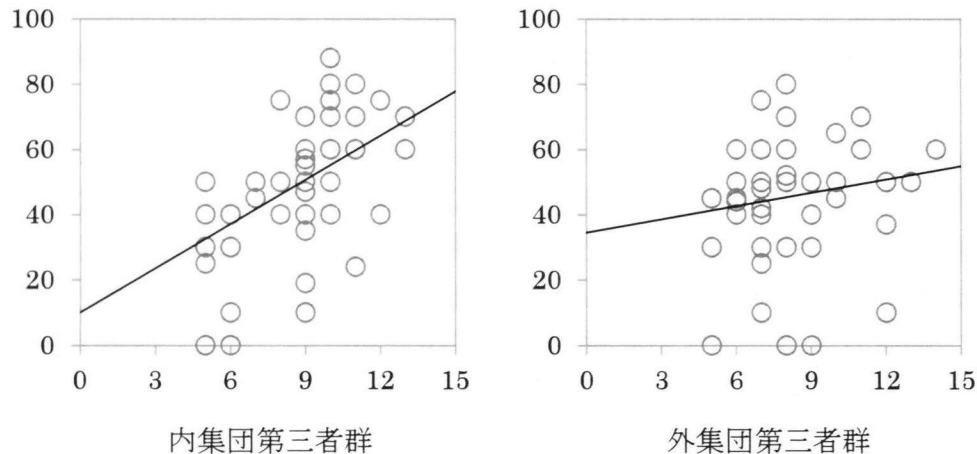


図 3.6 自己の遂行量と位置推測得点の関係
横軸は自己の遂行量（個数），縦軸は位置推測得点（0～100）

考 察

自己の遂行量と自己評価との正の関係、および自己の遂行量と他者評価との負の関係は、内集団成員が第三者で、かつ下位他者を提示した群で観察された。この結果は、本稿の仮説 2 を支持する結果であると同時に、研究 2 で考察した自己高揚による説明が妥当であることを示唆する。つまり、上位他者が存在し、かつ第三者がかかわるような比較状況では、正確な自己評価の目標だけでなく、自己高揚の目標も同時に追求され、それらの目標が混合した社会的比較による評価パターンが現出したのである。

また、自他の直接の比較を尋ねる項目と自己の遂行量との関係は、第三者が

内集団成員である場合の上位他者、および下位他者を提示した群（ただし、上位他者を提示した場合には有意傾向）、および第三者が外集団成員の上位他者群で観察された。第三者が外集団成員の群で観察されたことは、この群における上位他者との比較が行われた可能性を示唆する。これは、本研究の予測とは異なる結果であった。この結果が観察されたことの一つの説明として、上位他者の脅威の程度が大きかった可能性が考えられる。すでに述べたように、本研究で用いた相対自己評価の項目は、実験参加者に対し比較を強制するものであった。その結果、第三者が外集団成員である状況でも上位他者の脅威が高まったのかもしれない。

さらに、位置推測の項目では、第三者が内集団成員の群でのみ自己の遂行との関連が確認された。この結果は、心理的に近い他者であるほど社会的比較による評価が顕在化することを述べた仮説 2 を支持する結果であると同時に、第三者が内集団成員で上位他者を提示した群においても比較が行われていたことを示唆する結果である。

本研究では、どの群にも比較他者を配置することで、手がかりとなる指標の数を各群で同じにした。この設定により、研究 2 で考察された指標の数の説明とは独立に、自己高揚による説明が妥当である可能性が示された¹⁹。本研究の結果は、第三者が比較他者に注目する比較状況において、自己の遂行と自己評価や比較他者評価、さらには一般性の高い位置推測などをそれぞれ別個に関連させることで、正確な自己評価の目標と自己高揚の目標を同時に追求していることを示唆する。

最後に研究 3 の問題点を考察する。研究 2 と同じく、各群の個人差変数とそれぞれの評価の関連を分析したため、あくまで、“自己の遂行が高い人ほど、比較他者評価が低い”といった個人間変動を考慮に入れた結果となる。しかし、共分散分析の交互作用を事前に検討したため、本研究での各群の関連の違いの一部は条件間の違いに帰属させることは可能である。また、本研究では下位他者の遂行についても上位他者と同様に第三者が賞賛していた。実験参加者よりも少ない単語しか作成していない下位他者を賞賛することは、賞賛している第三者たちの遂行水準が低いことを推論させたのかもしれない。つまり、下位他者が合計四名存在することになり、そのインパクトが社会的比較に影響したのかもしれない²⁰。さらに、本研究では、正確な自己評価と自己高揚の目標の双方が同時に生起している様相を検討するために、量的な側面に評価指標を限定した。しかし、指標が複数ある状況では、それぞれの評価指標の性質により、自己の

¹⁹ ただし、指標の数による説明は完全に否定されたわけではない。本研究では、あくまで指標の数による説明とは独立に自己高揚による説明が妥当であったことを示すのみである。

²⁰ この可能性を排除するには、比較他者と第三者の個別認識についての議論が必要となる。

遂行との関連は変わるであろう。この点については、次の研究 4 で詳細に検討する。

第 5 節：第三者の注目する基準と社会的比較による評価の関係（研究 4）

本研究の目的は、第三者が注目する指標を実験的に操作することで、社会的比較による評価がどのように変わるのかを検討することにある。

研究 2 では、単語の作成数とユニークさの二つの評価指標に対し、複数の第三者が比較他者のそれぞれの指標を肯定的に評価している状況を提示した。二つの指標を用いた理由は、単語の作成数による絶対評価の影響を小さくするためであった。しかし、同時に、指標間の関係や、自己にかかわる目標の影響で、結果の解釈が多義的にならざるを得なかった。続く研究 3 では、単語の作成数のみを評価指標とし、複数の第三者が比較他者の単語の作成数を肯定的に評価している状況を提示した。その結果、自己にとって脅威とならない下位他者を提示した状況では、典型的な社会的比較による評価が観察された。対照的に、自己にとって脅威となる上位他者を提示した状況では、自己への脅威を避けるために間接的な社会的比較を行う可能性が示された。

研究 4 では、二つの指標が存在することを実験参加者に明示し、その一方の指標にのみ第三者が注目している状況を提示することで、比較他者に注目する第三者の機能を探索的に明らかにする。具体的には、比較他者の単語の作成数、または比較他者の単語のユニークさのいずれかを第三者が肯定的に評価している状況を提示した。さらに、研究 2、研究 3 の知見をふまえ、第三者を内集団成員に限定することで、社会的比較による評価を明確に検出できるようにした。

第三者による相対評価を予期することが自己にとって重要であるならば、第三者による比較他者への注目は、単純に比較他者の存在の顕現性を高めるだけでなく、比較による評価指標の顕現性も高めるであろう。理論的には、第三者の注目が評価基準を提供していることになる。

比較他者の遂行の量的側面に第三者が注目する場合、自他の遂行量の違いがそのまま相対評価につながるものが自己に予期されるであろう。したがって、自己の遂行量と自己評価、および自己の遂行量と他者評価に関連があると考えるのが基本である。しかし、第三者が内集団成員で、かつ上位他者を提示した研究 3 の結果をふまえると、相対的位置の差が明確な上位他者との比較は自己にとって脅威である。そこで、第三者が上位他者の遂行量に注目している場合には、自己の遂行量と自己評価の関連は観察されるが、比較他者評価との関連は観察されないであろう。ただし、研究 3 で述べたように、このような関連の

パターンはあくまで比較を避けた結果である。したがって、比較を強制する相対評価では自己の遂行との関連が観察されると予測する。

それに対し、比較他者の遂行の質的側面に第三者が注目している場合には、より複雑な様相を呈する。質的指標はそれ自体では優劣をつけることができず、したがって評価の根拠とは必ずしもならない。それゆえ、自己が比較他者を評価する際には、自己にとって明確な指標である量的指標を用いるしかない。しかし、第三者は量的指標に注目せず、質的指標で比較他者を肯定的に評価している。つまり、第三者による肯定的評価の根拠は自己にとって不明な状況である。しかし、結果として表明された評価の肯定、否定の方向性は明確に提示されている。したがって、量的な指標で比較他者が上位であるならば、双方の指標で劣位とみなされる可能性の高い状況である。言い換えると、量的な指標だけでなく、質的な指標でも相対的に劣位とされる状況である。

ここから、第三者が質的指標に注目した場合には、以下の二つの現象が生じると予測する。一つは、自己の遂行量と自己評価の関連である。ただし、第三者が質的指標に注目していることから、この関連は、第三者が量的指標に注目している場合よりも弱い関連であろう。もう一つは、自己の遂行量と比較他者評価に負の関連が確認されることである。第三者が質的指標に注目している以上、自己の遂行量と比較他者評価に関連がないことも考えられる。しかし、質的指標による劣位の可能性が高まった状況において、自己の遂行と比較他者評価を関連づけておくことは、比較他者との相互作用上、最善とは言えないまでも次善の対処となる。なぜなら、第三者による相対評価が自己の社会的リアリティの基盤を提供している以上、比較他者への対応を検討しなければならないからである。したがって、予測が可能な量的指標を用いて他者評価との関連を明確にしておくことで、戦略上の無策を避けるのである。以上の推論から、自己の遂行と比較他者評価に負の関連があると予測する。

本研究は、この予測を第三者の注目を操作することで検討した。実験で用いた課題と測定は基本的に研究2、研究3と同じであった。また、本稿での仮説2をふまえて、第三者は内集団成員に限定した。さらに比較他者は単語の数において上位他者に限定した。実験計画は、第三者の注目（単語の数・単語のユニークさ）の実験参加者間計画であった。単語の数は量にかかわる指標であり、単語のユニークさは質にかかわる指標であった。さらに、研究3で用いた相対自己評価項目と類似した相対比較他者評価項目を新たに追加した。具体的には、“あなたと比べて A さんはどのくらいテストができたと思うか”を、スケールの端が“自分よりまったくできなかつた”と“自分より非常にできた”とラベルづけされ、中央に“自分と同じ”とラベルづけされた7件法で回答してもらった。この項目は他者評価のひとつで、比較の状態を直接測定することを目的に採用した。

方 法

実験参加者

都内専門学校¹の学生 87 名が参加した（男性 50 名，女性 35 名，不明 2 名）。実験参加者の平均年齢は 27.01 歳（ $SD=4.69$ ）であった（範囲は 18 歳から 43 歳まで）。

手続き

実験は講義時間内に実施した。言語テストの手続きは，研究 2 と同じであった。

第三者の注目の操作 言語テスト終了後，“同じテストを受けた学生の回答”として，実験参加者と同じ専門学校の匿名学生（A さん：比較他者）の回答を提示した。比較他者の回答欄には 15 個の単語が作成されていた。

さらに，回答欄の下に“A さんの回答を見たほかの三名の学生”の感想コメントが記載されていた。単語の数群のコメントは，比較他者の単語の数を肯定的に評価するものであった。単語のユニークさ群では，比較他者の単語の独自性を肯定的に評価するコメントであった。言語テストと第三者の注目の操作の後，従属変数に回答してもらった。

質問項目

自己評価項目，比較他者評価項目は研究 3 と同様であった。相対評価項目は，比較他者を基準とした自己評価（相対自己評価）と，自己を基準とした比較他者評価（相対比較他者評価）について尋ねた。相対自己評価項目は，“A さんに比べて，あなたはどのくらいテストができたか”の 1 項目であった。この項目は，研究 3 と同様に，数値が高いほど A さん（比較他者）に比べて自己を肯定的に評価していることを示していた。相対比較他者評価項目は，“あなたに比べて，A さんはどのくらいテストができたか”，の 1 項目であった。この項目は，相対自己評価項目とは逆に，数値が高いほど比較他者を肯定的に評価していることを示していた。さらに，単語の数の重要度，単語のユニークさの重要度，言語能力の重要度，テストの信頼性について回答してもらった。これらの項目はすべて 7 件法であった。

全ての回答が終了し，質問紙を回収したのちにディブリーフィングを行い，実験は終了した。

結 果

自己評価 5 項目を一つの指標とし、自己評価得点として合計値を算出した ($\alpha=.82$, 可能範囲は 5 から 35 まで)。比較他者評価 4 項目について、比較他者評価得点として合計値を算出した ($\alpha=.84$, 可能範囲は 4 から 28 まで)。相対評価はそれぞれ 1 項目を相対自己評価得点, 相対比較他者評価得点とした (可能範囲は 1 から 7 まで)。

実験参加者の作成単語数

実験参加者の作成した単語の数は 1 個から 14 個であり、平均個数は 7.52 個であった ($SD=2.65$)。つまり、すべての実験参加者にとって、比較他者は量的指標で上位他者であった。群によって作成した単語の数の違いを検討するため t 検定を行った。その結果、単語の数群 ($M=7.53$) と単語のユニークさ群 ($M=7.50$) に差はなかった ($t(85) = 0.06, p > .10$)。

テストの信頼性

テストの信頼性に対する群間による違いを検討するために t 検定を行った。その結果、単語の数群 ($M=3.82$) と単語のユニークさ群 ($M=3.67$) に差はなかった ($t(85) = 0.52, p > .10$)。

単語の数, 単語のユニークさ, 言語能力の重要度

それぞれの評価基準の重要度, および言語能力の重要度に対する群間による違いを検討するために t 検定を行った。その結果、単語の数の重要度では、単語の数群 ($M=5.13$) と単語のユニークさ群 ($M=4.90$) に差はなかった ($t(85) = 0.58, p > .10$)。単語のユニークさの重要度では、単語の数群 ($M=5.71$) の方が単語のユニークさ群 ($M=4.93$) よりも重要だと評定した ($t(85) = 2.20, p < .05$)。また、言語能力の重要度では、有意傾向ではあるが単語の数群 ($M=6.47$) の方が単語のユニークさ群 ($M=6.07$) よりも重要だと評定した ($t(85) = 1.83, p = .07$)。

自己評価, 比較他者評価, 相対評価の記述統計

表 3.5 に各指標の平均値と標準偏差を示す。

表 3.5 各指標の平均値 (標準偏差)

指標	単語の数	単語のユニークさ
自己評価	18.09 (5.79)	15.86 (4.63)
比較他者評価	23.67 (3.05)	22.67 (4.05)
相対自己評価	1.98 (1.18)	1.98 (1.28)
相対比較他者評価	6.07 (1.21)	6.14 (1.12)

注) 数値が高いほど評価が高いことを示す。

自己評価

自己評価得点について、実験参加者の単語の作成数を共変量とする共分散分析を行った。その結果、第三者の注目×共変量の交互作用効果が有意であった ($F(1, 83) = 6.43, p < .05$)。そこで、作成した単語数を説明変数、比較他者評価得点を目的変数とする回帰分析を各群で行った。その結果、単語の数群において、作成した単語数から自己評価得点に正の影響が確認された ($R^2_{adj} = .54, F(1, 43) = 51.77, p < .01, \beta = .74, t = 7.20, p < .01$)。同様に、単語のユニークさ群でも正の影響が確認された ($R^2_{adj} = .18, F(1, 40) = 9.83, p < .01, \beta = .44, t = 3.14, p < .01$)。

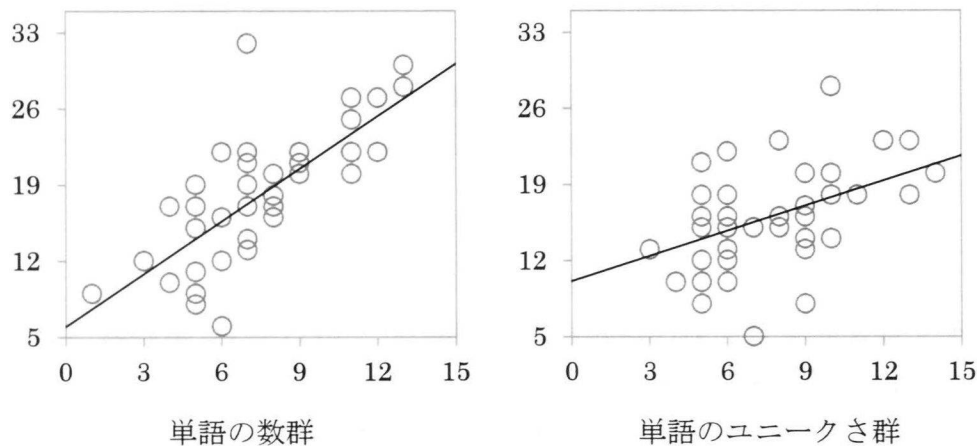


図 3.7 自己の遂行量と自己評価得点の関係

横軸は自己の遂行量（個数），縦軸は自己評価得点（5～35）

比較他者評価

比較他者評価得点について、実験参加者の単語の作成数を共変量とする共分散分析を行った。その結果、第三者の注目×共変量の交互作用効果が有意傾向であった ($F(1, 83) = 3.53, p = .06$)。有意傾向ではあるが、自己評価得点と同様に、作成した単語数を説明変数、比較他者評価得点を目的変数とする回帰分析を各群で行った。その結果、単語のユニークさ群において、作成した単語数から比較他者評価得点に負の影響が確認された ($R^2_{adj} = .11, F(1, 40) = 5.81, p < .05, \beta = -.36, t = -2.41, p < .05$)。単語の数群では有意でなかった ($R^2_{adj} = -.02, F = 0.00, ns$)。

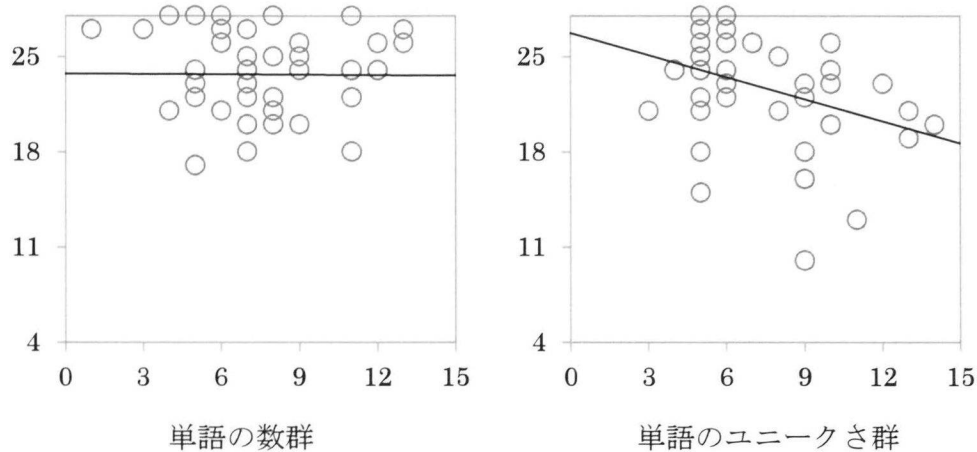


図 3.8 自己の遂行量と比較他者評価得点の関係
 横軸は自己の遂行量（個数），縦軸は比較他者評価得点（4～28）

相対評価

相対自己評価得点について，実験参加者の単語の作成数を共変量とする共分散分析を行った。その結果，共変量の主効果のみが有意であった ($F(1, 83) = 19.74, p < .01$)。そこで，作成した単語数を説明変数，相対自己評価得点を目的変数とする回帰分析を行った。その結果，作成した単語数から相対自己評価得点に正の影響が確認された ($R^2_{\text{adj}} = .18, F(1, 85) = 20.30, p < .01, \beta = .44, t = 4.51, p < .01$)。

相対比較他者評価得点について，実験参加者の単語の作成数を共変量とする共分散分析を行った。その結果，第三者の注目×共変量の交互作用効果が有意傾向であった ($F(1, 83) = 2.84, p = .10$)。有意傾向ではあるが，自己評価得点，比較他者得点と同様に，作成した単語数を説明変数，相対比較他者評価得点を目的変数とする回帰分析を各群で行った。その結果，単語のユニークさ群において，作成した単語数から比較他者評価得点に負の影響が確認された ($R^2_{\text{adj}} = .36, F(1, 40) = 24.11, p < .01, \beta = -.61, t = -4.91, p < .01$)。単語の数群においては，有意傾向ではあるが負の影響が確認された ($R^2_{\text{adj}} = .04, F(1, 43) = 2.71, p = .10, \beta = -.24, t = -1.65, p = .10$)。

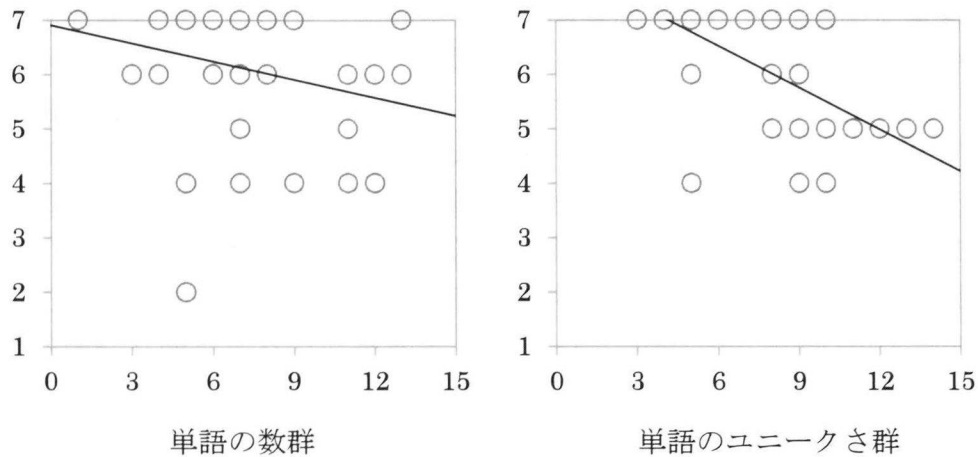


図 3.9 自己の遂行量と相対比較他者評価得点の関係
 横軸は自己の遂行量（個数），縦軸は相対比較他者評価得点（1～7）

考 察

第三者が量的指標に注目した場合，自己の遂行量と自己評価に正の関連が確認され，自己の遂行量と比較他者評価との関連は確認されなかった。一方，第三者が質的指標に注目した場合，自己の遂行量と自己評価に正の関連が確認され，自己の遂行量と比較他者評価に負の関連が確認された。また，比較他者を基点とした相対自己評価は，それぞれの群で自己の遂行量と関連していた。それに対し，自己を基点とした相対比較他者評価は，第三者が質的指標に注目した群で負の関連が示された。ただし，量的指標に注目した群でも有意傾向であるが負の関連が示された。また，質的指標の重要度，および言語能力の重要度では，第三者が量的指標に注目した群の方が，質的指標に注目した群に比べてそれぞれの重要度を高く認知していた。

質的指標の重要度，および言語能力の重要度に群間による違いが確認されたことについて，次の三つの可能性が考えられる。ひとつは，優劣が明確でなく，かつ反駁するのが困難な質的指標で劣位となることが，第三者が質的指標に注目した群の実験参加者にとって脅威となり，質的指標の重要度を下げることによって脅威に対処したという説明である。この結果，自己の遂行量と比較他者評価の関連の主観的妥当性は増すことになる。もうひとつは，第三者が量的指標に注目した群で，上位他者による自尊感情への脅威を回避するために，曖昧な指標である質的指標の重要度を上げたという説明である。最後に，第三者が質的指

標に注目した群の実験参加者が本当に質的指標を重要だと思わなかった、または第三者が量的指標に注目した群の実験参加者が本当に質的指標を重要だと思ったという可能性である。これらの説明の内、どの説明が妥当であるかは、適切な統制群が存在しないため結論づけることはできない。

第三者が質的指標に注目した群において、自己の遂行量と比較他者評価との関連が顕著に観察されたことは、本研究の推論を裏づける結果である。この結果から、第三者の比較他者に対する注目の効果は、その注目する内容によって異なることが示唆される。つまり、第三者の機能は比較の顕現化だけではなく、比較の内容にも関与するのである。

量的指標とは異なり、本来、質的指標は相互依存関係にない。つまり、一方が高い評価を得たからといって、他方が低いことにはならない。本研究で示された質的指標で複雑な様相を呈した原因として、実験で用いた質的指標がテスト課題に依存していたことが挙げられる。本研究で設定した状況は、テスト課題という序列を判定するものであった。つまり、課題状況が優劣を担保していたのである。それゆえ、質的指標で一方が優れていれば、もう一方は劣っていると推論しやすい状況にあったのかもしれない。これは、第三者の注目の機能と課題状況が交絡していることを示唆する。

そこで、次の研究 5 では、課題状況をこれまでの一連の手法から大幅に変更し、第三者の比較他者への評価内容が、自己評価と比較他者評価の関連の方向に関与することを実証する。具体的には、第三者の比較他者への評価内容に反映される到達可能性の要因を操作することで、自己と比較他者の評価トレードオフの関係が変わりうることを示す。

第 6 節：第三者の評価内容と社会的比較による評価の関係（研究 5）²¹

本研究の目的は、比較他者に対する第三者の評価内容と社会的比較による評価の関係を検討することにある。

研究 2 から研究 4 では、テスト課題を行う状況において、量的、または質的な指標に第三者が注目していた。これらの指標は、いずれもテスト課題に依存した指標であるため、自己と比較他者との評価トレードオフが起きやすいことを研究 4 で指摘した。つまり、これまでの研究では、競争状況に限定した第三者の効果を検討していたのである。それに対し、本研究では、競争的でない状

²¹ 本研究の結果は日本社会心理学会で発表された。
大久保暢俊 (2006). 比較他者に関する第三者評価と自己評価の関係 日本社会心理学会第 47 回発表論文集, 16-17.

況を設定し、比較他者に対する第三者の評価内容が社会的比較による評価の顕在化に影響することを実証した。

具体的には、望ましい学生生活を送っている他者を提示し、第三者がその他者に対してコメントしている状況を実験参加者に提示した。これまでの研究で用いられた課題状況とは異なり、自己の遂行が直ちに評価に反映されるとは限らない非競争状況であった。第三者の評価内容は、比較他者への評価を通じて到達可能性を推測させる内容であった。到達可能性とは、比較他者（多くの場合、上位他者）と同程度の達成を自己が可能であると思う程度である（Lockwood & Kunda, 1997, 1999）。もし、上位他者と同程度の達成が自分にも可能であると思えるならば、その他者への到達可能性は高く、不可能であると思えるならば到達可能性は低い。本研究では、望ましい学生生活を送る他者に対して、第三者がその他者を賞賛する群と、普通であると評価する群を設定した。第三者が比較他者を賞賛することは、その比較他者の評価が自己を含む多くの人にとって達成が困難であることを示唆する。したがって、この群では対比的な評価が促進されるであろう。それに対し、第三者が比較他者を普通であると評価することは、自己を含む多くの人にとっても同様の達成が可能であることを示唆する。したがって、この群では同化的な評価が促進されるであろう。

しかし、比較他者評価については、第三者が比較他者を賞賛する群と、普通であると評価する群を設定することで、次の相反する二つの予想が成り立つ。ひとつは、自己による比較他者の評価が異なることである。具体的には、第三者が比較他者を普通であると評価する群に比べ、賞賛する群で比較他者の評価が高くなる。この予測は、比較他者に対する自己の評価が第三者の評価に依存していることを前提とする。それに対し、自己による比較他者の評価と、第三者による比較他者の評価はある程度独立していることを前提にすると、比較他者の評価に第三者の評価内容は影響しないことが予測される。

もし、第三者の比較他者に対する評価内容によって比較他者の評価が異なるのであれば、第三者の機能は比較他者の顕現化に特化していることになる。したがって、比較他者の評価の平均値は群によって異なることになる。それに対し、もし、第三者による比較他者の評価内容と比較他者評価は独立であり、それにもかかわらず第三者が社会的比較による評価に影響しているならば、比較他者評価の平均値は群間によって違いはないが、比較他者評価の個人差と自己評価の関連は群により異なると予測する。この場合、第三者の機能は比較他者と自己の相対位置の認知に関与していると推論できる。

本研究は後者の予測に基づき、初めに比較他者評価の群間での違いを検討し、その後比較他者評価と自己評価の関連を検討した。具体的には、比較他者についての評価と、自己の抽象的な評価の関連を検討した。この評価の関連は、

前章の評価パターン (b) の発展形に該当する。

実験計画は、比較状況の実験参加者間計画であった。具体的には、第三者による比較他者への評価内容で2群（賞賛群、普通群）、第三者の存在しない統制群を設定した。さらに、比較他者提示の前に自己評価を行う自己評価先行群を設定した。

方法

実験参加者

四年制大学の学生 179 名（男性 89 名、女性 86 名、不明 4 名）が実験に参加した。

手続きと材料

実験は講義中に集団で実施した。はじめに、実験参加者に匿名学生（A さん）のインタビュー記事を読んでもらい、その他者について評定してもらった。その後、自らの優秀さや達成を評定してもらった。

比較他者の提示と第三者評価 比較他者の提示は Lockwood & Kunda (1997, 1999) を参考にした。“新聞記事についての調査”との名目で、ある学生（A さん）がインタビューを受けている記事を読んでもらった。その記事は実験参加者の所属する大学の学生と、新聞記者の対談形式で構成されており、表面上は現代の大学生の実態を伝えるものであった。記事中の学生は、学業の成績が良く、奨学金を授与されており、知的好奇心も旺盛で、学問に対して積極的であった。さらに、人間関係も重視しており、アルバイトやサークル活動にも積極的であることが記載されていた。

その後、賞賛群では、第三者評価として“A さんのように学生生活を送るのは素晴らしいと思います。これからも頑張ってくださいね”とのコメントが記事の最後に記載されていた。また、普通群では、“A さんのように学生生活を送るのが普通ではないかと思います。これからも頑張ってくださいね”とのコメントが記載されていた。本研究での第三者は、記事の学生と実験参加者の双方が所属する大学の教務課の人物であると紹介されていた。統制群、および自己評価先行群ではこのような第三者のコメントは無かった。

比較他者評価 実験参加者は新聞記事を読んだ後に学生（A さん）について評定してもらった。項目は“大学の講義に積極的に取り組んでいる”、“優秀な学生である”、“対人関係が下手である（逆転項目）”、“知的好奇心が旺盛である”の4項目であり、“全くあてはまらない”から“非常によくあてはまる”の7件法で回答してもらった。

自己評価項目 比較他者の評定の後に、“自分自身についての態度調査”との名

目で、肯定的、または否定的な単語について、どれほど自分にあてはまるかを回答してもらった。単語は、Lockwood & Kunda (1997, 1999), Stapel & Koomen (2000), Stapel & Suls (2004) を参考に選択した。単語は“頭がよい”, “成功する”, “無能な (逆転項目)”, “知的な”, “意欲的な”, “優柔不断 (逆転項目)”, “失敗する (逆転項目)”, “積極的な”, “頼りない (逆転項目)”, “合理的”, “要領がよい”であった。これらの単語に“あてはまらない”から“あてはまる”の 7 件法で回答してもらった。

自己評価先行条件では、はじめに自己評価項目に回答してもらい、次に統制群と同様の新聞記事を読んで比較他者を評定してもらった。

結果

回答に不備のあった 5 名を除いた 174 名分のデータを分析に用いた。比較他者の評価は逆転項目を反転し、肯定的になるほど数値が高くなるようにした上で、4 項目の合計値を用いた ($\alpha=.69$, 可能範囲は 4 から 28 まで)。自己評価得点は否定的内容を反転し、肯定的になるほど数値が高くなるようにした上で、11 項目の合計値を用いた ($\alpha=.80$, 可能範囲は 11 から 77 まで)。

実験参加者による比較他者の評価

比較他者の評価について、第三者評価の各群 (賞賛, 普通, 統制) と自己評価先行群で一元配置分散分析を行った。その結果、比較他者評価得点の群による差は認められなかった ($F(3, 170) = 0.95, p > .10$)

自己評価

実験参加者の数がほぼ半数になるように、比較他者評価得点の 21 以下を低群、22 以上を高群とした。

自己評価得点について、第三者評価 (賞賛・普通・統制) × 実験参加者による比較他者評価 (高・低) の分散分析を行った。その結果、実験参加者による比較他者評価の主効果が有意であった ($F(1, 126) = 5.44, p < .05$)。比較他者評価低群 ($M=44.40, SD=8.04$) に比べて、比較他者評価高群 ($M=40.83, SD=10.50$) の自己評価得点が低かった。

さらに、交互作用効果が有意であった ($F(2, 126) = 4.92, p < .01$)。単純主効果の分析を行ったところ、第三者評価の単純主効果では、統制群で比較他者評価低群 ($M=45.91, SD=8.56$) に比べ、比較他者評価高群 ($M=37.55, SD=11.13$) の自己評価得点が低かった ($F(1, 126) = 9.21, p < .01$)。同様に、賞賛群では比較他者評価低群 ($M=45.20, SD=8.25$) に比べ、比較他者評価高群 ($M=39.42, SD=10.64$) の自己評価得点が低かった ($F(1, 126) = 4.44, p < .05$)。それに対し、普通群では比較他者評価による自己評価得点に違いはみられなかった ($F(1, 126) = 1.34, ns$)。

比較他者評価の単純主効果では、比較他者評価高群で第三者評価の効果が有意であった ($F(2, 126) = 4.07, p < .05$)。Bonferroni 法による多重比較を行ったところ、統制群 ($M = 37.55, SD = 11.13$) に比べ、普通群 ($M = 45.24, SD = 8.51$) で自己評価得点が高かった ($p < .05$)。

表 3.6 自己評価得点の平均値 (標準偏差)

比較他者の評価	賞賛	普通	統制
高	39.42 (10.64)	45.24 (8.51)	37.55 (11.13)
<i>n</i>	19	21	20
低	45.20 (8.25)	42.13 (7.06)	45.91 (8.56)
<i>n</i>	25	24	23

注) 数値が高いほど自己評価が高いことを示す。

比較他者評価得点と自己評価得点の相関

比較他者の評定と自己評価得点について、比較状況ごとに相関係数を算出した。その結果、自己評価先行群では比較他者評価得点と自己評価得点に相関は確認されなかったが ($N = 42, r = .03, ns$)、統制群 ($N = 43, r = -.40, p < .01$)、賞賛群 ($N = 44, r = -.32, p < .05$) では負の相関が確認された。それに対し、普通群では正の相関が確認された ($N = 45, r = .31, p < .05$)。

考察

第三者が比較他者を賞賛している群や第三者が存在しない群では、比較他者評価が高い人ほど自己評価が低かった。それに対し、第三者が比較他者を普通である評価する群では、比較他者を高く評価している人ほど自己評価が高い傾向が確認された。相関分析の結果において、自己評価先行群では自己評価と比較他者評価に相関が確認されなかったのに対し、そのほかの群では分散分析の結果と同様の傾向が確認された。この結果は、相対的位置の認知には比較他者についての評価が必要であると同時に、そのような相対的位置の構造認知に第三者が関与していることを示唆する。さらに、比較他者評価の平均値は第三者による評価内容や比較他者の提示時期によって影響されていないことをふまえると、この推論の頑健さは増すと考えられる。

本研究の問題点を考察する。本研究で用いた自己評価や比較他者評価の項目は、特定の遂行を尋ねたこれまでの研究で用いた項目よりも抽象度が高かった。

したがって、比較他者評価と自己評価の関係が真に自他の相対的位置を反映していたかどうかは推論の域を出ない。この問題を解決するには、自他の相対位置に対する認知の基底にある構造認知を直接測定する必要がある。

第7節：本章のまとめ

本章では、仮説1および仮説2を検証し、さらに比較状況における第三者の機能について検討した。その結果、両仮説は支持され、いくつかの機能が明らかになった。具体的には次の四点に集約される。(a) 第三者が比較他者に注目していることを想像することで、女性において社会的比較による評価が顕在化する。(b) 比較他者に注目する第三者が内集団成員である場合、社会的比較による評価が顕在化する。(c) 第三者が比較他者に注目する際、第三者が量的指標に注目すると自己の遂行量と自己評価の関連は強まり、質的な指標に注目すると自己の遂行量と比較他者評価が関連する。(d) 比較他者に対する第三者の評価が到達可能性を含まないものであると対比的に、到達可能性を含むものであると同化的な評価が観察される。

比較状況における第三者の存在によって、社会的比較による評価が顕在化することを予測する仮説1は、第三者が存在する群と、存在しない群が設定された研究1、研究2の結果から支持される。また、比較状況にかかわる第三者が自己にとって心理的に近い他者であるほど、社会的比較による評価が顕在化することを予測する仮説2は、研究2、研究3の結果から支持される。

加えて、第三者の機能が研究4、研究5で明らかとなった。具体的には、テスト課題という競争状況において、第三者が質的な指標に注目すると、自己の量的な基準と他者評価を関連づけた社会的比較による評価パターンが現出することが研究4で示された。また、比較他者の顕現化だけでなく、比較による自己と他者の相対的位置の認知それ自体に第三者が関与している可能性が研究5で示された。

さらに、第三者を含む比較状況で、正確な自己評価の目標と、自己高揚の目標が同時に生起する可能性が示唆された。第三者により比較が顕在化される状況は、相対的位置の正確な把握、すなわち正確な自己評価が必要とされる状況である。これは、本稿で仮定した社会的比較の適応的意義の議論が根拠となる。しかし、上位他者の存在によって自己の劣位が明らかになることは自己高揚の目標の観点からは脅威となる。その際、正確さのレベルを落とした“間接的な社会的比較”が行われることが本研究で明らかとなった。具体的には、他者評価は自己の遂行と関連づけておきながらも、自己評価と自己の遂行の関連を曖昧な

ままにしておくのである。これは、社会的比較を対人戦略の準備段階とする視点を前提とした解釈である。このように自己と比較他者によって評価の曖昧さの水準を変化させることにより、正確な自己評価と自己高揚の目標を同時に達成することが可能となる。この間接的な社会的比較の様相は研究2, 研究3, 研究4で示された。

次章は、比較状況における第三者の影響が存在していることを仮定し、従来の社会心理学で用いられている諸概念と社会的比較傾向の関連を検討した。これらの関連を一括して説明する際、本稿で議論した比較状況における第三者の説明が有用であることが明らかとなるであろう。

第4章：第三者の相対評価にかかわる個人特性と社会的比較傾向の関連

第1節：概要

比較他者に注目、言及する第三者の存在が社会的比較による評価の顕在化に影響することが、第3章における一連の実証研究で明らかになった。この影響の背後には、第三者による相対評価を予期することが仮定されていた。すなわち、自他の相対的位置が第三者から評価される可能性があるゆえに、社会的比較による評価が顕在化したのである。

本章では、第三者の相対評価にかかわると推測される個人特性と社会的比較傾向の関係を検討することで、本稿における仮説3（第三者の存在を顕現化させやすい特性を有する人ほど社会的比較を行おうとする）を実証した。もし、第三者の相対評価が社会的比較による評価に影響するのであれば、そのような評価に敏感な個人特性を持つ人ほど社会的比較による評価を気にするであろう。したがって、そのような個人特性を持つ人ほど社会的比較をする傾向にあると予測する。

本研究では、社会的比較傾向を“他者との比較を求める傾向の個人特性”と定義し（Gibbons & Buunk, 1999）、自己意識特性（研究6）、評価懸念（研究7）、対人ネットワーク（研究8）の三つの個人特性との関連を検討した。自己意識特性、評価懸念、対人ネットワークに共通する要素として、他者に対する敏感さがある。具体的には、自己意識特性では公的自己意識で想定されている他者、評価懸念では否定的評価の主体としての他者、対人ネットワークでは友人としての他者である。もし、これら心理特性や対人状況の個人差と社会的比較傾向が関連していれば、第三者の存在が社会的比較に影響することの傍証となる。そして、それらを統一的に説明する理論的言明として本稿の議論が有用であることを示すであろう。

第2節：自己意識特性と社会的比較傾向の関係（研究6）

本研究の目的は、自己意識特性と社会的比較傾向の関連を検討することにある。

自己意識特性は、自分に注意を向け、自分を意識しやすい心理特性である（Fenigstein, Scheier, & Buss, 1975; 押見, 1992）。自己意識特性は、私的自己意識および公的自己意識に分類される。私的自己意識は、自己の内的な側面を意識

しやすい傾向であり、公的自己意識は、他者から見られる自己の側面を意識しやすい傾向のことである。

もし、社会的比較が自己の意見や特性を“自分に対してのみ”明らかにするだけであれば、私的自己意識特性と社会的比較傾向に関連があったとしても、公的自己意識との関連は観察されないはずである。なぜなら、他者から独立した自己の内的世界において、他者は自己評価の手がかりとしての価値しかなく、他者がどのように自己に対して評価していたとしても、それは社会的比較傾向とは独立だからである。それに対して、もし社会的比較が第三者からの相対評価と密接な関係にあるならば、公的自己意識特性と社会的比較傾向に関連が観察されるはずである。なぜなら、公的自己意識で意識される他者は、自己にとって比較対象となる人物以外の人々も含まれるからである。したがって、公的自己意識特性と社会的比較傾向の正の関連には、第三者の相対評価へのセンシティブリティが含まれていると推論する。

本研究では、自己意識特性の測定として菅原（1984）による自己意識尺度を用いた。また、社会的比較傾向を測定する尺度として、Gibbons & Buunk（1999）による社会的比較尺度を邦訳したものをを用いた。この尺度は、比較をしようとする一般的な傾向を測定する個人差尺度である。この尺度の特徴は、Festinger（1954）による意見比較と能力比較の傾向を個別に測定できることにある。この特徴により、比較状況かわる第三者と社会的比較による評価の関連を具体的に推論することができる。

意見の多くは他者との比較で妥当性が判断されることを第2章で議論した。ここから、意見比較と公的自己意識が関連していたとしても、意見の特性ゆえに社会的比較傾向との関連が観察されたという説明が成り立ってしまう。なぜなら、他者が当該の意見に対して抱く態度への興味と比較傾向の関連であると考えることができるからである。つまり、比較対象の特性と公的自己意識との関連が観察されたのであり、比較状況に存在する第三者との関連は密接とは言えないという説明が可能なのである。したがって、意見比較で公的自己意識特性と関連があったとしても、第三者の相対評価をベースに社会的比較が行われているということの証左とはならない。

しかし、能力比較では事情が異なる。もし、社会的比較が純粋な能力推論の方略に過ぎないのであれば、私的自己意識特性との関連が確認されたとしても、公的自己意識特性との関連は確認されないはずである。それに対し、本稿で述べているように、第三者に相当する人物からの相対評価をベースに社会的比較を行っているのであれば、能力比較でも公的自己意識特性と関連していると予測する。

方 法

調査参加者

四年制大学の学生，および都内専門学校の学生 150 名（男性 83 名，女性 62 名，不明 5 名）が調査に参加した。参加者の平均年齢は 24.43 歳（ $SD=6.24$ ）であった（範囲は 18 歳から 53 歳まで）。

手続き

調査は講義時間内に実施した。調査への参加は自由意志のもとで行われた。質問紙を配付し各自のペースで回答してもらった。回答終了後，質問紙を回収した後にディブリーフィングを行った。調査に要した時間はおよそ 15 分であった。

質問項目

菅原 (1984) の自意識尺度は 21 項目で，私的自己意識を測定する 10 項目（例：自分がどんな人間か自覚しようと努めている），公的自己意識を測定する 11 項目（例：自分が他人にどう思われているのか気になる）で構成されていた。これらの項目について，“全くあてはまらない”から“非常にあてはまる”の 7 件法で回答してもらった。社会的比較傾向の測定に用いた Gibbons & Buunk, (1999) の邦訳版は 11 項目で，意見比較傾向を測定する 5 項目，能力比較傾向を測定する 6 項目で構成されていた（付録参照）。これらの項目について，“全くあてはまらない”から“非常にあてはまる”の 5 件法で回答してもらった。

結 果

全般的な社会的比較傾向は，尺度の逆転項目の数値を反転させたうえで 11 項目の合計値を指標とした（ $\alpha=.85$ ，可能範囲は 11 から 55 まで）。このうち，意見比較傾向 5 項目の合計値（ $\alpha=.68$ ，可能範囲は 5 から 25 まで），能力比較傾向 6 項目の合計値（ $\alpha=.85$ ，可能範囲は 6 から 30 まで）を算出し，それぞれ意見比較傾向と能力比較傾向の指標とした。

自己意識特性は逆転項目の数値を反転させたうえで，私的自己意識 10 項目の合計値（ $\alpha=.88$ ，可能範囲は 10 から 70 まで），公的自己意識 11 項目の合計値（ $\alpha=.90$ ，可能範囲は 11 から 77 まで）を算出し，それぞれ私的自己意識特性と公的自己意識特性の指標とした。

記述統計

各指標の平均値，および標準偏差を表 4.1 に示す。

表 4.1 各指標の記述統計量

	<i>M</i>	<i>SD</i>
私的自己意識	49.70	11.06
公的自己意識	51.50	12.75
社会的比較 (合計)	36.99	8.61
意見比較	17.99	3.94
能力比較	19.01	5.76

自己意識特性と全般的な社会的比較傾向の相関

各自己意識特性の得点と全般的な社会的比較傾向の得点で相関係数を算出したところ，公的自己意識得点と社会的比較傾向得点に正の相関が確認された ($N=136, r=.73, p<.01$)。それに対し，私的自己意識得点との相関は確認されなかった ($N=140, r=.11, p>.10$)。また，私的自己意識得点と公的自己意識得点に正の相関が確認された ($N=141, r=.23, p<.01$)。

自己意識特性と個別の社会的比較傾向の相関

各自己意識特性得点と意見比較傾向，能力比較傾向のそれぞれの得点で相関係数を算出したところ，公的自己意識得点と意見比較傾向得点 ($N=139, r=.53, p<.01$)，能力比較傾向得点 ($N=138, r=.73, p<.01$) とともに正の相関が確認された。それに対し，私的自己意識得点では意見比較傾向得点でのみ正の相関が確認され ($N=143, r=.18, p<.05$)，能力比較傾向得点では相関が確認されなかった ($N=142, r=.05, p>.10$)。

考 察

私的自己意識特性，および公的自己意識特性と社会的比較傾向の関係を分析した結果，私的自己意識特性と社会的比較傾向の相関は確認されなかったのに対し，公的自己意識特性と社会的比較傾向には正の相関が確認された。さらに，公的自己意識特性では意見比較傾向，能力比較傾向とともに正の相関が確認されたのに対し，私的自己意識特性では意見比較傾向でのみ相関が確認された。

私的自己意識と公的自己意識との相違点として，他者からの評価に代表される社会的評価への敏感さがあげられる。したがって，本研究の結果は，社会的比較が社会的評価をベースにした自己意識特性と特に関連している可能性を示

唆する。このような社会的評価を下す主要な人物は、本稿で議論した第三者に相当する。第三者による社会的評価が、特定の比較他者と自己との相対評価であると仮定した場合、第3章で検討した比較状況と一致することになる。

高田（1994）の研究では、岩淵・田淵・中里・田中（1981）によって作成された自己意識尺度を用いて、公的自己意識特性と比較頻度に正の関係が確認されたことを報告している。さらに、私的自己意識特性では態度と意見の比較傾向との関連、および公的自己意識特性では容姿や外見の比較傾向との関連が報告された。ここから、高田（1994）は、私的自己意識特性は自己の内的な特性の比較と関連し、公的自己意識特性は他者から観察される特性の比較と関連していると主張した。それに対し、本研究では、自己の内的な特性とされる能力であっても公的自己意識との関連があることを確認した。本研究と高田（1994）の研究は、採用した自己意識特性尺度が異なり、さらに比較の領域や頻度についての分類や測定方法も異なるため、直接に比較検討することはできない。今後の課題はこれらの知見の整理統合である。しかし、社会的比較が公的自己意識に代表される他者からの評価と関連することは、本研究からも高田（1994）の知見からも同様に示唆される。さらに、Allan & Gilbert（1995）は、独自に開発した社会的比較尺度と対人的なセンシティブティに関連があることを報告した。これらの結果は、社会的比較が対人状況における評価に敏感であることを示唆する。

最後に本研究の問題点を考察する。本研究では、他者を意識しやすい人は、比較状況における第三者に相当する人物からの相対評価も予期しやすいとの想定であった。しかし、公的自己意識特性は単純に比較他者に該当する人物を顕現化させやすい個人特性であることも考えられる。また、他者からの相対評価を気にしていたことが仮に正しいとしても、比較他者本人からの評価である可能性もある。これらの場合も公的自己意識特性と社会的比較傾向の正の関連は予測できる。そのほかにも、本研究で確認された関連にかかわる第三変数の影響が検討されていないため、それらの変数の特定と統制が必要であろう。

第3節：評価懸念と社会的比較傾向の関係（研究7）^{22 23}

本研究の目的は、他者の想起が社会的比較傾向に与える影響に、個人差としての評価懸念がどのように関連しているのかを検討することにある。

評価懸念とは、他者からの否定的評価に対する恐れ（Watson & Friend, 1969）であり、社会的不安の一つに位置づけられている。評価懸念は臨床心理学や社会心理学で幅広く用いられている概念であり、特に対人場面における個人差として扱われている。公的自己意識で意識される他者と同様に、社会環境には複数の人々がおり、第三者となる人物は複数存在する。したがって、評価懸念傾向のある人ほど優劣にかかわる社会的比較による評価にも敏感であろう。ただし、公的自己意識とは異なり、評価懸念は否定的な評価にのみ関連する。

本研究では、評価懸念の個人差に加えて他者プライムを操作した実験手法を組み合わせることにより、評価懸念特性と社会的比較傾向の関連を検討した。具体的には、優れた、または劣った他者を想起する手法を用いた。社会的比較傾向と評価懸念特性の関係は、直前にどのようなマインドセットを形成するかによって変わってくると予想する。

評価懸念特性は、他者からの否定的な評価に対して敏感な特性である。優れた他者を想起することは、自らが劣位であるという評価を想像させる。自らが劣位であるという評価は他者からの否定的な評価であり、そのような評価に敏感な人は、他者からの評価にさらに敏感にならざるを得ない。したがって、評価懸念特性を有する人ほど、優れた他者を想起した直後で社会的比較をする傾向にあると予想する²⁴。それに対し、評価懸念特性をそれほど有していない人では、劣った他者を想起した直後で社会的比較をする傾向にあると予想する。なぜなら、評価懸念特性を有していない人は、他者からの否定的な評価を気にせず、自らにとって都合のよい比較を望むと推測されるからである。したがって、自らが優位であることを想像できる劣った他者を想起した場合に社会的比較をする傾向にあると予想する。

実験計画は他者の想起（優秀他者・劣等他者）の実験参加者間計画であった。従属変数は Stapel & Tesser（2000）に倣い、研究6で用いた社会的比較傾向尺度

²² 本研究の結果は日本心理学会で発表された。

大久保暢俊 (2009). 社会的比較傾向と評価懸念の関係 日本心理学会第73回発表論文集, 219.

²³ 本研究は東洋大学大学院社会学研究科社会心理学専攻研究倫理・参加協力者委員会の承認を受けて実施された。

²⁴ 否定的評価を恐れる評価懸念の性質上、自己高揚の観点から比較を避けることも予想できる。しかし、社会的比較傾向は実際の比較情報に対処する以前の個人差であることを考慮して、本研究では上記の予測を導いた。

の文章を状況的に改変して用いた。

方法

実験参加者

四年制大学の学生 116 名が実験に参加した（女性 26 名，男性 90 名）。

手続き

実験は講義中に集団で実施した。すべての教示は質問紙上で行われた。はじめに，他者の想起の操作を行った。優秀他者想起群では，優れた他者の特徴を 3 つ記述してもらった。劣等他者想起群では，劣った他者の特徴を 3 つ記述してもらった²⁵。その後，従属変数を含むいくつかの項目に回答してもらった。項目は，研究 6 で使用した社会的比較傾向尺度の表現を状況的に改変した 11 項目（5 件法），想起した他者の評価 2 項目であった。想起した他者の評価は，想起した人物が自己，および平均的な人と比べてどれほど優秀であるのかについて，中央点を自分（または平均的な人）と同じ，スケールの両端が“自分（平均）より劣っている”から“自分（平均）より優れている”とラベルづけされた 9 件法で回答してもらった。最後に，評価懸念尺度に回答してもらった。評価懸念尺度は石川・佐々木・福井（1992）による FNE（fear of negative evaluation）の日本版 30 項目（2 件法）を用いた。

結果

社会的比較傾向尺度は，数値が高いほど社会的比較傾向が高くなるように逆転項目を反転させたうえで 11 項目の合計値を算出した（ $\alpha=.79$ ，可能範囲は 11 から 55 まで）。FNE の日本版 30 項目は，評価懸念傾向を持つ人ほど数値が高くなるように逆転項目を反転したうえで合計値を算出した（ $\alpha=.92$ ，可能範囲は 0 から 30 まで）。想起した他者の評価は 2 項目の相関が高かったため（ $r=.86$ ， $p<.01$ ），合計値を算出した。

操作チェック

想起した他者の評価得点で t 検定を行ったところ，劣等他者想起群（ $M=7.93$ ， $SD=4.66$ ）よりも優秀他者想起群（ $M=15.03$ ， $SD=2.56$ ）の評定値が高かった（ $t(116)=10.30$ ， $p<.01$ ）。評価懸念得点で t 検定を行ったところ，劣等他者想起群（ $M=14.81$ ， $SD=7.87$ ）と優秀他者想起群（ $M=16.34$ ， $SD=8.16$ ）で差は認められなかった（ $t(114)$

²⁵ この操作は，“自分よりも優れている他者”，または“自分よりも劣っている他者”との比較を明示するものではなく，“あなたの思う優れた他者”，または“あなたが思う劣った他者”として他者を想起させるものであった。この操作の意図は，想起それ自体が比較を強制させているという説明を排除する狙いであった。

=1.03, *ns*)。

社会的比較傾向

実験参加者の数がほぼ同数になるように、評価懸念得点の16以下を低群、17以上を高群とした。

社会的比較傾向得点について、比較他者の想起（優秀他者・劣等他者）×評価懸念（高・低）分散分析を行った。その結果、評価懸念の主効果 ($F(1, 112) = 27.60, p < .01$) が有意であった。評価懸念低群 ($M = 34.92, SD = 7.47$) に比べ、評価懸念高群 ($M = 41.36, SD = 5.59$) で数値が高かった。また、比較他者の想起×評価懸念の交互作用効果が有意傾向であった ($F(1, 112) = 2.96, p = .09$)。単純主効果の分析を行ったところ、評価懸念低群において、有意傾向ではあるが、優秀他者想起群 ($M = 33.41, SD = 8.43$) よりも劣等他者想起群 ($M = 36.32, SD = 6.27$) で数値が高かった ($F(1, 112) = 2.92, p = .09$)。評価懸念高群では有意でなかった ($F(1, 112) = 0.55, ns$)。

表 4.2 社会的比較傾向得点の平均値（標準偏差）

他者の想起	評価懸念低	評価懸念高
優秀他者	33.41 (8.43)	41.97 (5.56)
<i>n</i>	29	30
劣等他者	36.32 (6.27)	40.65 (5.65)
<i>n</i>	31	26

注) 数値が高いほど社会的比較傾向得点が高いことを示す。

考察

本研究では、評価懸念得点の高い群では劣等他者をプライムするよりも優秀他者をプライムすると社会的比較傾向得点が高く、評価懸念得点の低い群では優秀他者をプライムするよりも劣等他者をプライムすると社会的比較傾向得点が高いことを予測した。その結果、予測は評価懸念得点の低い群で支持される傾向にあり、高い群では支持されなかった。

この理由として、プライムにかかわらず評価懸念得点の高い人は社会的比較得点が高かったことがあげられる。評価懸念得点の高い人は、一事例でしかない劣等他者がプライムされても脅威状態の緩和にはつながらなかったのかもしれない。あるいは、否定的評価に敏感な個人にとって否定的評価が含まれない自己高揚的な比較には情報価が無く、そのほかの他者との比較情報を求めたの

かもしれない。それに対し、評価懸念得点の低い人では、劣等他者がプライムされた時に自己高揚的な比較の期待が高まり、社会的比較情報を求めたと解釈することができる²⁶。

最後に本研究の問題点を考察する。本研究では個人特性として評価懸念を取り上げたが、研究 6 と同様に第三変数の影響も考えられる。たとえば、抑うつ傾向は評価懸念特性、社会的比較傾向の双方と関連がある (Gibbons & Buunk, 1999)。そのような第三変数を統制したうえでの検討が必要であろう。さらに、本研究で想定した相対評価における劣位の可能性は、否定的な評価内容の一部でしかない。今後は評価懸念で想定される否定的評価の内容を特定する必要がある。

第 4 節：対人ネットワークの独自性と社会的比較傾向の関係 (研究 8) ²⁷

本研究の目的は、対人ネットワークの個人差と自己活性化 (Stapel & Tesser, 2001) が社会的比較傾向に与える影響について検討することにある。

研究 6, 研究 7 で検討した公的自己意識や評価懸念が心理特性の個人差であるのに対し、本研究で検討する対人ネットワークは、個人の置かれている状況の個人差である。本研究では、自己概念が活性化した際の対人ネットワークの個人差と社会的比較傾向の関連を検討することで、比較状況における第三者の相対評価と社会的比較の関係を傍証する。

Stapel & Tesser (2001) は、私的自己 (personal self) の活性化が社会的比較傾向に影響することを実証した。私的自己とは、他者から切り離された自己である。しかし、活性化される自己概念は、Stapel & Tesser (2001) で検討された私的自己のみではない。近年、自己概念は多様な対人関係の中で構造化されていることが指摘されている。たとえば、福島 (2003) は、各々の対人関係に対応した自己知識のサブセットが自己評価に影響している可能性を指摘した。また、Baldwin, Carrell, & Lopez (1990) は、自らにとって重要な他者が自己評価に影響することを実証した。これらの研究からも、自己は私的自己のみでなく、他者とのかかわりにおける自己もあることが指摘できる。

他者とのかかわりの中での自己、すなわち関係自己の活性化は、本稿で検討

²⁶ あるいは、優秀他者をプライムされた評価懸念得点の低い群では、自己への脅威から比較を避けたのかもしれない。しかし、いずれにせよ、評価懸念低群では、自己高揚的な目標のみで社会的比較情報を求めていたと解釈できる。

²⁷ 本研究のデータは日本社会心理学会で発表された。

大久保暢俊 (2007). 関係自己活性化と社会的比較傾向の関係 日本社会心理学会第 48 回発表論文集, 682-683.

している比較状況における第三者の影響と密接に関係する。自らにとって重要な他者とのかかわりにおける自己は、第3章で検討した自己と第三者の図式に最も近い。したがって、重要な他者との関係における自己は社会的比較傾向と密接に関連すると予想される。

本研究は、専門学校生にとって身近な重要他者である“最も親しい友人”とのかかわりにおける自己概念を活性化することで、関係自己が社会的比較傾向に与える影響を実証した。特に、活性化される自己の性質の違いと対人ネットワーク構造の交互作用に着目した。自己の活性化の影響は、対人ネットワーク構造によって調整されると推論する。なぜなら、自己と友人の繋がりにもさまざまな形式があると考えられるからである。

具体的には、磯部・長谷川・浦・相馬（2004）の対人ネットワークの独自性の測定を用いた。これは、最も親しい友人を中心に考えた際、その他の友人がお互いに友人（知り合い）であるかどうかによって対人ネットワーク構造の独自性を捉えるものである。独自性が低いとは、友人同士がお互いに友人である構造であり、独自性が高いとは、友人同士がお互いに友人でない構造である。

この対人ネットワークの独自性を考慮すると、関係自己の活性化が社会的比較傾向に影響するのは、特に独自性が高い場合であると予測する。もっとも親しい友人と、そのほかの友人関係が独立であるということは、それぞれに対応した別の関係自己が成立していることを意味する。そのような対人ネットワーク構造では、相対評価にかかわる社会的評価も一義的に決定できない状況である。したがって、それぞれの友人からの社会的評価に一貫性がなく、常に比較をモニターしなければならない状況となる。ここから、関係自己が活性化され、かつ独自性の大きい対人ネットワークに置かれている個人ほど個別の関係自己が存在していることになり、それらの一貫性をチェックする観点から社会的比較情報に敏感でなければならない。したがって、そのような状況に置かれた個人は社会的比較をする傾向にあると予測する。それに対して、独自性の低い対人ネットワークにおかれている個人では、相対評価にかかわる社会的評価は友人間で伝達されている可能性が高いと推測する。したがって、それぞれの友人からの社会的評価も一貫しており、対人ネットワークの独自性が高い場合に比べて相対的に社会的比較をしない傾向であると予測する。また、以上の推論を仮定すれば、そのような重要他者と関連のない私的自己の活性化は、対人ネットワークの独自性の大きさの影響を受けないと予想する。

実験計画は、自己活性化（私的自己・関係自己）と対人ネットワークの独自性（小・大）の実験参加者間要因である。

方 法

実験参加者

専門学校 of 学生 96 名（男性 40 名、女性 56 名）が実験に参加した。平均年齢は 20.00 歳（ $SD=5.90$ ）であった（範囲は 18 歳から 46 歳まで）。

手続き

実験は講義時間中に集団で実施した。全ての教示は質問紙上で行った。はじめに、自己活性化の操作を行った。自己活性化の操作は基本的に Stapel & Tesser (2001) の研究 2b で用いられたものを参考にした。私的自己活性化群では、自分自身を他人に伝えるとしたら何を伝えるかについて、“私は～”に続く形で 4 つの文章を作成してもらった。関係自己活性化群では、最も親しい友人と一緒にいる時の自分自身を他人に伝えるとしたら何を伝えるかについて、同様に“私は～”に続く形で 4 つの文章を作成してもらった。

自己活性化の操作の後、社会的比較傾向尺度 (Gibbons & Buunk, 1999) を邦訳した 11 項目に回答してもらった。研究 7 と同様に、尺度を状況的に改変して用いた。

最後に、磯部ら (2004) を参考に、実験参加者の対人ネットワークの独自性を測定した。具体的には“最も親しい友人”のイニシャルを挙げてもらい、その後、友人のイニシャルをできるだけ多く挙げてもらった。最後に、最も親しい友人と共通の友人のイニシャルを丸で囲んでもらった。

結 果

記述の不備による 5 名分のデータを分析から除外した。対人ネットワークの独自性は“(友人数－共通) / 友人数”で算出した。実験参加者の数がほぼ同数になるように、0.58 以下を独自性小群、0.59 以上を独自性大群とした。社会的比較傾向尺度は逆転項目を反転させたうえで 11 項目の合計値を用いた ($\alpha=.80$, 可能範囲は 11 から 55 まで)。

社会的比較傾向尺度の得点に対し、自己活性化 (私的自己・関係自己) × 対人ネットワークの独自性 (小・大) の分散分析を行ったところ、交互作用効果が有意であった ($F(1, 89) = 6.46, p < .05$)。そのほかの主効果は有意でなかった ($F_s < 1.12, ns$)。

単純主効果の分析を行ったところ、独自性大群において、私的自己活性化群 ($M=35.19, SD=6.01$) に比べ関係自己活性化群 ($M=39.48, SD=6.83$) で数値が高かった ($F(1, 89) = 4.30, p < .05$)。独自性小群では有意でなかった ($F(1, 89) = 2.31, ns$)。また、関係自己活性化群では、独自性小群 ($M=34.25, SD=6.50$) よりも独

自性大群 ($M=39.48, SD=6.83$) で数値が高かった ($F(1, 89) = 6.85, p < .01$)。私的
自己活性化群では有意でなかった ($F(1, 89) = 1.05, ns$)。

表 4.3 社会的比較傾向得点の平均値 (標準偏差)

対人ネットワーク の独自性	私的自己	関係自己
小	37.35 (8.36)	34.25 (6.50)
<i>n</i>	23	24
大	35.19 (6.01)	39.48 (6.83)
<i>n</i>	21	25

注) 数値が高いほど社会的比較傾向得点が高いことを示す。

考 察

友人同士が知り合いでない、つまり独自性の高い対人ネットワークを持つ人
では、私的自己を活性化した人に比べて関係自己を活性化した人で社会的比較
をする傾向にあった。さらに、関係自己が活性化した人では、独自性の高い対
人ネットワークを持つ人ほど社会的比較をしようとする傾向であったのに対し、
私的自己活性化された人では対人ネットワークの独自性による違いは確認され
なかった。本研究で操作した自己の活性化は、いずれも他者に提示する際の自
己概念の内容であった。したがって、私的自己の活性化において他者の存在が
顕現化されなかったという説明はある程度排除される。

統計的に有意ではないが、独自性小群では私的自己活性化群よりも関係自己
活性化群の数値が低い傾向にあった。これは、友人同士が知り合いである場合、
関係自己の評価が一義的であり、新奇な自己情報を得ようとする圧力が小さか
ったために社会的比較情報を求めなかったのかもしれない。それに対し、友人
同士が知り合いでない独自性大群では、関係自己が複数存在しているため、単
一の自己を活性化するよりも社会的比較情報を求めたと解釈できる。

最後に本研究の問題点を考察する。本研究では対人ネットワークの個人差と
自己の活性化により社会的比較傾向が変わりうることを実証した。しかし、自
己の活性化による違いは相対的であり、統制群が存在しないために自己の活性
化それ自体の効果は不明である。また、自己の活性化の操作によって想起され
る自己の内容にも不明確な部分が多い。今後はそれらの内容を特定していく必
要がある。さらに、対人ネットワーク構造の問題が三つある。ひとつは、本研

究で想定された社会的評価の伝達が本当に行われているかどうかについての直接の証拠がないことである。もうひとつは、社会的評価が伝達されていたとしても、そこで自己の相対的位置についての情報が含まれているかどうかは定かではない。最後は、対人ネットワークは個人の置かれる発達段階や社会的役割により多様な状態が考えられることである。本研究では専門学校生に限定したため、学生に特有の友人関係であった。このサンプリングの恣意性がどのように影響しているのかについては、そのほかのサンプルでの実験結果と比較することで明らかとなるであろう。

第5節：本章のまとめ

本章では、第三者の相対評価にかかると想定される個人特性と社会的比較傾向の関連を確認することで、仮説3を検証した。その結果、自己意識特性、評価懸念、対人ネットワークのそれぞれの要因と社会的比較傾向に関連が確認された。一連の結果は、比較状況にかかわる第三者の影響の存在を傍証するとともに、その影響範囲がいくつかの心理特性、および対人状況と密接に関連することを示唆する。

第2章の理論的検討では、第三者による相対評価の予期が比較状況の基底に存在することを明らかにした。本章で検討した個人特性は、部分的にはそのような第三者の相対評価へのセンシティブリティが含まれていると考える。

もちろん、これら個人特性のすべての要素が比較状況にかかわる第三者の相対評価の予期で構成されているわけではない。すでに述べたように、研究6の公的自己意識は、他者の顕現化による説明や比較他者による自己への評価などの説明も考えられる。また、研究7の評価懸念は、さまざまな否定的評価の内容が交絡している。さらに、研究8の対人ネットワークの個人差と自己の活性化でも本当に相対評価の情報が伝達されているのかは不明である。しかし、それぞれ別の概念である自己意識特性や評価懸念、対人ネットワークなどの個人特性と社会的比較傾向の関係を同一の理論的視点で解釈できることは、本稿の理論的仮説のひとつの傍証であると考えられる。

第5章：総合考察

第1節：実証知見のまとめ

第3章、第4章の一連の研究により、仮説は部分的に支持された。また、第三者が存在する状況での比較の様相をいくつか明らかにした。具体的には、仮説1の第三者の存在による社会的比較の評価の顕在化は、研究1、研究2において支持された。研究1では、比較他者の遂行を提示する際、第三者の視点を想像した女性実験参加者で社会的比較による対比効果が確認された。ただし、男性実験参加者ではこの傾向とは逆に、第三者の視点を想像しない群で対比効果が確認された。この性差について、視点取得の能力と、自己と第三者の関係の捉え方の違いによる解釈の可能性を挙げた。研究2では、第三者の集団成員性を操作し、第三者が比較他者に言及している状況を提示して社会的比較による評価を検討した。その結果、性別にかかわらず、第三者が内集団成員の群において社会的比較による評価が顕在化した。この結果は、研究1で観察された性差の解釈として、自己と第三者の関係性による説明が妥当であることを示唆する。

研究2は、仮説1に加えて、仮説2の検証も兼ねていた。自己と第三者が同じ集団に属している群で、社会的比較による評価が顕在化した。それに対し、第三者が外集団成員の群、または第三者や比較他者が存在しない群では、社会的比較による評価が明確に確認されなかった。研究3でも同様に、第三者が内集団成員の群において社会的比較による評価の顕在化が確認され、外集団成員の群では確認されなかった。

さらに、研究2、研究3では社会的比較による評価の特質を明らかにした。これらの研究では、自己の遂行と他者評価（比較他者、平均他者）との関連があり、かつ自己の遂行と自己評価との関連がない評価パターンが観察された。この結果を“間接的な社会的比較”の生起であると解釈した。これは、自己の遂行と自己評価の関連を曖昧にして自己高揚の目標を達成する余地を残しておく一方で、自己の遂行と他者評価の関連を明確にして正確な自己評価の目標を間接的に達成することを可能にする比較の方略である。自他の相対的位置に基づく関係を対人行動の戦略として用いるために、他者評価を確定することが結果として適応的となる。これは、社会環境と自己の関係を切り離して社会的比較を捉える視点からは導かれない解釈である。研究3では、自己高揚の目標が活性化されやすい状況と、されにくい状況を比較することで、間接的な社会的比較の生起を検討した。具体的には、自己にとって脅威ではない下位他者を提示し

た場合には、自己の遂行と他者評価の関連と同時に、自己の遂行と自己評価との関連も観察された。この間接的な社会的比較の評価パターンは、適応的意義の観点から社会的比較を理解することの有用性を示している。

この間接的な社会的比較における評価パターンを考慮した上で、研究 4 では比較状況にかかわる第三者の機能について探索的に検討した。その結果、第三者が注目する基準によって、社会的比較による評価のパターンは変わることが明らかとなった。具体的には、第三者が質的な基準に注目すると、自己の量的な遂行によって他者評価を確定させようとする傾向が確認された。これは、第三者が質的な基準に注目することで間接的な社会的比較が生起したと解釈できる。それに対し、第三者が量的な基準に注目すると、自己の量的な遂行と自己評価の関連のみ観察された。

研究 5 では第三者の評価内容によって自己と比較他者の相対的位置の認知が変化する可能性を検討した。その結果、比較他者は優秀であると第三者が評価すると、社会的比較による評価は対比的となることが確認された。それに対し、比較他者は普通であると第三者が評価すると、社会的比較による評価は同化的となることが確認された。重要な点は、比較他者の優劣に関する評価には、第三者の評価内容の効果が確認されなかったことである。つまり、優秀群に比べ、普通群で比較他者自体の評価が低かったがゆえに同化的であったという説明は排除された。この結果は、比較他者に対する第三者の評価は、他者を基準とした自己評価に影響していることを示唆する。

研究 6 から研究 8 では、第三者からの相対評価にかかわると想定される個人特性と社会的比較傾向の関連を検討することにより、本稿で議論した比較状況における第三者の相対評価の傍証と、その説明をより広い心理現象にまで適用することを目的とした。研究 6 では、自己意識特性と社会的比較傾向の関連を検討した。もし、第三者の相対評価が社会的比較に関与しているならば、公的自己意識特性と社会的比較傾向に正の関連が確認されるはずである。結果は、公的自己意識特性と社会的比較傾向の関連は意見と能力のどちらの比較傾向でも正の関連が確認され、予測は支持された。それに対し、私的自己意識特性は意見比較傾向でのみ関連が確認され、全般的に社会的比較傾向との関連は弱かった。

研究 7 では評価懸念の個人差と社会的比較傾向の関連を検討した。その結果、予測とは異なり、事前のプライムにかかわらず、評価懸念を抱きやすい人ほど社会的比較をする傾向にあった。さらに、相対的に評価懸念を抱きにくい人では、事前に優秀他者をプライムするよりも、劣等他者をプライムした人で比較をする傾向にあった(ただし有意傾向)。つまり、評価懸念を抱きにくい人では、直前の他者の効果が確認されたのである。評価懸念を抱きにくい人は、第三者

に代表される他者からの評価を気にしない人であると推論できる。そのような人にとって、比較状況は第三者の介在しない状況として認識されやすいのかもしれない。そこで、評価懸念を抱きにくい人では、劣等他者を想起した直後では自己高揚的な比較の期待が高まり、比較を求めたのである。それに対し、事前に優秀他者を想起した評価懸念を抱きにくい人は、自尊感情への脅威から他者との比較を避けたのである。この結果は、第三者の相対評価の予期が比較傾向に影響すること、および第三者が介在しない状況では自己にとって都合のよい比較が行われやすいことを示唆する。

研究8では、対人ネットワークの個人差と社会的比較傾向の関連を検討した。その結果、特定他者との関係自己を活性化した場合、その他者とそのほかの他者が知り合いでないネットワーク構造を持つ人ほど社会的比較をしようとする傾向にあった。さらに、そのようなネットワーク構造を持つ人において（つまり、対人ネットワークの独自性が大きい人において）、他者とのかかわりを持たない私的自己を活性化した場合には相対的に社会的比較をしない傾向であった。この結果について、友人同士が知り合いでない対人ネットワークにおいては、自己の社会的評価が確定されていないがゆえに、社会的比較による評価を求めたと解釈した。対人ネットワークで伝達される社会的評価の内実は特定されていないが、本稿の立場からは資源獲得にかかわる優劣情報であると想定される。そのような優劣情報は形式化された相対評価である。したがって、第三者の間で相対評価がコミュニケーションされる可能性を個人が推論し、その内容が社会的比較傾向に影響したのである。

これら一連の実証研究を通じて明らかになったことは、次の三点に集約される。(a) 第三者による比較他者への注目や評価は社会的比較による評価を顕在化させる。そして、それは第三者が自己にとって心理的に近い他者である場合に顕著である。(b) 第三者による比較他者への注目や評価は社会的比較による評価で用いられる指標や、評価の方向性に影響する。(c) 公的自己意識、評価懸念、対人ネットワーク等の個人特性と社会的比較傾向の関連は、第三者による相対評価の予期で統一的に説明できる。この三つの言明から、第三者に代表される社会環境は自他の相対的位置を反映した社会的比較の基盤となっていることが示唆される。

第2節：自己評価の手がかりとしての社会的比較

第1章では、社会的比較が自己研究の中に位置づけられることを明らかにした。自己概念や自己評価の研究において、社会的比較は自己を知るためのひと

つの手がかりである。自己を知る手がかりは、他にも自己観察、理想との比較、他者からのフィードバック、集団への所属などがあり、社会的比較はその中のひとつに位置づけられる（伊藤, 2002）。

実際に人はどの手がかりを重視しているのかについて、Schoeneman, Tabor, & Nash (1983) は幼稚園児、小学校低学年の児童を対象に調べている。その結果、自己を知るための手がかりとして、社会的比較は自己観察や社会的フィードバックほど用いられていないことが明らかとなった。同様の結果は、Schoeneman (1981) や Wayment & Taylor (1995) でも確認されており、自己を知るための手がかりを調べた研究からは、社会的比較は重要視されていないと結論づけられた。

この結論について、Wood & Wilson (2003) は、社会的比較をしていることを報告することへの躊躇や、特定の状況（たとえば非競争状態）に特化した場合の手がかりの有用性を調べていることが、社会的比較の重要度を低めたのではないかと考察した。また、高田 (2004) は、Schoeneman et al. (1983) で用いられた方法の問題点を指摘した。高田 (2004) によると、Schoeneman らの方法は反省的に手がかりの想起を促すものであり、メタ認識を必要とする測定である。このようなメタ認識を必要とする測定は、抽象度の高い自己への過度の注目を促す。その結果、自己観察などの手がかりが多く想起され、社会的比較が報告されなかったと高田 (2004) は解釈した。つまり、社会的文脈を離れた自己に注目したので、社会的比較が実際よりも重要度が低く見積もられたのである。

Wood & Wilson (2003) や高田 (2004) の指摘は、社会的比較が社会環境と密接にかかわっており、特に自己も環境内の一要素と考える本稿の立場と整合する。反省的に捉えられる自己評価は、社会的比較の結果から抽象化されることはあり得るが、本質的には特定の状況から切り離された通状況的な自己評価である。Miller, Turnbull, & McFarland (1988) は、社会的比較による自己評価を“普遍的な評価 (universalistic evaluation)”と“個別的な評価 (particularistic evaluation)”に分類し、人は個別的な評価を可能にする他者を比較相手として選好することを実証した。普遍的な評価とは、一般的な他者の中における相対的位置に基づいた、抽象的な自己についての評価であり、最終的に他者とは独立の自己認識に関連する。それに対し、個別的な評価とは、特定の他者との相対的位置に基づいた、具体的な対人関係を反映した自己評価であり、集団内における社会的な立場の査定に関連する。つまり、社会的比較による自己評価は、自己と他者の関係が一般的な場合と、特殊な場合の二つの様相があり、前者が通状況的な自己評価を明らかにするのに対し、後者は実際の対人関係内における自己評価を明らかにする。そして、Miller et al. (1988) の実験結果は、個別的な評価が社会的比較による自己評価において優勢なことを示したのである。

本稿における理論的検討からも、普遍的な評価とは異なり、社会的比較による自己評価は特定の対人関係内において有効な戦略を採用するために特化していると考えられる。もし、社会的比較による自己評価が即座に普遍化するのであれば、それが必要とされる社会環境で淘汰圧力を受けなければならない。そして、人類の歴史において、普遍化が必要とされる事態は始まったばかりである。現段階では、意識的で高度な認知能力を利用してはじめてそのような普遍化が可能であるという状態であり、適応装置としてのところ（山岸, 1998）の基本装備として備わるまでには時間がかかると推論される。

特定の他者との比較による評価がどのように普遍的な評価に移行するのかについては、いまだ不明な部分が多い²⁸。Buckingham & Alicke (2002) は、比較他者の操作は抽象度の高い項目には影響しないことを報告した。社会的比較研究では、比較他者と関連した次元に対応する特定の自己評価を検討することが多い。たとえば、クラスメートを比較他者とした場合に学業の自己評価を尋ねるという具合である。しかし、もし、他者との比較の結果にある程度の普遍的な情報価があり、一貫した対人戦略を取るように規定する力があるのならば、特定の他者との比較による自他の相対位置の認知は、後に出会う別人物との相互作用のレベルで影響を及ぼすはずである。本稿の研究 7 や大久保 (2009) の研究では、それぞれ具体的な他者を想像することで、社会的比較傾向や最後通牒ゲームの応諾に影響するとの結果が示された。自己評価においても、特定他者との比較による評価の普遍化の様相や程度を検討することが必要であろう²⁹。その際、本稿の理論的、実証的知見から予測されるのは、第三者が注目する比較対象がより普遍化しやすいことである。第三者の注目する比較対象は、自己の属する社会環境において相対評価を成立させる要素である。そして、そのような対象による比較が集団内のほかの他者との相互作用でも必要とされているのであれば、普遍化した評価に組み込んでおけば認知的な負担は減る。つまり、

28 一事例の比較を般化することをエラーと考えたとしても、どの程度比較を積み重ねれば普遍化されるのかという問題に置き換わるだけであることには留意されたい。

29 社会的比較による評価の普遍化を検討する上で、実際の反応を数理化する方法も存在する。たとえば、Wedell & Parducci (2000) は判断の範囲-頻度の理論 (Parducci, 1965) を社会的比較に適用している。彼らは、社会的比較には (a) 自己の現実をチェックする機能と (b) 自己評価の基礎を提供する機能の二つがあるとしている。この内、(b) は井の中の蛙効果 (Marsh & Parker, 1984) などの研究を論拠にしており、集団内での一般化と通状況的な普遍化の関係を検討するのに適している。この理論の特徴は、文脈と刺激の反応を数理モデル化している点である。これまで紹介してきた視覚モデルとは異なり、変数自体の意味論的解釈への依存度が低い点で、実証データ主導の理解が可能である。同様に、少数事例の般化と自己中心性に着目した Krueger (2000) の研究は、実証データにマッチしやすいモデル化を行っている点と、情報が追加された際の判断を扱える点で有用であろう。今後は、このような反応ベースの理論との関連も考えていく必要がある。

第1章で議論した、Mussweiler, Rüter & Epstude (2006) の認知的効率性による社会的比較の理解は、実際に相互行為が行われる対人関係内での一般化に係るのである。

第3節：社会的比較による自己評価の適応的意義

自己評価を普遍化するためには、高度な認知能力とそれに伴う抽象的な自己概念が必要である。つまり、普遍化した自己評価は抽象的な自己概念の成立と関連すると予測される。この予測の傍証として、幼稚園児を対象に社会的比較の様相を検討した Mosatche & Bragonier (1981) の研究がある。彼らの研究では、比較の機能を“類似と非類似の弁別”、“認知的明瞭化”、“評価”、“競争”に分類し、どの程度比較が生起するのかを観察した。その結果、比較の機能では“類似と非類似の弁別”と“競争”が顕著であった。また、Chafel (1987) の研究では、幼児では認知的明瞭化や類似、非類似の機能が多く観察され、自己評価に相当する比較は少ないことが報告された。Ruble (1983) は幼児や児童における社会的比較は、認知能力を必要とする自己評価の機能よりも、他者との類似の確認を通じた規範習得や関係維持の機能が顕著であることを主張している。

上記の研究で想定される自己評価は、これまでの議論における抽象化された自己にかかわる評価であり、普遍化された評価を理想形とする。つまり、自己評価の機能は高度な認知能力が必要であると想定されるがゆえに、自己評価の機能が幼児では認められないのである。ここから、普遍化された評価以前に社会的比較の本来的な形があると考えれば、社会的比較の高度な認知能力への依存度は想定されていたよりも低いと想定できる。この視点は、社会的比較という心的機能をヒト以外の種にも見出すことを可能にする。

相対的な資源保持能力に着目した動物行動学の研究では、ヒトのような認知能力を持たない種において個体間の比較が本当に行われているのかについて議論されてきた (Arnott & Elwood, 2009)。これらの研究で対象となる動物はさまざまであり、資源保持能力の指標として、体の大きさ (たとえばクモや魚)、体重 (たとえば豚や鹿)、武器の発達度合い (たとえば蟹や糞ころがし) などが用いられ、対決の持続時間とそれらの指標の関係などを用いて検討されている (e.g., Prenter, Elwood, & Taylor, 2006)。これらの研究で観察される個体間の比較については、大きく三つの立場がある。ひとつは、純粹に自己査定しかしてお

らず、他個体との相対比較は行わないとする立場である³⁰。もうひとつは累積的な査定である。これは、基本的には自己査定であるが、対決の持続時間は相手の資源保持能力に依存する。最後に、相互の査定である。これは、個体間の資源保持能力を比較して行動する戦略であり、ヒトで想定されている社会的比較にもっとも近い。

個々の研究で用いられる動物種の違いもあり、いずれの戦略が採用されるのかについての明確な結論は出ていない。しかし、感覚知覚レベルの機能しか持たないとされている動物種を用いた研究は、高度な認知能力を前提とした自己概念を持ち出すヒトを対象とした社会的比較研究に有用な示唆を与える。つまり、社会的比較の原初形態として、どれほど高次の認知機能が必要なのかということが問題提起されるのである。

本研究における第三者をベースにした社会的比較は、自己による第三者の相対評価を推測することが想定されていた。つまり、高度な認知能力を前提とした比較の形態に分類されるのである。しかし、ヒト以外の動物種の研究から、そのような高度な認知能力を想定せずとも感覚知覚レベルで個体間の比較は可能であるということも考えられる。種の違いによる制約があるため、解釈は慎重にしなければならないが、比較で必要とされる感覚知覚要素を検討することは、ヒトの社会的比較を検討する上でも重要であろう。本研究の実験結果を観察レベルで記述するならば、第三者が特定の他者に注目する状況において、その特定他者との評価的関連が観察されたことになる。この結果に対し、第三者の心的状態の推測を必要としない解釈も可能である。たとえば、第三者の注目が資源獲得量と相関し、注目先の他者への対人戦略を変更するような心的プログラムがあれば、本研究と同様の結果は観察されるであろう。つまり、その都度推測ができる高度な認知能力は必要条件ではないのかもしれない。一連のプログラムが社会環境への適応の結果として備わっていれば、第三者の注目を知覚するだけで十分である。この解釈ははまだ憶測の域を出ないが、いずれにせよ、ヒトにおける比較の感覚知覚レベルでの構成要素と、比較による対人戦略の変化という観点から研究を進めることは、本稿で検討した社会的比較の適応機能をより明らかにするであろう。

³⁰ これは必ずしも高度な認知能力がない動物種に限った話ではない。ヒトを対象にした社会心理学研究においても、自己中心性の立場から必要な比較を行わないとする知見も報告されている (e.g., Moore & Kim, 2003)。

第4節：本研究の問題点と今後の展望

上記の感覚知覚レベルでの比較の検討は、第三者をベースとした社会的比較を検討する上で有用な知見を提供するであろう。ただし、第三者が特定の他者に注目した際の概念表象レベルで起きることを同時に測定することで、より確かな結論が出せることは言うまでもない。本研究では、第三者の存在する比較状況を実験参加者に提示し、その際の評価の関連を観察しただけである。今後は、第三者の心的状態や比較状況について自己の推測した内容を直接測定する研究が必要であろう。これは、そのような比較状況における心理学的近接因の特定と、その影響関係を明らかにすることに関係する。

また、第2章ですでに述べたが、第三者が一人の場合と複数人の場合の区別は行わなかった。第三者を三人提示した研究2から研究4では、第三者の注目方向と評価のニュアンスは同じであった。今後は、第三者が複数人で、かつ比較他者への注目方向や評価内容が異なる場合を設定して検討することが必要であろう。ただし、この検討を行う際にも、第三者の心的状態の推測についての問題が浮上する。第三者の心的状態を自己が推測しているのであれば、複数人いた場合はそれぞれの心的状態を同時に（または連続して）個別認識し、それらの情報を基に一定の結論を出さねばならない。さらに、この個別認識の問題は、誰が比較他者となり、誰が第三者になるのかといった役割認識にも関連する。これらは、社会的認知研究で検討されている対人認知の問題や、発達心理学や動物行動学で検討されている意図性の問題と重なる。つまり、社会的比較を検討する上で、これらの研究知見は欠かせないのである。

本稿では、社会環境への適応の観点から社会的比較を検討した。現在、さまざまな社会心理現象がこの観点から検討されている。その中で通低する課題は、認知、感情、動機づけといった要素からなる心理プロセスが、どのように進化してきたのかである。心理プロセスの進化には多様な要因が挙げられているが、その一つは社会環境にあるといっても過言ではない。つまり、心理プロセスの一部は他個体との相互作用の中で形成されてきたのである。

ヒトを含めた社会性動物の多くは、繁殖や生存の資源を一個体で調達することができない。そのため、他個体との競争や連携などの相互作用が存在する。ここから、相互作用のために必要な知覚、認知機能が推定できる。本稿では、そのような認知機能として社会的比較を位置づけ、自他関係の認知を中核とする理論仮説を導いた。この仮説に基づき、第三者が比較他者に注目、言及している状況で社会的比較による評価が顕在化することを明らかにした。しかし、まだ多くの理論的、実証的な問題が残されている。今後は、理論のさらなる精緻化と、多様なアプローチによる実証知見の蓄積が必要である。

引用文献

- Alicke, M. D., LoSchiavo, F. M., Zerbst, J. I., & Zhang, S. (1997). The person who outperforms me is a genius: Maintaining perceived competence in upward social comparison. *Journal of Personality and Social Psychology, 73*, 781-789.
- Allan, S., & Gilbert, P. (1995). A social comparison scale: Psychometric properties and relationship to psychopathology. *Personality and Individual Differences, 19*, 293-299.
- Allan, S., & Gilbert, P. (2002). Anger and anger expression in relation to perceptions of social rank, entrapment and depressive symptoms. *Personality and Individual Differences, 32*, 551-565.
- Arnott, G., & Elwood, R. W. (2009). Assessment of fighting ability in animal contests. *Animal Behavior, 77*, 991-1004.
- Arriaga, X. B., & Rusbult, C. E. (1998). Standing in my partner's shoes: Partner perspective-taking and reactions to accommodative dilemmas. *Personality and Social Psychology Bulletin, 9*, 927-948.
- Arrowood, A. J., & Friend, R. (1969). Other factors determining the choice of a comparison other. *Journal of Experimental Social Psychology, 5*, 233-239.
- Aspinwall, L. G., & Taylor, S. E. (1993). The effects of social comparison direction, threat, and self-esteem on affect, self-evaluation, and expected success. *Journal of Personality and Social Psychology, 64*, 708-722.
- Baldwin, M. W., Carrell, S. E., & Lopez, D. F. (1990). Priming relationship schemas: My advisor and the pope are watching me from the back of my mind. *Journal of Experimental Social Psychology, 26*, 435-454.
- Baumeister, R. F. (1982). A self-presentation view of social phenomena. *Psychological Bulletin, 91*, 3-26.
- Berger, S. M. (1977). Social comparison, modeling, and perseverance. In J. M. Suls & R. L. Miller (Eds.), *Social comparison processes: Theoretical and empirical perspectives* (pp. 209-234). Washington, DC: Hemisphere.
- Biernat, M. (2005). *Standards and expectancies: Contrast and assimilation in judgments of self and others*. New York: Psychology Press/Taylor and Francis.
- Blanton, H. (2001). Evaluating the self in the context of another: The three-selves model of social comparison assimilation and contrast. In G. B. Moskowitz (Ed.), *Cognitive social psychology: The Princeton symposium on the legacy and future of social cognition* (pp. 75-87). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Brewer, M. B., & Weber, J. G. (1994). Self-evaluation effects of interpersonal versus

- intergroup social comparison. *Journal of Personality and Social Psychology*, 66, 268-275.
- Brickman, P., & Bulman, R. J. (1977). Pleasure and pain in social comparison. In J. M. Suls & R. L. Miller (Eds.), *Social comparison processes: Theoretical and empirical perspectives* (pp. 149-186). Washington, DC: Hemisphere.
- Brown, D. R. (1953). Stimulus-similarity and the anchoring of subjective scales. *American Journal of Psychology*, 66, 199-214.
- Brown, J. D., Novick, N. J., Lord, K. A., & Richards, J. M. (1992). When Gulliver travels: Social context, psychological closeness, and self-appraisals. *Journal of Personality and Social Psychology*, 62, 717-727.
- Buckingham, J. T., & Alicke, M. D. (2002). The influence of individual versus aggregate social comparison and the presence of others on self-evaluations. *Journal of Personality and Social Psychology*, 83, 1117-1130.
- Buunk, B. P., & Mussweiler, T. (2001). New directions in social comparison research. *European Journal of Social Psychology*, 31, 467-475.
- Buunk, B. P., Van Yperen, N. W., Taylor, S. E., & Collins, R. L. (1991). Social comparison and the drive upward revisited: Affiliation as a response to marital stress. *European Journal of Social Psychology*, 21, 529-546.
- Cartwright, D. (Ed.). (1951). *Field theory in social science; selected theoretical papers by Kurt Lewin*. New York: Harper & Brothers.
 (カートライト, D. (編集) 猪股佐登留 (訳) (1979) . 社会科学における場の理論 増補版 誠信書房)
- Cash, T. F., Cash, D. W., & Butters, J. W. (1983). "Mirror, mirror, on the wall...?": Contrast effects and self-evaluations of physical attractiveness. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 9, 351-358.
- Chafel, J. A. (1987). Social comparison by young children in preschools: Naturalistic illustrations and teaching implications. *Journal of Research in Childhood Education*, 19, 97-107.
- Collins, R. L. (1996). For better or worse: The impact of upward social comparison on self-evaluations. *Psychological Bulletin*, 119, 51-69.
- Cooley, C. H. (1902). *Human nature and the social order*. New York: Scribner's.
- Cross, S. E., & Madson, L. (1997). Models of the self: Self-construals and gender. *Psychological Bulletin*, 122, 5-37.
- Darley, J. M. & Goethals, G. R. (1980). People's analyses of the causes of ability linked performances. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in Experimental Social Psychology* (Vol.13, pp. 1-37). New York: Academic Press.

- Davis, M. H., Conklin, L., Smith, A., & Luce, C. (1996). Effect of perspective taking on the cognitive representation of persons: A merging of self and other. *Journal of Personality and Social Psychology*, *70*, 713-726.
- DeSteno, D. A., & Salovey, P. (1995). Jealousy and envy. In A. S. R. Manstead & M. Hewstone (Eds.), *The Blackwell encyclopedia of social psychology* (pp. 342-343). Oxford, UK: Basil Blackwell.
- Dunbar, R. (1996). *Grooming, gossip and the evolution of language*. London: Faber & Faber.
 (ダンバー, R. 松浦俊輔・服部清美 (訳) (1998). ことばの起源 猿の毛づくろい、人のゴシップ 青土社)
- Fehr, B. (2004). A prototype model of intimacy interactions in same-sex friendships. In D. J. Mashek & A. P. Aron (Eds.), *Handbook of closeness and intimacy* (pp. 9-26). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Feinberg, M., Neiderhiser, J. M., Simmens, S., Reiss, D., & Hetherington, E. M. (2000). Sibling comparison of differential parental treatment in adolescence: gender, self-esteem, and emotionality as mediators of the parenting-adjustment association. *Child Development*, *71*, 1611-1628.
- Fenigstein, A., Scheier, M. F., & Buss, A. H. (1975). Public and private self-consciousness: Assessment and theory. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, *43*, 522-527.
- Festinger, L. (1950). Informal social communication. *Psychological Review*, *57*, 271-282.
- Festinger, L. (1954). A theory of social comparison processes. *Human Relations*, *7*, 117-140.
- Festinger, L. (1957). *A theory of cognitive dissonance*. Evanston, IL: Row, Peterson & Company.
 (末永俊郎 (監訳) (1965). 認知的不協和の理論 誠信書房)
- Fiske, A. P. (1992). The four elementary forms of sociality: framework for a unified theory of social relations. *Psychological Review*, *99*, 689-723.
- Fliessbach, K., Weber, B., Trautner, P., Dohmen, T., Sunde, U., Elger, C. E., & Falk, A. (2007). Social comparison affects reward-related brain activity in the human ventral striatum. *Science*, *318*, 1305-1308.
- 福島治 (2003). 自己知識の多面性と対人関係 社会心理学研究, *18*, 67-77.
- Gabriel, S., Carvallo, M., Dean, K. K., Tippin, B., & Renaud, J. (2005). How I see me depends on how I see we: The role of attachment style in social comparison. *Personality and Social Psychology Bulletin*, *31*, 1561-1572.

- Gardner, J. W. (1939). Level of aspiration in response to a prearranged sequence of scores. *Journal of Experimental Psychology*, 25, 601-621.
- Gibbons, F. X., & Buunk, B. P. (1999). Individual differences in social comparison: Development of a scale of social comparison orientation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 76, 129-142.
- Gibbons, F. X., & Gerrard, M. (1989). Effects of upward and downward comparison on mood states. *Journal of Social and Clinical Psychology*, 8, 14-31.
- Gilbert, P. (1990). Changes: Rank, status and mood. In S. Fischer & C. L. Cooper (Eds.), *On the move: The psychology of change and transition* (pp. 33-52). New York: Wiley.
- Gilbert, D. T., Giesler, R. B., & Morris, K. A. (1995). When comparisons arise. *Journal of Personality and Social Psychology*, 69, 227-236.
- Gilbert, P., Price, J., & Allan, S. (1995). Social comparison, social attractiveness and evolution: How might they be related? *New Ideas in Psychology*, 13, 149-165.
- Goethals, G. R., & Darley, J. M. (1977). Social comparison theory: An attributional approach. In J. Suls & R. Miller (Eds.), *Social comparison processes: Theoretical and empirical perspectives* (pp.259-278). Hemisphere.
- Goethals, G. R., & Klein, W. M. (2000). Interpreting and inventing social reality: Attributional and constructive elements in social comparison. In J. Suls & L. Wheeler (Eds.), *Handbook of social comparison: Theory and research* (pp. 23-44). New York: Kluwer Academic/Plenum Publishers.
- Grosenick, L., Clement, T. S., & Fernald, R. D. (2007). Fish can infer social rank by observation alone. *Nature*, 445, 429-432.
- Gruder, C. L. (1971). Determinants of social comparison choices. *Journal of Experimental Social Psychology*, 7, 473-489.
- Gruder, C. L., Korth, B., Dichtel, M., & Glos, B. (1975). Uncertainty and social comparison. *Journal of Research in personality*, 9, 85-95.
- Hakmiller, K. L. (1966). Threat as a determinant of downward comparison. *Journal of Experimental Social Psychology*, 2 (Suppl. 1), 32-39.
- Heider, F. (1944). Social perception and phenomenal causality. *Psychological Review*, 51, 358-374.
- Helson, H. (1964). *Adaption level theory: An experimental and systematic approach to behavior*. New York: Harper and Row.
- Helgeson, V. S., & Mickelson, K. D. (1995). Motives for social comparison. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 21, 1200-1209.
- Henderson-King, D., Henderson-King, E., & Hoffmann, L. (2001). Media images and

- women's self-evaluations: Social context and importance of attractiveness as moderators. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 27, 1407-1416.
- Herr, P. M. (1986). Consequences of priming: Judgment and behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 51, 1106-1115.
- Higgins, E. T., Rholes, W. S., & Jones, C. R. (1977). Category accessibility and impression formation. *Journal of Experimental Social Psychology*, 13, 141-154.
- 平石界 (2005). 社会行動の起源:進化心理学からのアプローチ 海保博之(監修) 唐澤かおり (編著) 朝倉心理学講座第 7 巻社会心理学 朝倉書店 pp.163-177.
- 石川利江・佐々木和義・福井至 (1992). 社会的不安尺度 FNE・SADS の日本版標準化の試み 行動療法研究, 18, 10-17.
- 磯部智加衣・長谷川孝治・浦 光博・相馬敏彦 (2004). 二者の関係性とネットワークのあり方が抑うつに及ぼす影響 日本社会心理学会第 45 回大会発表論文集, 148-149.
- 伊藤忠弘 (2002). 自尊感情と自己評価 船津衛・安藤清志 (編) ニューセンチュリー社会心理学 1 自我・自己の社会心理学 北樹出版 pp. 96-111.
- 岩淵千明・田淵創・中里活明・田中国夫 (1981). 自己意識についての研究 日本社会心理学会第 22 回大会発表論文集, 37-38.
- James, W. (1890). *The principles of psychology*. New York: Henry Holt.
- Jones, S. C., & Regan, D. (1974). Ability evaluation through social comparison. *Journal of Experimental Social Psychology*, 10, 133-146.
- 唐沢穰 (2001). 社会的認知とは何か 唐沢穰・池上知子・唐沢かおり・大平英樹 (著) 社会的認知の心理学: 社会を描く心のはたらき ナカニシヤ出版, pp. 3-12.
- Kelley, H. H. (1973). The process of causal attribution. *American psychologist*, 28, 107-128.
- 北山忍 (1998). 自己と感情: 文化心理学からの問いかけ 共立出版
- Klein, W. M. (1997). Objective standards are not enough: Affective, self-evaluative, and behavioral responses to social comparison information. *Journal of Personality and Social Psychology*, 72, 763-774.
- Krueger, J. (2000). The projective perception of the social world: A building block of social comparison processes. In J. Suls & L. Wheeler (Eds.), *Handbook of social comparison: Theory and research* (pp. 323-351). New York: Kluwer Academic/Plenum Publishers.
- Latané, B. (1966). Studies in social comparison: Introduction and overview. *Journal of Experimental Social Psychology*, 2 (Suppl. 1), 1-5.

- Leary, M. R. (2002). The interpersonal basis of self-esteem: Death, devaluation, or deference? In J. Forgas & K. D. Williams (Eds.), *The social self: Cognitive, interpersonal, and intergroup perspectives* (pp. 143-159). New York: Psychology Press.
- Locke, K. D. (2003). Status and solidarity in social comparison: Agentic and communal values and vertical and horizontal directions. *Journal of Personality and Social Psychology, 84*, 619-631.
- Lockwood, P. (2002). Could it happen to you? Predicting the impact of downward comparisons on the self. *Journal of Personality and Social Psychology, 82*, 343-358.
- Lockwood, P., & Kunda, Z. (1997). Superstars and me: Predicting the impact of role models on the self. *Journal of Personality and Social Psychology, 73*, 91-103.
- Lockwood, P., & Kunda, Z. (1999). Increasing the salience of one's best selves can undermine inspiration by outstanding role models. *Journal of Personality and Social Psychology, 76*, 214-228.
- Lockwood, P., Jordan, C. H., & Kunda, Z. (2002). Motivation by positive or negative role model: Regulatory focus determines who will best inspire us. *Journal of Personality and Social Psychology, 83*, 854-864.
- Markman, K. D., & McMullen, M. N. (2003). A reflection and evaluation model of comparative thinking. *Personality and Social Psychology Review, 7*, 244-267.
- Marsh, H. W., & Parker, J. W. (1984). Determinants of student self-concept: Is it better to be a relatively large fish in a small pond even if you don't learn to swim as well? *Journal of Personality and Social Psychology, 47*, 213-231.
- Martin, L. L. (1986). Set / reset: Use and disuse of concepts in impression formation. *Journal of Personality and Social Psychology, 51*, 493-504.
- Martin, R., Suls, J., & Wheeler, L. (2002). Ability evaluation by proxy: Role of maximal performance and related attributes in social comparison. *Journal of Personality and Social Psychology, 82*, 781-791.
- Mead, G. H. (1934). *Mind, self, and society*. Chicago: University of Chicago Press.
- Michinov, E. & Michinov, N. (2001). The similarity hypothesis: a test of the moderating role of social comparison orientation. *European Journal of Social Psychology, 31*, 549-555.
- Miller, C. T., (1982). The role of performance-related similarity in social comparison of abilities: A test of the related attributes hypothesis. *Journal of Experimental Social Psychology, 18*, 513-523.
- Miller, C. T. (1984). Self-schemas, gender, and social comparison: A clarification of the

- related attributes hypothesis. *Journal of Personality and Social Psychology*, 46, 1222-1229.
- Miller, D. T., Turnbull, W., & McFarland, C. (1988). Particularistic and universalistic evaluation in the social comparison process. *Journal of Personality and Social Psychology*, 55, 908-917.
- Moore, D. A., & Kim, T. G. (2003). Myopic social prediction and the solo comparison effect. *Journal of Personality and Social Psychology*, 85, 1121-1135.
- Morse, S., & Gergen, K. J. (1970). Social comparison, self-consistency, and the concept of self. *Journal of Personality and Social Psychology*, 16, 148-156.
- Mosatche, H., & Bragonier, H. (1981). An observational study of social comparison in preschoolers. *Child Development*, 52, 376-378.
- Mussweiler, T. (2003). Comparison processes in social judgment: Mechanisms and consequences. *Psychological Review*, 110, 472-489.
- Mussweiler, T., Rüter, K., & Epstude, K. (2004). The ups and downs of social comparison: Mechanisms of assimilation and contrast. *Journal of Personality and Social Psychology*, 87, 832-844.
- Mussweiler, T., Rüter, K., & Epstude, K. (2006). The why, who, and how of social comparison: A social-cognition perspective. In S. Guimond (Ed). *Social comparison and social psychology: Understanding cognition, intergroup relations and culture* (pp. 229-246). Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- 中村陽吉 (編) (1990). 「自己過程」の社会心理学 東京大学出版会
- 大久保暢俊 (2009). 社会的比較と最後通牒ゲーム 日本社会心理学会第 50 回発表論文集, 660-661.
- 押見輝男 (1992). 自分を見つめる自分: 自己フォーカスの社会心理学 サイエンス社
- Parducci, A. (1965). Category judgment: A range-frequency model. *Psychological Review*, 72, 407-418.
- Parker, G. A. (1974). Assessment strategy and the evolution of fighting behavior. *Journal of Theoretical Biology*, 47, 223-243.
- Petty, R. E., & Wegener, D. T. (1993). Flexible correction processes in social judgment: Correcting for context-induced contrast. *Journal of Experimental Social Psychology*, 29, 137-165.
- Prenter, J., Elwood, R. W., & Taylor, P. W. (2006). Self-assessment by males during energetically costly contests over precopula females in amphipods. *Animal Behavior*, 72, 861-868.
- Ruble, D. N. (1983). The development of social comparison processes and their role in

- achievement-related self-socialization. In E. T. Higgins, D. N. Ruble, & W. W. Hartup (Eds.), *Social cognition and social development: A socio-cultural perspective* (pp. 134-157). New York: Cambridge University Press.
- Rüter, K., & Mussweiler, T. (2005). Bonds of friendship ? Comparative self-evaluations evoke the use of routine standards. *Social Cognition, 23*, 137-160.
- Schoeneman, T. J. (1981). Reports of the sources of self-knowledge. *Journal of Personality, 49*, 284-294.
- Schoeneman, T. J., Tabor, L. E., & Nash, D. L. (1983). Children's reports of the sources of self-knowledge. *Journal of Personality, 52*, 124-137.
- Schwarz, N., & Bless, H. (1992). Constructing reality and its alternatives: Assimilation and contrast effects in social judgment. In L. L. Martin & A. Tesser (Eds.), *The construction of social judgments* (pp. 217-245). Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Sears, P. S. (1940). Level of aspiration in academically successful and unsuccessful children. *Journal of Abnormal and Social Psychology, 35*, 498-536.
- Shaw, M. E., & Costanzo, P. R. (1982). *Theories of social psychology*. New York: McGraw-Hill.
- (シヨー , M. E. & コスタンゾー , P. R. 古畑和孝 (監訳) (1984). 社会心理学の理論 I サイエンス社)
- Smith, W. P., & Sachs, P. (1997). Social comparison and task prediction: Ability similarity and the use of a proxy. *British Journal of Social Psychology, 36*, 587-602.
- Stapel, D. A., & Koomen, W. (2000). Distinctness of others, mutability of selves: Their impact on self-evaluations. *Journal of Personality and Social Psychology, 79*, 1068-1087.
- Stapel, D. A., & Koomen, W. (2001). Let's not forget the past when we go to the future: On our knowledge of knowledge accessibility effects. In G. B. Moskowitz (Ed.), *Cognitive social psychology: The Princeton symposium on the legacy and future of social cognition* (pp. 229-246). Mahwah, NJ: Erlbaum Associates.
- Stapel, D. A., & Suls, J. (2004). Method matters: Effects of explicit versus implicit social comparisons on activation, behavior, and self-views. *Journal of Personality and Social Psychology, 87*, 860-875.
- Stapel, D. A., & Tesser, A. (2001). Self-activation increases social comparison. *Journal of Personality and Social Psychology, 81*, 742-750.
- 菅原健介 (1984). 自意識尺度 (self-consciousness scale) 日本語版作成の試み 心理学研究, **55**, 184-188.
- Suls, J., & Wheeler, L. (2000). A selective history of classic and neo-social comparison theory. In J. Suls & L. Wheeler (Eds.), *Handbook of social comparison: Theory and*

- research* (pp. 3-19). New York: Kluwer Academic/Plenum Publishers.
- Suls, J., & Wheeler, L. (2008). A reunion for approach/avoidance motivation and social comparison. In A. Elliot (Eds.), *Handbook of approach and avoidance motivation*. (pp. 585-600). New York: Psychology Press.
- Suls, J., & Wheeler, L. (2011). Social comparison: From group dynamics to social cognition. In P. Van Lange, A. Kruglanski, & E.T. Higgins (Eds.), *Handbook of Theories of Social Psychology* (pp. 460-482). London: Sage Publications.
- Suls, J., Gastorf, J., & Lawhon, J. (1978). Social comparison choices for evaluating a sex- and age-related ability. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 4, 102-105.
- Suls, J., Martin, R., & Wheeler, L. (2002). Social comparison: Why, with whom, and with what effect? *Current Direction in Psychological Science*, 11, 159-163.
- 高田利武 (1994). 日常事態における社会的比較の様態 奈良大学紀要, 22, 201-210.
- 高田利武 (2004). 「日本人らしさ」の発達社会心理学：自己・社会的比較・文化 ナカニシヤ出版
- 高田利武 (2011). 新版 他者と比べる自分：社会的比較の心理学 サイエンス社
- Taylor, S. E. (1981). The interface of cognitive and social psychology. In J. Harvey (ed.), *cognition, social behavior, and the environment*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Taylor, S. E., & Lobel, M. (1989). Social comparison activity under threat: Downward evaluation and upward contacts. *Psychological Review*, 96, 569-575.
- Tesser, A. (1988). Toward a self-evaluation maintenance model of social behavior. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (Vol. 21, pp. 181-227). New York: Academic Press.
- Tesser, A., Campbell, J., & Smith, M. (1984). Friendship choice and performance : Self-evaluation maintenance in children. *Journal of Personality and Social Psychology*, 46, 561-574.
- Thomas, G., & Fletcher, G. J. O. (2003). Mind-reading accuracy in intimate relationships: Assessing the roles of the relationship, the target, and the judge. *Journal of Personality and Social Psychology*, 85, 1079-1094.
- Thornton, D. A., & Arrowood, A. J. (1966). Self-evaluation, self-enhancement, and the locus of social comparison. *Journal of Experimental Social Psychology*, 2 (Suppl. 1), 40-48.
- Watson, D., & Friend, R. (1969). Measurement of social-evaluative anxiety. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 33, 448-457.

- Wayment, H. A., & Taylor, S. E. (1995). Self-evaluation processes: Motives, information use, and self-esteem. *Journal of Personality*, 63, 729-757.
- Wedell, D. H., & Parducci, A. (2000). Social comparison: Lessons from basic research on judgment. In J. Suls & L. Wheeler (Eds.), *Handbook of social comparison: Theory and research* (pp. 223-252). New York: Kluwer Academic/Plenum Publishers.
- Wheeler, L. (1966). Motivation as a determinant of upward comparison. *Journal of Experimental Social Psychology*, 2 (Suppl. 1), 27-31.
- Wheeler, L., Koestner, R., & Driver, R. E. (1982). Related attributes in the choice of comparison others: It's there, but it isn't all there is. *Journal of Experimental Social Psychology*, 18, 489-500.
- Wheeler, L., & Miyake, K. (1992). Social comparison in everyday life. *Journal of Personality and Social Psychology*, 62, 760-773.
- Wheeler, L., Shaver, K. G., Jones, R. A., Goethals, G. R., Cooper, J., Robinson, J. E., Gruder, C. L., & Butzine, K. W. (1969). Factor determining the choice of a comparison other. *Journal of Experimental Social Psychology*, 5, 219-232.
- White, K. & Lehman, D. R. (2005). Culture and social comparison seeking: The role of self-motives. *Personality and Social Psychology Bulletin* 31, 232-242.
- Wills, T. A. (1981). Downward comparison principles in social psychology. *Psychological Bulletin*, 90, 245-271.
- Wills, T. A. (1997). Modes and families of coping: An analysis of social comparison in the structure of other cognitive and behavioral mechanisms. In B. P. Buunk & F. X. Gibbons (Eds.), *Health, coping, & well-being: Perspectives from social comparison theory* (pp. 167-194). Mahwah, NJ: Erlbaum.
- Wilson, T. D., Houston, C., Etling, K. M., & Brekke, N. (1996). A new look at anchoring effects: Basic anchoring and its antecedents. *Journal of Experimental Psychology: General*, 125, 387-402.
- Wood, J. V. (1989). Theory and research concerning social comparisons of personal attributes. *Psychological Bulletin*, 106, 231-248.
- Wood, J. V. (1996). What is social comparison and how should we study it? *Personality and Social Psychology Bulletin*, 22, 520-537.
- Wood, J. V., & Lockwood, P. (1999). Social comparisons in dysphoric and low self-esteem people. In R. M. Kowalski & M. R. Leary (Eds.), *The social psychology of emotional and behavioral problems: Interfaces of social and clinical psychology*.
- (コワルスキー, R. M. & レアリー, M. R. 安藤清志・丹野義彦(監訳) (2001).

臨床社会心理学の進歩 北大路書房)

Wood, J. V., & Wilson, A. E. (2003). How important is social comparison? In M. R. Leary & J. P. Tangney (Eds.), *Handbook of self and identity* (pp. 344-366). New York: Guilford Press.

山岸俊男 (1998). 信頼の構造: こころと社会の進化ゲーム 東京大学出版会

Young, J. (1999). *The exclusive society: Social exclusion, crime and difference in late modernity*. London: Sage Publications.

(青木秀男・伊藤泰郎・岸政彦・村澤真保呂 (訳) (2007). 排除型社会: 後期近代における犯罪・雇用・差異 洛北出版)

Zanna, M. P., Goethals, G. R., & Hill, J. F. (1975). Evaluating a sex-related ability: Social comparison with similar others and standard setters. *Journal of Experimental Social Psychology*, *11*, 86-93.

Zell, E., & Alicke, M. D. (2009). Contextual neglect, self-evaluation, and the frog-pond effect. *Journal of Personality and Social Psychology*, *97*, 467-482.

謝 辞

本稿を完成させるにあたり、多くの方にお世話になりました。

特に、指導教員の安藤清志先生（東洋大学社会学部教授）には、学部時代から非常に多くのことを教えていただきました。大学院に進学してからも、研究への自由な取り組みを認めてくださる一方で、たくさんの貴重なご指導やご助言をくださいました。ここに深く感謝申し上げます。黒沢香先生（東洋大学社会学部教授）、今井芳昭先生（慶應義塾大学文学部教授）、北村英哉先生（東洋大学社会学部教授）には、博士論文をまとめる際に幅広い観点から貴重なご指摘をくださいました。心よりお礼申し上げます。

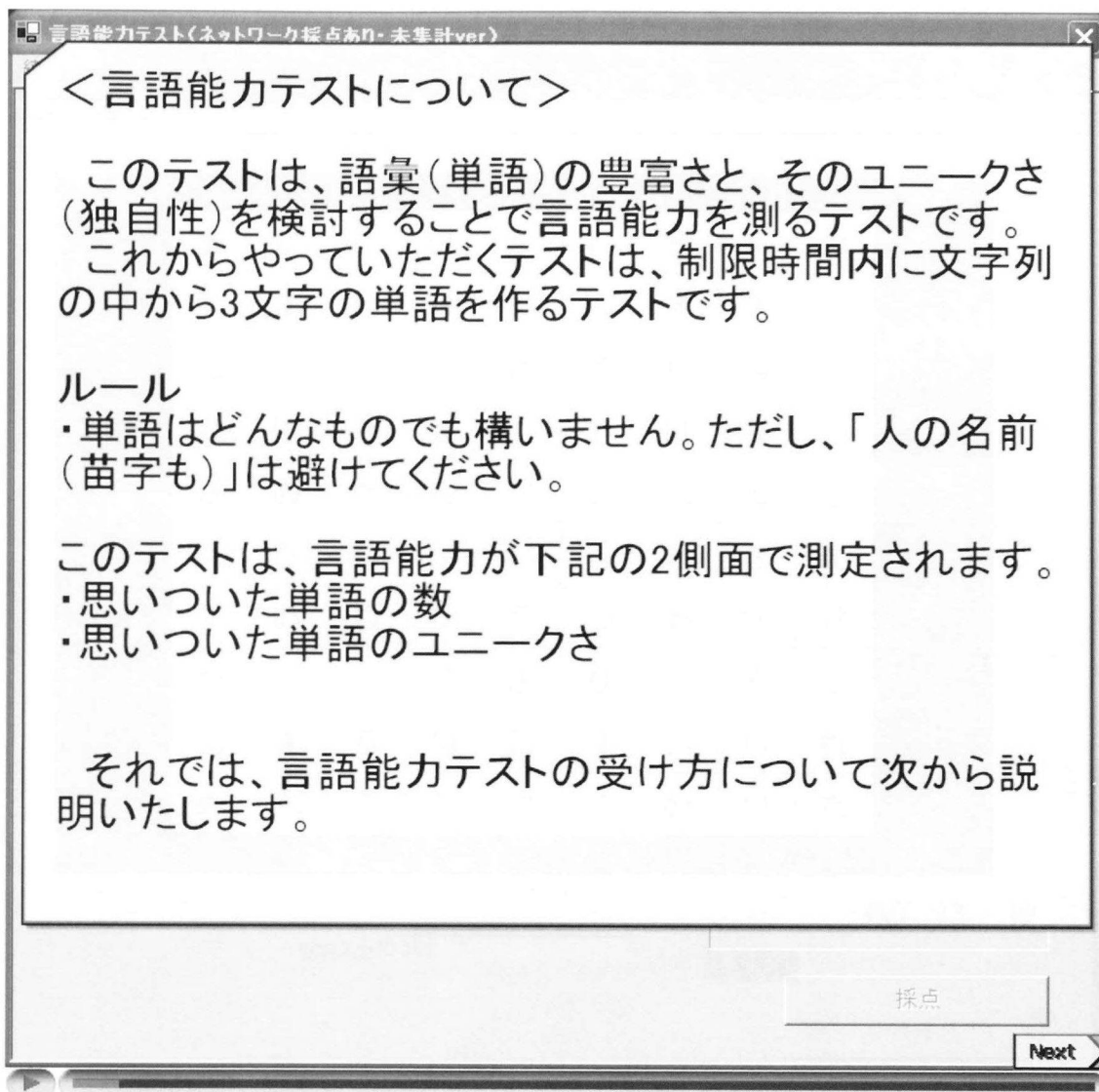
また、研究を進める上で公私ともにたくさんの方にご支援や励ましをいただきました。特に、鈴木公啓先生（東京未来大学）、結城裕也さん、佐藤史緒さん、本田周二さん（神戸学院大学）、細川隆史さん、相馬拓郎さん、関領介さんには、実験やリクルートでお世話になりました。下田俊介さん（東洋大学 HIRC21）には、引用文献や図表などの作成を手伝っていただきました。

そのほかにも多くの先生、大学院生、学部生の皆さまにご協力いただきました。こうして博士論文を書き上げることができたのも、ひとえに皆さまからのご支援があったからです。本当にありがとうございました。

付 録

- 研究 1：言語能力テストの説明
- 研究 1：言語能力テスト（PC 版）
- 研究 1：比較他者，第三者の操作（視点取得あり，上位他者群）
- 研究 1：第三者の重要度と親密度
- 研究 2：言語テストの説明
- 研究 2～4：言語能力テスト（紙版）
- 研究 2：第三者の操作
- 研究 3：言語テストの説明
- 研究 3：第三者，比較他者の操作
- 研究 4：言語テストの説明
- 研究 4：第三者の注目の操作（単語の数群）
- 研究 4：第三者の注目の操作（単語のユニークさ群）
- 研究 1～4：自己評価の項目
- 研究 1～4：比較他者評価の項目
- 研究 2：平均他者評価の項目
- 研究 3～4：相対評価，位置推測の項目
- 研究 1～4：操作チェック項目
- 研究 5：第三者の操作（新聞記事：賞賛群）
- 研究 5：比較他者評価の項目
- 研究 5：自己評価の項目
- 研究 6：邦訳された社会的比較尺度
- 研究 7：他者の想起の操作
- 研究 7～8：邦訳された社会的比較尺度の状況改変版
- 研究 8：自己活性化の操作

研究1：言語能力テストの説明



言語能力テスト(ネットワーク採点あり・未集計ver)

<言語能力テストについて>

このテストは、語彙(単語)の豊富さと、そのユニークさ(独自性)を検討することで言語能力を測るテストです。
これからやっていただくテストは、制限時間内に文字列の中から3文字の単語を作るテストです。

ルール

- ・単語はどんなものでも構いません。ただし、「人の名前(苗字も)」は避けてください。

このテストは、言語能力が下記の2側面で測定されます。

- ・思いついた単語の数
- ・思いついた単語のユニークさ

それでは、言語能力テストの受け方について次から説明いたします。

採点

Next

*この後、言語テストの操作方法の動画を流した。

研究1：言語能力テスト（PC版）

言語能力テスト (未集計ver)

練習 本番

あ	が	い	け	か	し	ど	ん	つ
か	ま	し	み	い	ん	ず	き	う
た	う	ほ	る	ど	き	し	ね	そ
り	け	き	せ	へ	や	は	う	く
さ	お	き	ん	な	じ	ん	ま	ぶ
だ	ひ	み	は	い	ら	さ	き	え
す	お	ね	だ	う	つ	あ	ぼ	せ
か	み	ご	ず	ぎ	ひ	い	ん	ら
む	き	る	ね	じ	す	い	じ	れ
め	ん	う	だ	つ	こ	わ	い	た

残り 93 秒

回答入力 ひるね

採点

* 画面は本番の10×9の文字列

研究1：比較他者，第三者の操作（視点取得あり，上位他者群）

以下に、去年実際に同様のテストを受けた人（本学学生；Aさん）の言語能力テストの結果を提示します。この学生さんの結果を、もしあなたの親しい友人（あなたと同性の友人）が見たとして、友人がこの人物をどのような人だと思うか想像してみてください。

はじめに、あなたの思い浮かべた同性の友人のイニシャル（例；I.K）を以下の括弧内に記入してください。

()

記入したら以下の結果を見て、問いに答えてください。

Aさんの結果↓

あなたの総合得点は **21点** です。

学部：社会 学科：

学年： 性別：

それでは、以下の質問にお答えください。

問1：この人物を以下の図形にたとえるとするならば、もっとも近いイメージはどれですか？ 以下のアルファベットの一つに丸をつけてください。

A) 三角形 B) 円形 (丸) C) 四角形 D) 星型 (☆)

問2：この人物を以下の色にたとえるとするならば、もっとも近いイメージはどれですか？ 以下のアルファベットの一つに丸をつけてください。

A) 赤色 B) 青色 C) 黄色 D) 白色

* 学部，学科，学年，性別は実験参加者と同じにした。

* 下位他者群では上記の21点を7点に変更した。

* 視点取得なし群では，上記の下線部分を“この学生さんの結果をあなたがみて、この人物がどのような人だと思うか想像してみてください”に変更した。

研究 1：第三者の重要度と親密度

先ほどの実験で 思いうかべた友人についてお聞きします。 その人は自分にとって どのくらい重要な人ですか？	全く 重要 で ない						非 常 に 重 要 だ
	1	2	3	4	5	6	7

先ほどの実験で 思いうかべた友人についてお聞きします。 その人とはどのくらい親しいと思いますか？	親 し く な い						親 し い
	1	2	3	4	5	6	7

研究2：言語テストの説明

言語能力テスト

このテストは、語彙(単語)の豊富さと、そのユニークさ(独自さ)を検討することで言語能力を測るテストです。

これからやっていただくテストは、制限時間内に以下の文字列の中から3文字の単語を作るテストです。

例

の	ぐ	あ	ろ
お	お	た	け
び	き	そ	る
ひ	つ	ば	せ
は	へ	し	う

回答

1	おばけ	11
<hr style="border-top: 1px dashed black;"/>		
2	きせつ	12
<hr style="border-top: 1px dashed black;"/>		
3		13
<hr style="border-top: 1px dashed black;"/>		
4		14
<hr style="border-top: 1px dashed black;"/>		
5		15
<hr style="border-top: 1px dashed black;"/>		
6		16
<hr style="border-top: 1px dashed black;"/>		
7		17
<hr style="border-top: 1px dashed black;"/>		
8		18
<hr style="border-top: 1px dashed black;"/>		
9		19
<hr style="border-top: 1px dashed black;"/>		
10		20

ルール

- 1: 単語はどんなものでも構いません。ただし、人の名前は避けてください。
- 2: 一度使った文字は使えません(上記の例ですと、「お」「ま」「け」、「き」「せ」「つ」を使用済み)。
ただし、「お」は文字列の中に2つあるのでもう一回使えます。
- 3: 使った文字には「×」をつけてください。

このテストは、「思いついた単語の数」と「思いついた単語のユニークさ(独自さ)」の2つの側面で判定します。この2つの側面のどちらかが優れているからといって、もう一方の側面が優れているわけではありません。たとえば、思いつく単語の数が多い人が必ずしもユニークな単語を思いつくとは限りません。逆に、ユニークな単語を思いつく人が必ずしも単語の数が多いいわけではありません。

次のページで練習問題を1分間行います。その後、さらに次のページで本番問題を2分間行います。それでは次のページを開いてください。

*さらに、口頭で“真の得点を知るには専門の機関で分析される必要がある”，“今回は言語テストを受けたときの感想を聞くのが主な目的であり、個々人の得点に興味はない，それゆえ詳細なフィードバックは行わない”の2点を口頭で教示した。

研究 2～4：言語能力テスト（紙版）

本番

あ	が	い	け	か	し	ど	ん	つ
か	ま	し	み	い	ん	ず	き	う
た	う	ほ	る	ど	き	し	ね	ぞ
り	け	き	せ	へ	や	は	う	く
さ	お	き	ん	な	じ	ん	ま	ぶ
だ	ひ	み	は	い	ら	さ	き	え
す	お	ね	だ	う	つ	あ	ぼ	せ
か	み	ご	ず	ぎ	ひ	い	ん	ら
む	き	る	ね	じ	す	い	じ	れ
め	ん	う	だ	つ	こ	わ	い	た

回答

1	11

2	12

3	13

4	14

5	15

6	16

7	17

8	18

9	19

10	20

ありがとうございました。参考までに、同じテストを受けた学生の回答と、その回答を見た他の学生の感想を次のページに記載しています。それらをよく読んで、その後の質問に答えてください。これ以降は個人のペースでページをめくってください。

研究 2：第三者の操作

以下の枠線内に、みなさまがやったのと同じテスト(本番)を受けた〇〇〇〇専門学校の去年の学生の回答と、その回答を見た他の学生の感想が記載されています。それらをじっくり読んで今回のテストをイメージしてください。また、プライバシーの関係上、回答した学生さんの名前は「Aさん」とさせていただきます。

Aさんの回答

1 あいず	11 はしら
2 ほんき	12 いはん
3 かきね	13 けんか
4 せいり	14 だえん
5 ねいき	15 どうさ
6 うなぎ	16 むすめ
7 ひつじ	17 すがた
8 おみせ	18
9 くうき	19
10 やしき	20

Aさんについての感想(他の学生3名より抜粋)

・この人(Aさん)の単語の数はすばらしいと思います。

(品川アカデミー専門学校 経営情報学科1年)

・Aさんの言語能力は高いのではないのでしょうか。なぜなら、思いつく単語がユニークだからです。

(品川アカデミー専門学校 経営情報学科1年)

・Aさんの回答を見て、単語の数がすごいと思った。

(品川アカデミー専門学校 経営情報学科1年)

*外集団第三者+比較他者群の例。図中の“〇〇〇〇専門学校”には実験参加者が実際に所属している学校名を記載した。

*内集団第三者+比較他者群の用紙には、品川アカデミー専門学校(架空)、学科の所に実験参加者が所属している学校名、学科を記載した。

*比較他者のみ群では、“Aさんについての感想～”以下を記載しなかった。統制群は上記の用紙を配付しなかった。

研究3：言語テストの説明

言語能力テスト

このテストは、語彙(単語)の豊富さを検討することで言語能力を測るテストです。
これからやっていただくテストは、制限時間内に以下の文字列の中から3文字の単語を作るテストです。

例

の	ぐ	あ	ろ
お	お	た	け
び	き	そ	る
ひ	つ	ば	せ
は	へ	し	う

回答

・ おばけ ・
.....
・ きせつ ・
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....

ルール

- 1: 単語はどんなものでも構いません。ただし、人の名前は避けてください。
- 2: 一度使った文字は使えません(上記の例ですと、「お」「ほ」「け」、「き」「せ」「つ」を使用済み)。ただし、「お」は文字列の中に2つあるのもう一回使えます。
- 3: 使った文字には「×」をつけてください。

このテストは、「思いついた単語の数」を言語の流暢さとして判定します。

次のページで練習問題を1分間行います。その後、さらに次のページで本番問題を2分間行います。それでは次のページを開いてください。

研究3：第三者，比較他者の操作

以下の枠線内に、みなさまがやったのと同じテスト(本番)を受けた〇〇〇〇専門学校の去年の学生の回答と、その回答を見た他の学生の感想が記載されています。それらをじっくり読んで今回のテストをイメージしてください。また、プライバシーの関係上、回答した学生さんの名前は「Aさん」とさせていただきます。

Aさんの回答

- ・ あいず
- ・ うなぎ
- ・ かきね
- ・ くうき
- ・
- ・
- ・
- ・
- ・
- ・
- ・

Aさんについての感想(他の学生3名より抜粋)

- ・この人(Aさん)の単語の数はすばらしいと思います。
(品川アカデミー専門学校 経営情報学科1年)
- ・Aさんの言語能力は高いのではないのでしょうか。なぜなら、思いつく単語の数が多いからです。
(品川アカデミー専門学校 経営情報学科1年)
- ・Aさんの回答を見て、単語の数がすごいと思った。
(品川アカデミー専門学校 経営情報学科1年)

*外集団第三者+下位他者群の例。図中の“〇〇〇〇専門学校”には実験参加者が実際に所属している学校名を記載した。

*内集団第三者群の用紙には、品川アカデミー専門学校(架空)、学科の所に実験参加者が所属している学校名、学科を記載した。

*上位他者群では作成された単語数が15個であった。

研究4：言語テストの説明

言語能力テスト

このテストは、語彙(単語)の豊富さと、そのユニークさ(独自さ)を検討することで言語能力を測るテストです。

これからやっていただくテストは、制限時間内に以下の文字列の中から3文字の単語を作るテストです。

例

の	ぐ	あ	ろ
お	お	た	け
び	き	そ	る
ひ	つ	ば	せ
は	へ	し	う

回答

1	おばけ	11
2	きせつ	12
3		13
4		14
5		15
6		16
7		17
8		18
9		19
10		20

ルール

- 1: 単語はどんなものでも構いません。ただし、人の名前は避けてください。
- 2: 一度使った文字は使えません(上記の例ですと、「お」「ば」「け」、「き」「せ」「つ」を使用済み)。ただし、「お」は文字列の中に2つあるのでもう一回使えます。
- 3: 使った文字には「×」をつけてください。

このテストは、「思いついた単語の数」と「思いついた単語のユニークさ(独自さ)」の2つの側面で判定します。この2つの側面のどちらかが優れているからといって、もう一方の側面が優れているわけではありません。たとえば、思いつく単語の数が多くても必ずしもユニークな単語を思いつくとは限りません。逆に、ユニークな単語を思いつく人が必ずしも単語の数が多くとも限りません。

次のページで練習問題を1分間行います。その後、さらに次のページで本番問題を2分間行います。それでは次のページを開いてください。

研究4：第三者の注目の操作（単語の数群）

以下の枠線内に、みなさまがやったのと同じテスト（本番）を受けた〇〇〇〇専門学校の去年の学生の回答と、その回答を見た他の学生の感想が記載されています。それらをじっくり読んで今回のテストをイメージしてください。また、プライバシーの関係上、回答した学生さんの名前は「Aさん」とさせていただきます。

Aさんの回答

- | | |
|--------|--------|
| 1 あいず | 11 はしら |
| 2 ほんき | 12 いはん |
| 3 かきね | 13 けんか |
| 4 せいり | 14 だえん |
| 5 ねいき | 15 どうさ |
| 6 うなぎ | 16 |
| 7 ひつじ | 17 |
| 8 おみせ | 18 |
| 9 くうき | 19 |
| 10 やしき | 20 |

Aさんについての感想(他の学生3名より抜粋)

・この人(Aさん)の単語の数は素晴らしいと思います。

(〇〇〇〇専門学校 理学療法学科1年)

・Aさんの言語能力は高いのではないのでしょうか。なぜなら、思いつく単語の数が多いからです。

(〇〇〇〇専門学校 理学療法学科1年)

・Aさんの回答を見て、単語の数がすごいと思った。

(〇〇〇〇専門学校 理学療法学科1年)

* 図中の“〇〇〇〇専門学校”には実験参加者が実際に所属している学校名を記載した。

研究4：第三者の注目の操作（単語のユニークさ群）

以下の枠線内に、みなさまがやったのと同じテスト（本番）を受けた〇〇〇〇専門学校の去年の学生の回答と、その回答を見た他の学生の感想が記載されています。それらをじっくり読んで今回のテストをイメージしてください。また、プライバシーの関係上、回答した学生さんの名前は「Aさん」とさせていただきます。

Aさんの回答

1 あいず	11 はしら
2 ほんき	12 いはん
3 かきね	13 けんか
4 せいり	14 だえん
5 ねいき	15 どうさ
6 うなぎ	16
7 ひつじ	17
8 おみせ	18
9 くうき	19
10 やしき	20

Aさんについての感想(他の学生3名より抜粋)

・この人(Aさん)の単語のユニークさはすばらしいと思います。

(〇〇〇〇専門学校 理学療法学科1年)

・Aさんの言語能力は高いのではないのでしょうか。なぜなら、思いつく単語がユニークだからです。

(〇〇〇〇専門学校 理学療法学科1年)

・Aさんの回答を見て、単語のユニークさがすごいと思った。

(〇〇〇〇専門学校 理学療法学科1年)

* 図中の“〇〇〇〇専門学校”には実験参加者が実際に所属している学校名を記載した。

研究 1～4：自己評価の項目

先ほどのテストの**あなた自身の結果(本番)**についてお聞きします。以下の質問に、もっともあてはまると思う番号に○をつけてください。

回答のつけ方(「6」の場合) (右の例のように、数字に丸をつけてください)	1 2 3 4 5 6 7
Q1 どのくらいこのテストが できたと思いますか	全く でき なか った 非 常 に でき た 1 2 3 4 5 6 7
Q2 この結果にどのくらい 満足していますか	非 常 に 不 満 足 非 常 に 満 足 1 2 3 4 5 6 7
Q3 同じテストをもう一度やったら どの程度できると思いますか	よ く でき ない よ く でき る 1 2 3 4 5 6 7
Q4 このテストと似たようなテストを やったらどの程度できそうですか	た ぶ ん で き ない た ぶ ん で き る 1 2 3 4 5 6 7
Q5 あなたの言語能力は どのくらいだと思いますか	全 く ない 非 常 に ある 1 2 3 4 5 6 7

研究 1～4：比較他者評価の項目

先ほど読んだ**Aさんの結果**についてお聞きします。以下の質問に、もっともあてはまると思う番号に○をつけてください。

Q1	全くできなかった	非常にできた					
Aさんは、どのくらいテストができたと思いますか	1	2	3	4	5	6	7

Q2	非常に不満足	非常に満足					
Aさん自身はこの結果にどのくらい満足していると思いますか	1	2	3	4	5	6	7

Q3	よくできない	よくできる					
Aさんは、同じテストをもう一度やったらどの程度できると思いますか	1	2	3	4	5	6	7

Q4	たぶんできない	たぶんできる					
Aさんは、このテストと似たようなテストをやったらどの程度できそうですか	1	2	3	4	5	6	7

Q5	全くない	非常にある					
Aさんの言語能力はどのくらいだと思いますか	1	2	3	4	5	6	7

* 研究 1, 研究 3, 研究 4 では Q2 の項目が無かった。

研究 2：平均他者評価の項目

先ほどのテスト(本番)を平均的な専門学校生が受けた場合を考えてください。以下の質問に、もっともあてはまると思う番号に○をつけてください。

回答のつけ方(「4」の場合)
(右の例のように、数字に丸をつけてください)

1	2	3	④	5	6	7
---	---	---	---	---	---	---

Q1

平均的な専門学校生は、どのくらいこのテストができると思いますか

全 く で き な い						非 常 に で き る
1	2	3	4	5	6	7

Q2

平均的な専門学校生がこのテストと似たようなテストをやったらどの程度できそうですか

た ぶ ん で き な い						た ぶ ん で き る
1	2	3	4	5	6	7

Q3

平均的な専門学校生の言語能力はどのくらいだと思いますか

全 く な い						非 常 に あ る
1	2	3	4	5	6	7

研究 3～4：相対評価，位置推測の項目

Aさんに比べて、あなたはどのくらい
このテストができたと思いますか

	A さん よ り 全 く で き な か っ た			A さん と 同 じ			A さん よ り 非 常 に で き た
1	2	3	4	5	6	7	

*相対自己評価項目

あなたに比べて、Aさんはどのくらい
このテストができたと思いますか

	あ な た よ り 全 く で き な か っ た			あ な た と 同 じ			あ な た よ り 非 常 に で き た
1	2	3	4	5	6	7	

*相対比較他者項目

先ほどのテストのあなた自身の結果(本番)についてお聞きます。自分の単語テストの出来は、一般的な専門学校生の中でどのくらいの位置にあると思いますか？ 最低を0、平均50、最高を100として、自分の位置を推測して、以下の囲み線の中に数字を書いてください。

*位置推測項目

研究 1～4：操作チェック項目

あなたにとって言語能力は 重要だと思いますか	全く 重要 でない						非常 に 重要 だ
	1	2	3	4	5	6	7

* 言語能力の重要度

このテストは どれほど信用できそうですか	全く 信用 できない						非常 に 信用 できる
	1	2	3	4	5	6	7

* テストの信頼性

○○○○専門学校についてお聞きします。 あなたにとって、この学校は どれほど重要ですか？	全く 重要 でない						非常 に 重要 だ
	1	2	3	4	5	6	7

* 所属する学校の重要度

思いつく単語の数が多きことは 重要だと思いますか	全く 重要 でない						非常 に 重要 だ
	1	2	3	4	5	6	7

* 単語の数の重要度

思いつく単語のユニークさは 重要だと思いますか	全く 重要 でない						非常 に 重要 だ
	1	2	3	4	5	6	7

* 単語のユニークさの重要度

研究 5：第三者の操作（新聞記事：賞賛群）

2005年(平成17年)9月15日 木曜日

学生はどこへ

学生同士の間接から見る大学生の実態

学生混迷時代

分岐の割り算ができない、漢字が書けない、学問に対する意欲がみられない。「最近の大学生は学力が低い」と指摘され続けている。しかし、それは本当に実態を反映しているのか。東洋大学（東京都文京区）の社会学部では、「社会調査実習」という科目が設置されている。そこには大学生が語った学生生活の「現場」の声がある。ある学生（Aさん・仮名）の面接インタビューの結果から「現場」にいる大学生の実態に迫った。

—どのような目的で大学に入りましたか？
「受験当時はそれほど明確ではありませんでした。入学して一ヶ月、今は生きる方向性を探る時期と思うようになってから、まずは実的な力を在学中に身につけようと思うようになりました」

—その「力」とは？
「具体的には、コミュニケーション能力、専門的知識、問題解決能力でしょうか。さらに、外国語の習得、サークル活動やインターンシップ、アルバイトなどによるネットワーキングの力を付けています」

—最近、大学生の学力低下

やる気の低下を指摘する声があります。
「入学までに基礎学力をつけておけば、それほど問題はありませんが、やる気に関しては、自らの関心と学習内容をいかに符合させるかが重要だと思います。知識の習得段階では分析的な力が必要ですが、大学の学問で重要なのは知識をまとめてあげる統合力だと思います」

Aさんは成績優秀者で今年には奨学金を授与されています。
「自らの知的好奇心を満たし、そこで得たものを様々な人と共有することが重要です。成績はその後についてくるものだと思います」

この学生の回答に対し、社会学部教務課の谷口隼人さんは次のように述べている。
「Aさんのように学生生活を送るのは素晴らしいと思います。これからも頑張ってほしいですね」



- * 普通群では、この部分のコメントを、“Aさんのように学生生活を送るのが普通ではないか”と
 思います。これからも頑張ってほしいですね”と変更した。
- * 統制群、自己評価先行群では、この部分を削除した。

研究 5 : 比較他者評価の項目

記事中のAさんについてお聞きします。以下の質問に、もっともあてはまると思う数字を括弧に記入してください。回答は下の1から7の数字でお答えください。

1	2	3	4	5	6	7
全くあてはまらない		どちらともいえない				非常によくあてはまる

1・大学の講義に積極的に取り組んでいる ()

2・優秀な学生である ()

3・対人関係が下手である ()

4・知的好奇心が旺盛である ()

研究5：自己評価の項目

以下の項目について、**あなた自身**にどれほど当てはまると思いますか。もっとも当てはまると思う数字を括弧に記入してください。回答は下の1から7の数字でお答えください。

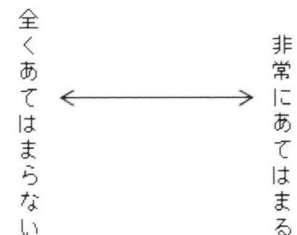
1	2	3	4	5	6	7
あてはまらない						あてはまる

- ・頭がよい ()
- ・成功する ()
- ・無能な ()
- ・知的な ()
- ・意欲的な ()
- ・優柔不断 ()
- ・失敗する ()
- ・積極的な ()
- ・頼りない ()
- ・合理的 ()
- ・要領がよい ()

研究 6：邦訳された社会的比較尺度

日常生活において、たいいてい人は自分と他の人とを比べたりします。たとえば、感じ方、意見、能力、境遇などを他の人と比べたりします。他の人と比べることは特に「良い」とか「悪い」とはいえないもので、人によって比べる頻度や程度も違います。

私たちは、人がどれくらい頻繁に他の人と比べるのかを知りたいと思っています。以下の文章についてあなたがどれほどあてはまるかを答えてください。



1 私は自分の大切な人(家族、恋人など)のやっている事と他の人のやっている事をしばしば比べる	1	2	3	4	5
2 私は、自分が何かをするやり方が他の人と比べてどうであるかについて注意を払っている	1	2	3	4	5
3 自分がどの程度うまく出来たかを知りたい場合、それを他の人がどのくらい上手く出来たかと比べる	1	2	3	4	5
4 私は自分が社会的にどれほどうまくやっているか(たとえば人付き合いの技術や他者からの人気)を、よく他人と比べる	1	2	3	4	5
5 私は自分と他人を比べない	1	2	3	4	5
6 私は、人生において自分が成し遂げてきたことに関して他人とよく比べる	1	2	3	4	5
7 私は他の人とお互いの意見や経験について話をしたいと思う	1	2	3	4	5
8 自分と同じような問題を抱えている人が何を考えているのかを知ろうとすることがよくある	1	2	3	4	5
9 私は同じ状況にいる他の人がどのように対処するであろうかということをつねに知りたいと思う	1	2	3	4	5
10 何かについてもっと知りたい時、私は他の人がそれについてどう考えているのか知ろうとする	1	2	3	4	5
11 自分の置かれている状況について考えるとき、他人と比べて考えることはしない	1	2	3	4	5

研究7：他者の想起の操作

想像してみてください。あなたの考える「優れた他者」は、どのような特徴を持っている人ですか？（例：「頭が良い」、「スポーツが上手」など）。あなたが思う「優れた他者」の特徴を以下の枠線内に3つ書いてみてください。



答えたら次のページに進んでください。

* 上記は優秀他者想起群の操作である。劣等他者想起群では、上記の文章を次のように変更した。
“想像してみてください。あなたの考える「劣った他者」は、どのような特徴を持っている人ですか？（例：「頭が悪い」、「スポーツが下手」など）。あなたが思う「劣った他者」の特徴を以下の枠線内に3つ書いてみてください。”

研究 7~8：邦訳された社会的比較尺度の状況改変版

日常生活において、たいいてい人は自分と他の人とを比べたりします。たとえば、感じ方、意見、能力、境遇などを他の人と比べたりします。他の人と比べることは特に「良い」とか「悪い」とはいえないもので、人によって比べる頻度や程度も違います。

以下の文章についてあなたがどれほどあてはまるかを答えてください。

	<div style="display: flex; justify-content: space-between; align-items: center;"> 全くあてはまらない ←————→ 非常にあてはまる </div>				
	1	2	3	4	5
1 私は自分の大切な人(家族、恋人など)のやっている事と他の人のやっている事を比べたいと思う					
2 私は、自分が何かをするやり方が他の人と比べてどうであるかにたいへん注意を払っている					
3 私がどの程度うまく出来たかを知りたい場合、それを他の人がどのくらい上手く出来たかで比べたいと思う					
4 私は自分が社会的にどれほどうまくやっているか(たとえば人付き合いの技術や他者からの人気)を、他人と比べたいと思う					
5 私は自分と他人を比べたいと思わない					
6 私は、人生において自分が成し遂げてきたことに関して他人と比べたい					
7 私は他の人とお互いの意見や経験について話をしたいと思う					
8 自分と同じような問題を抱えている人が何を考えているのかを知りたい					
9 私は同じ状況にいる他の人がどのように対処するであろうかということを知りたい					
10 何かについてもっと知りたい時、私は他の人がそれについてどう考えているのかを知りたい					
11 自分の置かれている状況について考えるとき、他人と比べて考えることはしない					

研究 8：自己活性化の操作

次のことを想像してみてください。たとえば、あなたは誰かに対して、「自分自身のことをよく知ってほしい」と思っているとします。その人に自分がどのような人物かについて説明するとしたら、あなたは具体的にどのようなことを伝えるでしょうか。以下の空欄に「私は～（空欄）」と書いてあります。それに続く短文を4つ書いてください。

・ 私は

・ 私は

・ 私は

・ 私は

*上記は私的自己活性化の操作である。関係自己活性化群では、上記の文章を次のように変更した。“次のことを想像してみてください。たとえば、あなたは誰かに対して、「もっとも親しい友人と一緒にいるときの自分についてよく知ってほしい」と思っているとします。その人に友人といる時の自分がどのような人物かについて説明するとしたら、あなたは具体的にどのようなことを伝えるでしょうか。以下の空欄に「私は～（空欄）」と書いてあります。それに続く短文を4つ書いてください。”

